ロクでなし魔術講師と光の戦士・改

Rewrite/アルト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、ウルトラマンがロクアカの世界に来ていたら？　これはそんなお話

「宇宙拳法　秘伝の神業ッ！」
「真っ赤に燃える　勇気の力ッ！」
「変幻自在　神秘の光！」
「ウオオオオ押オオ忍ッ!!!」
『ご唱和ください！　我の名を！　ウルトラマンゼェェェェットッ!!!』
「ウルトラマァァァァンッ！　ゼェェェェットッ!!!」

超不定期投稿です

【９／１８追記】長い間投稿してなかったですが、少しずつ復活しようと思います
そのため話の改良を致しました

目次

プロフィール＋プロローグ【9／18更新】――――――――――1
第1章―ご唱和ください、我の名を―
教典（レコード）の始まり――――14
光の戦士の天使奪還作戦――――21
戦士の信念――――――――――33
第2章―叫ぶ少女、バディーゴー！―
掴むぜ！勝利！　二組優勝大大作戦
47
打倒1組！　白猫強化計画――――57
開催！　襲来！　勇気の力！――――66
闇を滅する護りの炎――――――87
第3章―戦車と学修旅行、オレ色に染めあげろ！―
戦車の通る道――――――――98
追憶と未来の日誌（memory Future record）その1
111
神秘の光と氷炎の共演――――124
虹色の光――――――――――137
絆（友情）と絆（ユナイト）――153
追憶のしずく――――――――167
第4章―結婚騒動と正義、変えるぜ！運命！―

システィーナ結婚騒動―セカンド・ジャグリング―　――――――　174
システィーナ結婚騒動―正義と白猫と新時代の勇者―　――――――　192
第５章―闇を飲み込む　黄金の嵐／最強の魔術師の力、お借りします―
未来へと続く道（過去）　――――　207
名無しと最強　――――――　223

プロフィール＋プロローグ【９／１８更新】

主人公

クロス＝ジェネシス

イメージＣＶ・　内山昂輝／Ｍａｃｈｉｃｏ（女性化時）

聖暦１８３８年トーマの月の２７日生まれ（７月２７日生まれ）

純粋で温厚な性格で女性のような見た目の白髪赤眼の青年、裏の世界で暗躍している人物で、魔術と共に黒く変化する腕で相手を殺すことから、通り名は『黒腕』。

なお、その見た目のせいで『黒腕は女』だと勘違いされてるのが玉に瑕。

仲間思いであり、友達のことを殆ど知らない人に言われると、軽蔑の視線を向ける。

５年前に怪獣の攻撃を友達から庇い死にかけた所をウルトラマンゼットに助けられ、それ以来一体化している

魔術特性（パーソナリティ）は『光の戦士』、本来は『変化の逆転・再生』だったのだが、一体化したゼットの影響を受けて魔術特性が変化した

またゼットと一体化していた５年間でウルトラ戦士にも稽古をつけてもらい、戦闘センスが強化され、ゼットの技を一部使用可能になっている、まだオリジナルの光線も使

用可能。
風の魔術が最適性で、その適正度はシスティーナを上回るが、基本的に肉体変化系の魔術を使う。
戦闘中にたまに髪の色が赤色に変化し目から稲妻が迸ることがある。

ウルトラマンゼット
ＣＶ．畠中祐
宇宙警備隊所属のウルトラマン
５年前、次元を超えてロクアカの世界（ロクアカスペース）に侵入したとある怪獣を追ってロクアカスペースにやってきた
友を庇って怪獣の攻撃を受けて、瀕死の状態になってしまったクロスと一体化して怪獣を撃破した
そして、この世界にはとんでもないことが起きるという知らせを光の国から受け、特例でしばらくロクアカスペースにとどまることになった。

所持アイテム
・ウルトラゼットライザー

三つのメダルで変身出来る変身アイテム、現在変身出来る組み合わせは【アルファエッジ】のみで、残りは【ライトニングジェネレート】と【Ｍ７８流　竜巻閃光斬】を発動させるだけのメダルと、ニュージェネレーションのメダルを持っている。

・赫耀銃剣【クリムゾンセイバー】

クロスが一から作り上げた銃剣

銃先の刃が光によって一本の剣に変化させることが出来る

素材は赤色に輝く物質【原初真銀（プリミティブ・ミスリル）】によって構築されている

最大装填弾数は６発、ウルトラメダルを１枚読み込ませる機能が付いており、メダルのウルトラマンの技をモチーフにした魔弾を撃ったり、光剣に纏わせたりすることができる（ウルトラマンの場合、スペシウム光線と同等の威力を持つ魔術防御無効の魔弾【スペシウムマグナム】を放てる）

・インビジブルコート

クロスが作り出したコート

闇夜に紛れるためにもっと黒い染料で作られたフード付きコートで、Ａ級軍用魔術に直撃しても破れない耐久力を誇る

・ウルトラスパークランス

材料不明のエメラルド色の杖。

【セルチェンジビーム】を受けて浄化された異能者の少女から出てきた物で、クロスの時でもゼットの時でも使える

トリガーを引いた回数で必殺技を切り替えられる。

・タイガスパーク（ロクアカスペース専用カスタム）

ウルトラマンゼットオリジナル態に変身するアイテム。

ウルトラマンタイガ達が持っているタイガスパークとは違い次元を越えた通信が可能になっている。

ウルトラメダルを読み込ませることによりそのウルトラマンの必殺技が撃てるようになる。（生身限定）

固有魔術（オリジナル）

・ゼスティウム光線

十字の構えから放つ必殺光線。広範囲に及ぶ光線で敵を蹴散らす。　固有魔術の域に入っているが、実際は魔術ではなく、何度の戦闘によってコツを掴んでマナを使うことによってカイトも放てるようになった。　詠唱は不要

・ゼスティウムメーザー

額のビームランプから放つ緑色の光線。ピンポイント攻撃に有効で、抜群の命中率を

誇る。
ビームランプの無いクロスの時は使用不可
・アルファバーンキック
足に炎を纏わせキックを放つ。バリエーションは回し蹴りや飛び蹴りなど複数存在する。
・インフェルノ・ダイナマイト
全身に炎を纏わせ、突撃する自爆技…と思いきや、ウルトラダイナマイトとは違い、あくまで魔術なので自爆もしないし、炎は【トライ・レジスト】で自傷ダメージは軽減できたりする。　詠唱は《我が肉体よ・業火を纏いて・赤になれ》
・エナジー・ゼットスラッガー
ゼットスラッガーと同じ形状の光のブーメランを２本作り出す魔術
クロスの愛用魔術でもある。
詠唱は《受け継がれし・光の刃よ・敵を切り裂け》
・『赫耀滅魔斬／赫耀滅魔弾』
赫耀銃剣【クリムゾンセイバー】の由来である固有魔術
自らの魔術特性を込めたの一太刀（一発）、一度発動したら３時間のクールタイムが必要、外してもクールタイムは必要

これとは別にカイトが持つ魔力を限界まで込めて放つ【覇王赫耀滅魔斬】という技がある。クールタイムは２０時間、その威力は【赫耀滅魔弾】の２０倍の威力を持つ。
この攻撃に触れたマナが関係するものは全てが破壊、または消滅する
・ライトニングジェネレート
コスモス、ネクサス、メビウスのメダルをゼットライザーにセットして放つ必殺技。
空中で雷雲を発生させ、そこから発射される電撃光線で敵を焼き尽くす。
・Ｍ７８流　竜巻閃光斬
ジャック、ゾフィー、ウルトラの父のメダルをゼットライザーにセットして放つ必殺技。
手に持ったゼットライザーから巨大な光剣を出現させ、そこから竜巻を発生させて敵を巻き上げた後（動きを封じるだけの時もある）、光剣を光輪に変形させて敵を切り裂く。
技を発動させる前に光剣で攻撃することも可能である。

魔術以外の技能
・覇気
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥでお馴染みの覇気

覇王色、武装色、見聞色、全てが使用可能であり、得意なのは武装色であり、最大まで硬化すると赤黒く変化する。
更に覇気と肉体変化の魔術を最大限使用する変化形態がある。

オリキャラ（オリキャラが増えるたび追加）
アリサ＝ジェネシス
イメージＣＶ．花澤香菜
聖暦１８３８年グラムの月１６日（１２月１６日生まれ）
白髪赤眼のクロスの義理の妹で、白髪であるので気づかれることは無いが、イグナイト卿とイヴの母親とは別の愛人の元で生まれた子供であり、ウルトラマンゼットの正体を知っている数少ない人間。
クロスは実際は従兄妹であり、アリサの母親がイグナイトから逃げるためにクロスの家に転がり込んだのが関係の始まり。
父親を見たことが無く、顔を見たくないとすら思っている。
５年前に怪獣に襲われた経験があり、その時にクロスとゼットに助けられ、現在はクロスとゼットのことを兄のように慕っている。
炎の魔術を得意としており、裏の世界では『炎の戦女神』という異名をつけられてい

る。

近接攻撃が得意なイグナイトの血を引いているが、彼女は護ることやカウンターが強く、自分の陣地を作り、そこで戦うことが一番強い。

固有魔術（オリジナル）

・【炎の荒野（フレア・フィールド）】

アリサが【魔鳳鉱石（フェニックス・インゴット）】で作られた特殊な長剣を媒体として作られる戦闘用不連続時空間。

赤い空に紫色のオーロラが満ち、地面は全面炎に満ちている。

この空間内部での炎は全てアルカナが支配し、アルカナ自身の戦闘能力も上昇する。（眷属秘呪（シークレット）【第七園】をこの空間内で発動させても無効化される、更に【第七園】の支配下で『炎の荒野（フレア・フィールド）』を発動させると第七園を上書きして広がる）この空間の維持時間は3分間で、それ以上使うと魔力切れで死亡してしまう可能性がある。

・ゼスティウムバースト

兄達が使う【ゼスティウム光線】に憧れを抱いたアリサが作り出した固有魔術（オリジナル）

L字の構えから放つ火炎放射、【インフェルノ・フレア】と同等、もしくはそれ以上の

威力敵を蹴散らす。詠唱はゼスティウム光線と同じチャージをして技名を叫ぶだけ

・シャイニングブレイズドライヴ

アリサが持つ固有魔術（オリジナル）の中で一番強い魔術。

１０万度の熱線で相手を葬る技。

周囲の被害を防ぎながら放つため、1日に一回しか使えない変わりにあらゆる魔術防御を一切無視して敵に当たる。

詠唱は《真なる業火よ・我が願いに答えて・全てを滅ぼせ》

・ボルケーノ・ダイナマイト

クロスの【インフェルノ・ダイナマイト】の姉妹技である。

全身に炎を纏わせ、突撃する自爆技…と思いきや、ウルトラダイナマイトとは違い、あくまで魔術なので自爆はしないし、炎は【トライ・レジスト】で自傷ダメージは軽減できたりする。

詠唱は《我が肉体よ・烈火を纏いて・赤になれ》

舞台設定

多次元宇宙（マルチバース）の地球が舞台。

怪獣などの生物は今まで確認されていない、そのためウルトラマンがこの世界に現れたという記述は『メルガリウスの魔法使い』たった一例しか存在しない。

（なので本作は対人戦が多いので人間大戦闘がメインになる。）
そしてこの宇宙からＭ７８スペースまではとても遠く、通信しかできない、アナザースペースに至っては連絡すら不可能なほど遠い

５年前―とある街の外れ―
『■■■■■ーーーーッ!!』
『アルファバーンキック!!!!』
巨大な怪獣のタックルと赤と青と銀色の巨人の炎の蹴りがぶつかり合い、爆発が起きる。
最初は互角だと思えたが、巨人の蹴りが怪獣の身体を押し返し、怪獣にダメージを与える。
『■■■■■■■――――ッ!!』
『デュワッ！』
巨人が上空へ飛び上がる。
飛び上がった巨人は両腕を胸の中心にあるＺの形の青い光『カラータイマー』に合わせ、左腕を上に、右腕を下に広げて、エネルギーをＺの形に広げる。
そして右手を頭の横に、左腕を前へ伸ばし、エネルギーを貯める。

怪獣は口にエネルギーを貯めながら空へ飛ぶ。
お互いのエネルギーが溜まり――――
『ゼスティウム光線ッ!!』
腕を十字に組んだ巨人の腕から青い光線、怪獣の口から紫色の光線がそれぞれ発射され、ぶつかる。
最初は互角だったが。
『チェストォォォ!!!』
何処から聞こえた叫びと共に太くなった巨人の光線が、怪獣の光線を押し返し、怪獣に直撃する。
『■■■■■ッ!!!』
怪獣は落下し、一瞬発光すると同時に大爆発を起こす。
巨人はそのすぐそばに着地する。
『ジュワ!』
巨人が上空を見ると――――
『シュワッチ!』
青い光の跡を残しながら上空へ飛び出すと、少し横に飛ぶと、急加速して、『Z』の軌跡を作り出しながら翔び去った。

その巨人が飛び去ったのを見届けた少女は『兄さんはどこなの…？』というと怪獣と巨人が戦闘していた場所へと向かう。
戦闘していた場所に着いた少女が見たものは、兄である少年の姿だった。
その姿を見た少女はたちまち少年に向かって走る。
『兄さんッ！』
その少年…クロスは手を振り少女に声を掛ける
『良かった…無事だったか…』
『それは兄さんが庇ってくれたからだよ！　それにほんとうに死んじゃったと思ったよ…』
『それはさっきの巨人にギリギリ助けられてね…』
その後少年達の親が駆け付けて、2人を連れて帰った

現在―アルザーノ帝国南部　ヨクシャー地方『フェジテ』とある一軒家―
青年が1枚の写真を見ていた、その写真はこの青年の昔の姿と自身の妹と開けた森の中で撮った写真である。
「懐かしいなぁ…」
『何が懐かしいんでございますか？』

「この写真は、５年前、俺とゼットが一体化して戦った後の写真だ」
『あぁ…あの時のですか…　確かに懐かしゅうございますねぇ』
「お前また言葉遣いが変だぞ、もう５年も地球に居るのにな」
『えっ、マジ？　やっぱり地球の言葉はウルトラ難しいぜ』
　女性にも見間違えそうな見た目の青年…【クロス＝ジェネシス】は自身と一体化している巨人【ウルトラマンゼット】と昔の写真を見ていた。
「あの時は大変だったぜ…死んだと思ったら目の前に巨人が居て…」
『あのときはああするしかなかったんでございますよ』
　と懐かしい思い出に触れていると、妹のアリサに呼ばれ、学院に行く時間になってのに気づく。
「兄さん、もう学校へ行く時間だよ？」
「おっと、もうこんな時間か」
『それじゃあ行きましょうか、クロスの学舎へ』
「なんで古臭いんだよゼット…」
　クロスは写真を棚の上に置いて、荷物を持ってアリサと共に学院へと歩き出した。
　これからいつも通りの日常が違うものになっていくことに気付かずに…

第1章―ご唱和ください、我の名を―教典（レコード）の始まり

クロスは学院の教室で座ってゼットと話をしていた
『クロス、非常勤の講師の方って何方が来るのでございましょうかね？』
『さすがに俺にも分からんなぁ…　知り合いだったら良いよな』
『非常勤だから知り合いの可能性は無いと思うぞ、あとは裏社会の人間達とか…』
『まぁ、裏社会の人間が来るわけ無いだろ』
『それはそうでございますね』
と話をしていると非常勤の講師が来たようで、アリサが声を掛けてきた
「兄さん、非常勤講師の方来たみたい――――　兄さん…あの人に何か見覚えがあるのは気のせいよね…？」
『「へっ？」』
クロスがアリサの声で非常勤講師の姿を見ると――――
『なぁゼット、あの人って…』
『あぁ…　確か帝国宮廷魔導士団の特務分室の方でございますね』

『『まさかの知り合いだった!!』』

非常勤講師――――【グレン＝レーダス】は勤務してから様々なやらかしをした

速攻で自習やら、決闘を申し込んだシスティーナにボロ負けした挙げ句めっちゃ不正して無効試合にしたり、女子更衣室に入ったり（非常勤という立場上更衣室の場所を確認する訳ないし、この事件に関してはドンマイとしか言いようがない）

その様子を見て知り合いであるクロスとアリサ（とゼット）は不思議に思い、話をしていた。

「あの人…あんなにひねくれた性格だったか？」

「確かに…1年ほど前に一時的に共闘した時には彼処まで酷くなかった筈よね？」

『それになんだか…魔術に対して嫌悪の感情が出ている気が感じたぞ！』

「1年前か…　あの事件があの人を追い込んだのかな？」

『あの事件は嫌な事件でございますねぇ…』

そういうと3人はあの事件のことを回想する

《グレンくん…逃げて》

《セラッ！》

《アヒャヒャヒャヒャ!!!!!》

《私の前で、友達を死なせてたまるかァ！》
《Ｍ７８流！　竜巻閃光斬ッ！》
「…思い出しただけで吐き気がしてくるな」
「あの人はなんとか後遺症もなく復帰できたとはいえ…」
『それはグレンも病んでしまわれますよな…』
思い出しただけで吐き気催す邪悪な事件を思い出し、グレンの変化も当然だと思った３人であった…

そして、ついにやってしまった。
システィーナの『魔術は偉大で崇高な物』発言にグレンが魔術の裏側『魔術は人殺しに役立つ物』を話してしまい、自らの夢をバカにされたシスティーナはグレンを殴り出ていってしまった。
グレンはアホらしくなってしまったらしく、自習にすることに決めて出ていってしまった。
「あいつら、ガキかよ…　ちょっとフィーベルさん慰め行ってくるわ…」
「ええ、行ってらっしゃい」
飽きれ顔でシスティーナを慰めに行くクロスを見送るアリサ、その目には少しの嫉妬

心があった…
　そしてシスティーナに会ったクロスは
「…何の用よ？」
「ちょっと話しないか？　隣失礼するぜ？」
「別に良いけど…」
　とシスティーナの隣に座るクロス。
　するとシスティーナがクロスに質問をする
「…クロスは先生の話を聞いどう思った？『　魔術は偉大で崇高な物では無い』と思った？」
　と悲しそうにいうシスティーナにクロスは――――
「えい」
「痛っ！」
　おもいっきりデコピンした。
「何するのよ！　相変わらず行動が読めないわね！」
「ハハッ…いつものお前に戻ったな」
「!?」
「…正直な所な、フィーベルさんもグレン先生も尖り過ぎなんだよ、尖っているからこそ

光は闇を、闇は光を認めることが出来ないと思うんだ」
「…」
「確かに魔術は人殺しに役立っていることは事実だ、だが魔術が偉大で崇高な物だってことも紛れもない事実なんだよ」
「！」
「ようは使い手によって魔術は光にも闇にも変わるってことだ、例えば…　黒魔【クイック・イグニッション】
　これはC級の軍用魔術であり、人を傷つけてしまう魔術だ
　だが、発掘現場とかで非常用のダイナマイトとして使える」
「…本当に？」
「あぁ、光と闇は表裏一体、どんな物でも人殺しにもら人助けにも使えるのさ
　だから気を取り直せよフィーベルさん、相手はいくらロクでなしだからって大人だ、言い過ぎたことは分かってる筈だ」
　とクロスが話すとシスティーナは少し考えてたあとすぐに立ち上がった。
「ありがとう、クロス
　お陰でスッキリしたわ」
「なら良かった、じゃあ俺はい「ちょっと待って」ん？　何だ？」

「私のこと、名前で呼んで貰えないかしら？　貴方にフィーベルさんって呼ばれると、何か違和感があるのよ」
「分かった、これからよろしくな、システィーナ」
「いきなり呼び捨て!?　…まぁでも良いけど…
　これからもよろしくお願いするわ」
　クロスとシスティーナは握手をする。
「てかもう時間か、家近いし、一緒に帰るか？」
「ええ、お願いするわ」
　というと2人は歩いて帰っていった。
『なぁ、クロス？』
『ん？　何だ』
『貴方達、距離縮み過ぎじゃありませんか？』
『そうか？』
『…』
　ある意味鈍感なクロスに頭を悩ませるゼットであった。
　翌日グレンの方から謝罪をして、本格的に授業を始めた
　内容は即興改変等の技術に関しての授業で、とても分かりやすく、他の組の生徒や講

師まで授業を聞きにくる程の人気を得た

だがこの裏で、恐ろしい計画が進められていたことは誰も知る由が無かった

光の戦士の天使奪還作戦

「やっべ、寝過ごしたッ！」
『明日も登校日なのに調子に乗って、改変魔術とか固有魔術（オリジナル）を作っていたからやっちまったのですよ』
「それは分かってるけどさ…」
　クロスは【ラビッド・ストリーム】の連続起動、【疾風脚（シュトロム）】と【セルフ・トランスパレント】を併用して、フェジテの街を飛び越えていく。
　クロスが、なぜそこまで急いでいるのかというと、自身のクラスが担任が辞めたことによって、1日だけ休みになってしまい、今日がそれを補うために学院に行かなきゃいけない日なのだ。
「アリサのやつ、何で起こしてくれなかったんだよ！」
『アリサも遅刻寸前で起きてましたからね、クロスを起こす暇が無かったのでございます』
「なるほどなぁ…」
疾風脚（シュトロム）で移動しながら下を見渡すと、何故か講師であるグレンが何者かと戦っていた。

『クロス、下を見ろ、グレンが誰かと戦っているぞ』
するとグレンと戦っていた男が致命的な威力を持つ魔術を発動しようとしていたのが見えた
「本当だ…　ってあぶねぇ！」
【ラビッド・ストリーム】の出力を一時的に上げて、上空に飛ぶと、【セルフ・トランスパレント】の効果を切ると同時に身体を捻らせ、逆さになり両腕を胸部に当てて、左腕を上に、右腕を下に下げ、エネルギーでZの形を作る。
そして右手を頭の横に、左手を前へ突き出し、エネルギーを貯める。
エネルギーが溜まった瞬間、腕を十字にして光線を解き放つ
「『ゼスティウム光線ッ!!!!』
青い光線がフェジテの空を駆けて、グレンと戦っていたもう一人の男に直撃した。
これが【ウルトラマンゼット】の必殺技【ゼスティウム光線】だ、クロスはそれを魔力を使うことで本元程の威力は無いが再現が可能なのだ。
クロスはゼスティウム光線の反動で猛スピードで空を駆けていき――――
魔術学院の正門に突っ込んで行った。
もちろん姿勢制御が追い付く筈も無く、クロスは背中から突っ込んで、１０回ほど転がり、壁にぶつかってようやく止まった。

「イッテェ！　事前に【グラビティ・コントロール】で、体重を軽くしててもくっそイテェ！」
『そりゃ、反動で突撃したんだから、そうだろ…』
「まぁここで痛がってても仕方ない、教室へ行くか」
『グレンを襲ってたあの男、ウルトラ嫌な予感がするぜ』
というと、クロスは教室へ向かっていった。
だが、教室へ向かう最中、突然悲鳴が聞こえた、近くの魔術実験室から悲鳴が聞こえた。
「嫌……嫌ぁあああああああ――――ッ！」
「『!?』」
『クロス！　今のは！』
「あぁ、システィーナの声だ！」
クロスは走りながら呪文を唱える。
「《炎帝の炎よ・我が腕（かいな）に宿り・敵を焼き払え》――――――【武装色・硬化】ッ！」
呪文を唱えるとクロスは右腕を後ろに突きだす。
すると、左手は黒く変化し、突然発火しだす。
そして、システィーナの声が聞こえた部屋の扉を開けて、肉体変化魔術を全力で使っ

て、炎を纏った腕を伸ばして、システィーナを襲った相手に殴りかかる。
「――――――【火拳銃（レッドホーク）】ッ!!!」
「!?　何だテメ――――ぎゃぁあああああ――――ッ!?」
「ク、クロス!?」
チンピラ風の男は吹っ飛び、壁に叩きつけられて気絶した。
突然現れたクロスに驚くシスティーナを見るとクロスは気絶したチンピラに【マジック・ロープ】と【スペル・シール】で簡単な拘束をすると、システィーナに話しかける。
「大丈夫か？」
「あなた、どうしてここに？　遅刻したんじゃ…　それに腕が伸びてたような……」
「いや～　ちょっとな、教室へ行く途中に悲鳴が聞こえたから急いでここに来たんだ、ってこの状況……どうなってるんだ」
と誤魔化すようにクロスが話す。
すると、システィーナが少し悩んでからあったことを話し始めた
「実は…テロリストが襲撃してきてルミアが拐われたの！」
「マジか…　ティンジェルさんが拐われたのか…」
「それに先生が襲われて…」
「へ？　グレン先生はやられて無いぞ？」

「え？　…だって、テロリストの奴らが…」
『見えることだけ信じるな』、という言葉がある、テロリストの言葉を鵜呑みにしちゃあダメだ、それに…」
「それに？」
「大丈夫か、お前ら？」
「兄さん！　無事!?」
部屋の外からグレンとアリサが出てきて、無事を確認してきた
クロス達が無事だと答えて、状況を整理していると、突然ゴーレムが現れて部屋の奥で拘束していたチンピラ風の男を殺して、クロス達に襲い掛かってくる。
廊下に出て、逃げながら、グレンが拳で、システィーナが魔術で、クロスは左手にブレードを展開した【ウルトラゼットライザー】を、右手に赫耀銃剣【クリムゾンセイバー】を持って、アリサが【魔鳳鉱石（フェニックス・インゴット）】で作られた特殊な長剣を持って、ゴーレムに立ち向かう。
「お前らその武器どっから出した!?　それにその真紅の銃剣に緋色の長剣…　どこかで見たことあるような…」
「細かいことは後で説明するわ！　今はこのゴーレムどもを倒さないと！」
「…1つだけ、ゴーレム達を一掃できる方法がある、だけど、詠唱に時間が掛かるんだ、

お前ら、足止めできるか？　」
「俺も、一掃できる技がある、頼む、足止めしてくれないか？」
「わかったわ、任せて！」
「わ、私にそんなことできるかどうか…」
　不安げにいうシスティーナにグレンとアリサは声を掛け、クロスは時間を作るために最前列のゴーレムを切り裂き始めた。
「大丈夫だ、お前は生意気だが、確かに優秀だ」
「先生から教わったことを思い出して、頑張って」
「……分かりました、やってみます！」
　勇気を出したシスティーナを見たグレン達はクロスが足止めをしているゴーレムの群れに向き直り、迎撃を開始する
「できました！」
　そして魔術の改変が完了したシスティーナが叫ぶと、３人はバックジャンプでシスティーナの元へ集う。
　そしてグレンの合図でシスティーナとアリサの改変魔術が発動する。
「今だッ！」
「《拒み阻めよ・嵐の壁よ・その下肢に安らぎを》――――ッ！」

「《拒め阻め・炎風の壁よ・超える者に鉄槌を》――――ッ！」
システィーナの改変された【ゲイル・ブロウ】――命名するならば、黒魔改【ストーム・ウォール】とアリサの黒魔改【フレア・ブロック】はゴーレム達の進行速度を劇的に遅らせることに成功した。
「だめ…完全に足止めできない…」
「大丈夫よ、あの２人なら…」
「その通り、上出来だ、助かる」
「あとは俺達に任せろ」
グレンが結晶を握り込み、呪文を唱え、クロスはクリムゾンセイバーを地面に刺し、ゼットライザーを懐にしまう。
そして、左手の指を第二関節まで曲げて、呪文を唱える。
「《獲物を捉えよ・心の大蛇よ・我は強欲の獣である》――――《真なる風よ》」
２つ呪文を唱えたクロスの右手が、赤黒く変化する。
クロスはその右手を後ろに持っていき力を溜めつつ、左手に緑色の暴風を宿す。
それと同時にグレンの詠唱も終了し、同時に必殺技を放つ
「ぶっ飛べ！　有象無象！　黒魔改【イクスティンクション・レイ】――ッ！」
「【大蛇砲（カルヴァリン）】――――【ノックアップ・ブラスト】！」

次の瞬間クロスの左手が凄まじい勢いで伸びて行き、物理的にあり得ない反射をしながらゴーレム達を貫き、打ち上げると、瞬時に腕を元に戻す。
【大蛇砲(カルヴァリン)】に打ち上げられたゴーレム達を巨大な光の衝撃波に下から付きあげる暴風に誘導され直撃して、ゴーレム達を殲滅。
そして光が晴れると、数十体居たゴーレムが1体残らず消滅していた。
「す、すごい…あんな高等呪文を…」
「やっぱり凄いわね、兄さんは…」
「いささかオーバーキルだが、俺にはこれしかねぇんだよ…　ゴホッ！」
「!?　大丈夫ですかッ！　――ってこれは、マナ欠乏症!?」
裏技で【イクスティンクション・レイ】を使ったグレンはマナ欠乏症を起こして倒れてしまった。
それを治そうと【ライフ・アップ】と唱えるシスティーナを見たクロスはクリムゾンセイバーを地面から引き抜くとアルカナに声を掛ける
「さっきの術で俺達の位置は割れた、俺はゴーレムの術者を叩いてくる、2人を頼んだ」
「でも…　あれだけのゴーレムを出せる術者…　実力は未知数よ？　大丈夫なの？」
「へっ！　問題ねぇよ、それに――俺は一人じゃねぇんだ」
「そ、そうよね　――――いってらっしゃい、集合は医務室ね」

「おう！」
　そういうと、クロスは黒よりも黒いコート――――【インビジブルコート】を纏い、窓から外へ飛び出し、【ラビッド・ストリーム】を使い、屋上に居る相手が此方へ向かうよりも先に相手と会敵する。
　そこに立っていたダークコートの男は自分の周囲に五本の剣を浮かせていた
「貴様は…」
「あんたにティンジェルさんが連れ去ったと思ったが…　どうやら違うみてぇだな」
「…」
「まぁ、見逃す気は一切ねぇがな――《受け継がれし・光の刃よ・敵を切り裂け》ッ！」
　そういうとクロスはクリムゾンセイバーに魔力を込めて、一本の紅き光の剣にしたあとに【エナジー・ゼットスラッガー】の呪文を二反響唱（ダブル・キャスト）で、４本の光のブーメラン【ゼットスラッガー】を作り出す
「俺の刃を刻み込め――――ッ！　デリャァァァァッ!!!!!」
「ッ！」
　クロスがゼットスラッガーと共に突貫すると、ダークコートの男の周囲の五本の剣が一斉にクロスに切っ先を向け、飛来する。
　迫りくる切っ先をゼットスラッガーやクリムゾンセイバーで弾きながら、クロスは

ダークコートに向かって走る。

戦いを始めて1時間ほどが経過した。
ダークコートの男の浮遊している剣が、４本粉砕されていて、クロスのゼットスラッガーも全て消えている。
「そろそろ…　終わりにしようぜ?」
クロスの光剣の光が消えて、元の銃剣に戻る。
「ふっ、何か仕掛けてくるつもりだな?　だが、それは失策だぞ?」
「――――――」
ダークコートの男が手を掲げると、それに応じて、最後の浮遊剣がクロスに切っ先を向けて、魔力を溜めていき、クロスは口を抑えて、ダークコートの男に聞こえないように、呪文を詠唱して、銃口に紅いエネルギーを溜めていく。
空間に緊張が走り、ここの周囲が氷点下まで気温が下がったように沈黙が続く。
そして――――――
「――死ねッ!」
ダークコートの男の浮遊剣が銃弾と同じような速度でクロスに向かっていく――――

「《――――・終の理(セット)》」

――――だが、クロスの銃剣から放たれた銃弾が、銃声を響かせ、紅き魔力の尾を引き、男の浮遊剣に激突する。

クロスの銃弾が当たった浮遊剣は同じ速度と保ったまま、クロスの頭に突き刺さるとダークコートの男は確信したが。

寸前にそれ(イレギュラー)は起こった。

「なっ!?」

クロスの頭の前で何故か静止した浮遊剣が、一瞬にして塵も残らず崩壊してしまったのだ。

これがクロスの切り札【赫耀滅魔弾】である。

魔力を持っている物を全て消滅させることができ、人間の魔術回路を破壊できる、魔術師殺しの固有魔術(オリジナル)である。

「何故だ!?――――ッ!」

浮遊剣を消滅させられ、取り乱したダークコートの男が見たものは、銃口にエネルギーが溜まり、今にも漏れだしそうなエネルギーを放つクロスの銃剣だった。

その銃剣の持ち手の上には、1枚のメダルが入れられていた――――

「【バレットレイ・シュトローム】ッ!」

クロスが引き金を引くと、光線がとてつもない速度でダークコートの男に直撃して、男の胴体に大きな穴が空いた。
「ふふっ…　そうか、なるほどな」
「現在も活躍している、凄腕の魔術師殺しが居るらしいと聞いたことがある
どういう原理か知らんが、銃弾や光剣で、魔方陣や、魔道具、人間の魔術回路すら破壊する魔術師殺し（ウィザード・キラー）、紅き銃剣を持ち、変幻自在な黒い腕で相手を殺す女魔術師、通り名は――――――【黒腕】
まさか男だったとはな……」
「それを知ってどうする？」
「さぁな？」
そういうと、ダークコートの男は崩れ落ちるように倒れ、その身体は【バレットトレイ・シュトローム】によって崩壊していった。
「さて、戻るか、集合場所は、医務室だよな」
クロスは階段を使って、医務室を目指す。

戦士の信念

医務室へ集合したクロス達は数時間後に気絶から回復したグレンと共にルミアが何処に居るかを話しあっていた。（システィーナは疲れて寝ている）

解析の魔術で、結界を解析したら、何故か『内側からは出れないが、外側からは入れる』という訳が分からない結界が構築されていたことが判明したことで、ルミアは学院の中にいることが明確になった。

何処に居るか考えていると、グレンの通信機から通信を伝える甲高い共鳴音が鳴り響いた。

グレンが相手と通信をしている時に、クロスはゼットと話していた。

『一応、居場所は分かりそうだが、問題は救出方法だよな』

『相手が厄介な魔術を使えたら面倒でございますね』

『とりあえず、ゼットライザーを出しておきますか』

『それが一番いい方法だな』

と話していると、グレンの通信が終わった。

「よし！　ルミアがいる場所も分かったしクロス！　もう一回手伝え！」

「押忍！」
「私は…どうすれば良いの？」
なかなか戦闘の機会が無かったアリサが、ちょっとしょんぼりした声でぽつりと喋ると、グレンがフォローをした
「お前は、ここで俺の身体をここまで治してくれた白猫（システィーナ）を守ってほしいんだ」
「確かに、まだテロリストが残っている可能性もある、一人にしたら大変だ、だからシスティーナを守ってくれないか？」
「…分かったわ、任せて！」

その返事を聞くと、グレンは先に医務室から出る。
クロスは寝ているシスティーナの頭を撫でて、青い色の大気マナを吸収して人間に送ることができる宝石が埋め込まれた銀色のブレスレットを左腕に付けて、とあるメモ書きを置く、内容は『助けてくれてありがとな、左腕に付けたブレスレットはお礼だ、受け取ってくれ』と書いている。
「本当にありがとな、システィーナ、お前の親友は絶対助けるから、安心しろよ」
と言うと、グレンを追いかけて、医務室から出る。
そして全力で走りながらクロスは、今回の事件のシナリオをグレンから聞く

まず、この事件の下手人は昨日の内にあらかじめ、この学院の敷地内のどっかに隠れ潜んでいた。

そして昨日の夜に魔術学会へ行くためにグレンの通信相手だったグレンの師匠であり この学院の教授である【セリカ＝アルフォネア】達、教師陣が転送法陣を使い、帝都に出発。

がらがらになった学院の結界を一晩かけて弄る

その次に転送法陣の改変をした、だが、転送法陣の改変には大量の高価な素材などが必要、あらかじめ運び入れるのは不可能、だから当日にダークコートの男とチンピラ風の男に運ばせたあとに、２人は生徒達を拘束し、ルミアを確保、同時に下手人は転送法陣の改変を始めた。

だがそんな下手人にも誤算があった、それは魔術師殺しと称される強いクロスが遅刻したことと、非常勤講師のグレンが強かったこと、そして彼らによって協力者が全員倒されたことだった。

法陣の改変には数時間掛かるし、同時にクロス達の処理は無理だったから手を出してこなかった。

法陣が完成すれば下手人はルミアを連れて脱出、外の魔術師らが閉鎖結界の解除に手こずってる間に悠々と逃走し、脱出と同時に人質を爆晶石などで爆破させて殺せば、死

体に判別が遅れて、追跡がさらに困難になる。
つまりこれはルミア個人を狙ったこと隠すための立てこもり爆破テロの皮を被った誘拐事件だったのだ。
まだいろいろ分かっていないことがあるから結論は早いが、とりあえず、ルミアが居る場所が転送塔であることは確定であることから2人は転送塔に向かっていた。
そして転送塔の近くに着いて塔を見ると、４０メトラは下らない巨大なゴーレムが塔の入り口を守っていた。
「ええっ…　こんなの学院にあったか？　これ絶対あの時のゴーレムを召喚したやつが作ったやつだろ、それにあんなのどうやって倒すんだよ…　絶対無理だろ…」
「…ここは俺に任せろ、俺があれを退かすからあとは頼む」
「どうやって、あいつらを退かすんだ？」
「今までアリサ以外の奴らには言ってなかったんだけどな…　俺は――――――
【ウルトラマンゼット】だッ!!!!!!」
そういうとクロスはゼットライザーのトリガーを押して、ヒーローズゲートに飛び込む。
――

インナースペースに入ったクロスは【ウルトラアクセスカード】をゼットライザーにセットする。
《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ.》
腰のメダルホルダーから、左上に置いた【ウルトラマンゼロ】、【ウルトラセブン】、【ウルトラマンレオ】ウルトラメダルを取り出し、右手の上に広げる。
『宇宙拳法！　秘伝の神業ッ！』
ウルトラメダルをゼットライザーのブレードのスリットにセットする。
『ゼロ師匠！　セブン師匠！　レオ師匠！』
ブレードを動かし、メダルをスキャンさせる。
《Ｚｅｒｏ.》《Ｓｅｖｅｎ.》《Ｌｅｏ.》
『押忍ッ！』
ブレードを展開させると、光が集まり、【ウルトラマンゼット】がクロスの背後に立つと手を広げながらこう叫ぶ。
『ご唱和くださいッ！我の名をッ！　ウルトラマンゼェェェェェットッ!!!』
『ウルトラマァァァン!!　ゼェェェェェットッ!!!』
クロスはゼットライザーを天に掲げて、トリガーを押す。
『デヤッ！』

『デュワッ！』
『イヤァッ！』
《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ａｌｐｈａ　Ｅｄｇｅ．》
『デュワッ！』
【ウルトラマンゼロ】、【ウルトラセブン】、【ウルトラマンレオ】が残光を残して飛び、その残光が中心に集まり、その中から【ウルトラマンゼット　アルファエッジ】が飛び出した

『デュワッ！』
巨大化したゼット（クロス）はゴーレムを殴り飛ばす。
そして驚いてフリーズしているグレンに向かって頷くと、またゴーレムの足止めへ向かう。
フリーズから戻ったグレンが『後で説明してもらうぞ』とでも言いたげな視線をゼットに向けて、がら空きになった転送塔への道を突っ切り、扉を開けて、中へ飛び込んでいく。
それを見たゼットは、速攻で方を付けるとで言いたげに、全力でゴーレムを向かって突進し――――

『『アルファバーンキックッ！』』

【アルファバーンキック】でゴーレムを蹴り飛ばし、結界へ叩き付ける。

そして瞬時に体勢を立て直して、両腕をＺ型のカラータイマーの左右に当てて、左腕を上に、右腕を下に下げ、エネルギーでＺの形を作る。

そして右手を頭の横に、左手を前へ突き出し、エネルギーを貯める。

エネルギーが溜まった瞬間、腕を十字にして光線を解き放つ。

『『ゼスティウム光線ッ!!!!』』

光線がゴーレムに直撃し、爆発を起こす。

ゴーレムが消えたことを確認したゼットは、その巨体を光の粒子に変換して、クロスに戻る。

クロスは戻ったあと、クリムゾンセイバーを取り出し、すぐに転送塔へ向かって走り、開けっ放しの扉へ飛び込むと、【フィジカル・ブースト】を使い、固有魔術（オリジナル）【赫耀滅魔斬】を起動させながら最短で最上階へと向かう。

最上階へ着き、開いている扉から飛び込むと、死に物狂いで転移法陣の解呪をしているグレンと転移法陣の上にいるルミア、そして下手人の姿とその下にある転移法陣繋がっている魔法陣が目に入る。

クロスは迷わず、ルミアの下にある転送法陣に向かって、【赫耀滅魔斬】を突き刺す

そして突き刺さった剣から紅い光が引いていく、同時にルミアと下手人の下の魔法陣が紅く輝き始め――――

「えっ？」

「この魔術は！　まさかッ！」

「……」

ガラスが割れるような音がして転送法陣の起動が止まり、下手人の下の法陣が崩壊していく。

３人に見られながら、クロスは話していく

「この銃剣には魔力破壊効果が付いていてな、これであんたの白魔儀【サクリファイス】の法陣とティンジェルさんの下に転送法陣の起動時のマナを破壊したんだよ、転送法陣自体を傷付けないように破壊するにはだいたいの解呪が必要なんだが…グレン先生が解呪してくれて本当に助かったよ……　とりあえず１発殴らせろや

ヒューイ先生？」

「…ぼくの負けですね」

今回の事件の下手人であり、クロス達の元担任【ヒューイ】が自らの敗北を認めて、嘆息した。

「不思議ですね、計画が頓挫したはずなのに…どこかほっとしている自分がいる」

「やっぱり、死ぬのが怖かったか？」
「いえ、それもありますが…生徒達が無事で良かった。そう思います」
グレンがふらりと立ち上がり、ヒューイの前にいるクロスの横に立つ。
「で、言い残すことはあるか？」
「…1つだけ」
「なんだ？　言ってみな」
グレンに促され、ヒューイは胸の内を問いかける。
自分は一体どうすれば良かったのか、組織の言いなりになっていれば良かったのか、それとも組織に逆らって死ねば良かったのか、今でも自分には分からない。
その言葉を聞いてクロスは
「なんで自分で道を選ばねぇんだよ、バカかあんたは」
「自分で道を選ぶ…ですか？」
「そうだ、テメェの不始末はテメェでカタつけろってコトだ、確かにお前の境遇には同情するが……テメェが仕出かしたコトを全部組織のせいにしてんじゃねぇよ」
「厳しいな…　でも……そうですね……全くその通りだ、あなたにはもっと早く会いたかった、クロスさんにももっと早く打ち明ければ良かった、今は強くそう思う」
「それじゃあ、歯ぁ食いしばれ」

グレンとクロスはヒューイの両頬を同時におもいっきり殴りつけた。
２人のダブルパンチ（クロスは武装色付き）で吹き飛んだヒューイが床を派手に転がり、昏倒する。
「…やれやれ、だ」
既に一度マナ欠乏症になっていて、回復はしたものの、またマナ欠乏症をなり、グレンは意識を倒れてしまう。
倒れたグレンを抱えながら、クロスは呟く。
「『これにて一件落着！』――――ってやつか？」
『まだ後処理が残ってますぞー？　クロス？』
「やっぱりか…」

アルザーノ帝国魔術学院自爆テロ未遂事件
１人の非常勤講師と生徒達の活躍により、最悪な結末を逃れたこの事件は関わった敵組織――――【天の知慧研究会】のこともあり、社会的不安に対する影響を考慮されて内密に処理された。
学院に刻まれた数々の破壊の跡は、魔術の実験の暴発ということで公式に発表された。

帝国宮廷魔導士団が総力を上げて徹底的な情報統制を敷いた結果、学院内でこの事件を知る者はごく一部の講師と教授陣と当事者たる生徒達（と光の国からやってきた宇宙人1人）しかいない。

無論、全てが完全に闇に葬られた訳ではない。

かつて女王陛下の懐刀として帝国各地で密かに暗躍していた伝説の魔術師殺しや、世界を滅ぼす悪魔の生まれ変わりとして密かに存在を抹消されたハズの廃棄王女、死んだはずの講師の亡霊、魔術師として大切な魔術回路を壊す『黒腕』と表される女の魔術師殺し、5年前にとある平凡な街の外れに現れた怪獣を倒した50メトラ級の巨人が事件の裏に関わっていた……そのようや出所不明の様々な噂がまことしやかに囁かれたが、人は飽きる生き物、1ヶ月も経てば誰の話題にも上がらなくなった。

事件に巻き込まれた生徒の1人である【ルミア＝ティンジェル】が何故かしばらくの間、休学していたが、やがて普通に復学した、朝早く起きれば、今日も左腕に青い宝石が埋め込まれた銀色のブレスレットをした銀髪の少女と一緒に元気に学校に通うルミアの姿が見られるだろう。

学院には、以前と変わらない、いつも通りの平和な日常が戻ってきたのだ。

そして――

『しかし、まぁ、ティンジェルさんが3年前に病死したはずの、あのエルミアナ王女だと

はね…』

『俺もウルトラビックリだぜ』

ある晴れた日の午後。

クロスとアルザーノ帝国魔術学院講師――もう非常勤ではない――グレンは学院の屋上のベンチに腰掛けて、ふと、1月前の事件を振り返っていた。

あの事件の後、クロス達4人は、事件解決の功労者して帝国政府の上層部に秘かに呼び出され、ルミアの素性を聞かされた。【異能者】であるルミアが様々な事情によって、帝国王室から放逐されたこと、そして、クロス達4人に事情を知る側として、ルミアの秘密を守るために、協力を要請された。

「まったく……まーた、面倒事を押し付けられたんだ…」

「心配しないでくださいよ先生、いティンジェルさんが奴らに襲われそうになったらとなったら、俺とゼットが懲らしめますんで！」

「なんか、心配性が無くなってきたな……これがウルトラマンが居ることの安心感ってやつか……」

クロスは、グレンに自らの事情を打ち明けた。

ウルトラマンゼットと一体化していること。

自分が裏の世界で【黒腕】として恐れられていること。

全てを打ち明けたが、グレンは『お前がウルトラマンでも、裏の世界の住人でも何かが変わる訳じゃない、ルミアだってそうだ。

王女だろうが異能者だろうが、ルミアはルミア、お前はお前だと思うし、白猫だってルミアの素性を知っても、ルミアに対する態度は何一つ変わらない。

お前が白猫やルミアにウルトラマンだとばらしても、お前達の関係性は変わる筈がねぇんだ』と、言われてカイトは心の中で静かに息を吐いた。

ちなみに女のような外見のせいで【黒腕】という異名のくせに女魔術師だと思われていたことをグレンに煽られたが、クロスはグレンをデコピンして心を落ち着けた。

「それにしても意外だな～」

「何がだよ？」

「あの一件で先生が魔術に関わることは、もう二度とねぇと思ったんだがな、正式な講師になるとは、何か気が変わったのかなって」

グレンは長い沈黙の後にこう言った。

「このあいだの事件のお前らの元担任……ヒューイ、だったか？　なんだか他人事に思えなくてな、状況に流され、状況のせいにして思考停止…まぁ、兎に角だ、自分の人生の失敗を魔術のせいにして拗ねるのはもうやめたのさ、もう少し前向きに生きても良いだろってな」

「なるほどな」
「それにな…」
　と、グレンが言いかけた時だった
「あっ、先生！　クロスくん！」
「…クロスと先生ってば！」
「兄さん！　グレン先生！」
　校舎の内部へ繋がる階段の奥から見慣れた3人の女子生徒がグレンとクロスを見つけて駆け寄って来る。
　グレンは彼女達を苦笑交じりに流し見ると、ベンチから立ち上がり、両手を組み、上へ伸ばした。
「……見てみたくなったのさ、あいつらが将来、何をやってくれるのかをな、お前だって、お前の妹がどんな人生を歩むか、気になるだろ？　講師続けるにゃ充分な理由さ、暇潰しには丁度良いだろ？」
「…あぁ、そうだな」
　お互いに笑みを交わし合い、２人は駆け寄って来る3人組に向かって歩き始めた。

第2章―叫ぶ少女、バディーゴー!―
掴むぜ!勝利!　二組優勝大大作戦

「話は聞いたッ!　ここは俺に任せろ、このグレン＝レーダス大先生様にな――――ッ!」

アルザーノ帝国魔術学院、東館2階

放課後の魔術学士2年次生二組の教室は、既にビックリするほど盛り下がっていたのに、変なテンションでやってきたグレンによって、更に盛り下がっていた。

『…多分あの人、【魔術競技祭】の優勝クラスの担当講師に送られる特別賞与に食い付いたな…』

『正式に講師になったとはいえ、ロクでなしなのは変わりませんなぁ…』

（はぁ…面倒なのが来た……）

クラスの意見が一致した瞬間である。

グレンはシスティーナの苦言を平常運転で受け流すと、すぐに生徒達が出場する競技種目分けを始めた。

だがそれは、普通のクラスの【出場メンバーを成績上位陣で固める分け方】とは違い、全員を出場させてそれぞれの得意分野が役に立つ種目に割り振っていた。

『なるほどな、成績上位陣で固めて出場させるのではなく、全員出場させて、得意分野の種目に割り振るのか。

これなら別の種目に参加したことによる体力の消耗も無いし、何より生徒達の得意分野だから、自身の真価を発揮させやすい。

頭のお堅い他の講師達には考え付かない割り振り方だな、何故成績優秀者よりも競技の内容に特化している人が居る可能性があることに気付かないのだろうか……』

『それに得意分野の競技参加できるということは、本来の力を見てもらえる、ウルトラ素晴らしい割り振りでございますねぇ！　クロス！　…クロス？』

『勝利しか考えてない講師達は自らの育てた優秀な生徒だけを見せたいのかもしれないな…

ということはグレンは他のクラスは成績優秀者で固めることを知らないということか…？』

『あっ…』

クロスの予想は当たり、クラスの真面目な生徒ギイブルが『いつも通り成績優秀者で固めればいい』ということを話したグレンは誰にも気付かれないようにガッツポーズをして、ギイブルの意見に乗っかろうとしたが、システィーナに妨害されて、クラスの全員をやる気にさせた。

実際、グレンが最初に提案した割り振りは、クラスのモチベーションを上げれて、優勝するには最適だったことは言うまでもない。
ちなみにクロスとアリサが選ばれたのは、今回から追加された種目【二人決闘】という2対2の決闘である。
発表されたその日の夜、2人は家の庭で決闘を行おうとしていた
「久しぶりだなぁ…兄妹で決闘するのは何年ぶりだったかな?」
「私も分からないわね……だいたい2年ぶりぐらいだった気がするわ」
「その間にだいぶ成長している筈だよな、フフッ…
久しぶりに血が騒ぐぜッ!」
「《雷精よ》――《踊れ》ッ!」
「《光輝く護りの障壁よ》――――《大いなる風よ》ッ!」
2人は遅くまで撃ち合い、起きたのが遅刻寸前の時刻だったのはここだけの話である。

翌日の放課後、二組の生徒達が魔術競技祭の練習をしていた。
ある生徒は呪文を唱え、空を飛ぶ練習をしている。

ある生徒達は念動系の遠隔操作魔術を使い、キャッチボールをしている。
ある生徒は攻性呪文（アサルト・スペル）を唱えて、樹木に向かって《ショック・ボルト》を撃つ練習をしている。
中庭の向こう側では、システィーナとルミア、アリサがベンチに腰かけて呪文書を広げて、難しい顔で羊皮紙に何かを書き連ねており、その周りを何人かの生徒達が、あれこれ相談しながら取り囲んでいる。
彼女達は、競技用の魔術式の調整をしているらしい。
グレンのクラス一同は今、1週間後の競技祭に向けて、静かに盛り上がっていた。
それを見ながら、グレンはため息を付いた。
何故なら、他のクラスのそうそうたるメンバーを見てしまったからである。
他のクラスは案の定成績優秀者で固められていた。
「ちくしょう。ずるいだろ……優秀な奴ばっか使うなんて、どいつもこいつも勝てばいいって言うのかよッ!?　勝利よりも大切なものってあるだろ、くそぅ！」
「あんたも勝てばいいの考えて成績優秀者で固めようとしだろ、自分を振り返れよ」
「うおっ!?すげぇ美女！……ってクロスじゃねぇか、練習しなくて良いのか？　まぁ、お前にゃいらねぇかもしれねぇがな」
「美女って言うな俺ぁ男だぞ……　昨日アリサと久しぶりに決闘したんだよ、そん

ときにちょっとだけ、危うく軍用魔術を撃ちそうになった」
「いやあぶねぇな……」
そんな他愛のない会話をしていると、突然激しい怒声が耳に飛び込んでくる。
クロス達が、その方向に目を向けると、グレンのクラスの生徒達と他のクラスの生徒達の何人かが、中庭で言い争っていた。
「…おーい、何があったんだ?」
「あ、先生!? こいつら、後からやってきたくせに勝手なことばかり言って――――」
グレンのクラスの生徒、カッシュが興奮気味にまくし立てる。
「うるさい! お前ら二組の連中、大勢でごちゃごちゃ蒸群れて目障りなんだよ! これから俺達が練習するんだから、どっか行けよ」
カッシュに相対する他のクラスの男子生徒も、やはり興奮気味に言葉を吐き捨てる
「なんだと――――ッ!」
「はいはい、ストップ～」
グレンが取っ組み合いを始めたカッシュを、クロスが男子生徒の首根っこを掴んで、それぞれ左右に引き剥がした
「あがが…く、首が……痛たた…」
「うおお…い、息が…苦し……」

「とりあえず、一旦落ち着こうか？」
「ったく、くっだらねぇことで喧嘩してんじゃねぇよ……お前ら沸点低すぎだろ」
生徒達が大人しくなったのを確認して、手を離しクロスが別の男子生徒に話を聞く。
「えーと、そこのあんた、その襟章は1組の連中だよな？　あんたらも今から練習か？」
『誰がこんな下らねぇこと指示したんだ』と言いそうになったのをこらえてクロスが尋ねると、細身の体で自分より大きい大柄の生徒を片手で制したクロスの姿に萎縮したのか、今までの威勢を引っ込め、誰に指示されたのかを話す。
「え…あ、はい、　そうです……その…ハーレイ先生の指示で場所を……」
「まぁ、確かに、俺達も場所を取りすぎたのは悪かった、全体的に端に寄らせるから、それで良いよな？」
「ば、場所を空けて貰えるならそれで――――「何をしている、クライス！　さっさと場所を取っておけと言っただろう！　まだ空かないのか!?」」
丸く収まりそうな雰囲気に水を指すように怒鳴り声を上げて彼らの担任、ハーレイがやってくる。
グレンと話しているのを見て、クロスは少しゼットと話す。
『やっぱりあの教師、同僚や生徒に対しては失礼な態度を取るやろうだな、あんな態度を取れるってことは俺達に勝てることだよな』

『落ち着けゼット、プライドが高いからあんなこと言えるんだよ、それにあの人は俺がテロリストを撃破したことは知らねぇしな』

と話していると、グレンと話しているハーレイがムカつく言葉を言い出した

「はっ！　全員を参加させるとは、戦う前に勝負を捨てたか？　負けた時の言い訳作りか？　それとも私が指導するクラスの恐れをなしたか？」

『……お前は何を言っているんだ？』

『確かにアイツ二組のことをほぼ何も知らずに何を言っているのかは分からんが』

そんな会話をしていたことも知らずにグレンとハーレイは会話を続ける

「ちっ　…腑抜けが。まぁ、いい、さっさと練習場所を空けろ」

「あー、はいはい、今すぐ。　ええと、あの木の辺りまで空ければ充分ですかね？」

グレンはハーレイのクラスの生徒達が練習するのに充分な程の面積分の場所割りを提案するが———

ハーレイは相手を見下さないと絶対に言えない言葉を言った。

「何を言ってる？　お前達二組のクラスは全員、さっさとこの中庭から出て行けと言っているのだよ、それくらい分からんのか」

それを聞いたクロスは———

「何だろう、アイツに怒りどころか憐れみすら感じられるのだが……」

『さすがにほぼ、何も知らないくせにあれは言い過ぎだぜ』

何も知らないのに仲間を侮辱するハーレイにかわいそうな人に向ける視線を向けるカイト達であった。

その後、なんだかんだあり、何故か【どちらのクラスが一位になるか】という謎の対決が行われることになった。

翌日、クロスはシスティーナと魔術戦で戦っていた。

『やっぱり教え方が上手いな、グレンは』

クロスはチラ見でグレンの指導を見ていた、すると――

「……あっ」

足元に注意が行かなかったクロスは、凹みに躓き、転けてしまった。

「《雷精の紫電よ》――――ッ！」

「グホッ!?」

転んだクロスに向かってシスティーナが、【ショック・ボルト】を放つ。

直撃したクロスは、魔術防御が遅れたのか、身体を痺れさせながら倒れる。

システィーナは倒れたクロスに近づき、こう言う。

「やっと、勝てたわ……てか貴方よそ見してたでしょ!? グレン先生の指導が気になるのは分かるけど、ちゃんと勝負してよ！」

「……ハハッ、こんなことで負けてしまうなら、師匠に『修行が足らん』っていわれて半殺しにされちまうな、修行で」
「修行で死にかけるッ!?　なんで!?　どんな修行してるのよ貴方はッ!?」
　痺れが治ったクロスは、笑いながらこう言うと、全力でシスティーナに突っ込まれてしまう。
「ハハハ……俺の師匠達は厳しいからな」
「今度その修行を見せてもらいたいわ……」
「おう、今度師匠達か来たら、見せてやるよ」
「そう?　楽しみだわ、でもその前に魔術競技祭の特訓よ!　ほら立てる?」
　システィーナが手を伸ばして、クロスと立ち上がらせようとする。
「あぁ、ありがとな」
　クロスも手を伸ばし、立ち上がる。
　そしてまた、決闘を始めた。
　クラスの中でも高レベルの戦いを見せたことはここだけの話である。

「……」
　その日の夜、1人の少女が悩んでいた。

悪い人から狙われる親友を守れるかということに。

確かに強い人達(教師や友達)が居るが自分たちだけの状況になったとき、自分は彼女を守れるのであろうか。

誰かに稽古を付けて貰おうと思ったが、教師は魔術競技祭で忙しそうだから、今は無理。

友達は……行けそうだ。

「……よしッ！」

そして少女は覚悟を決めた表情をした。

打倒１組！　白猫強化計画

　１組対２組の対決が決まってから２日後、学院終わりの夕方、クロスはシスティーナに呼ばれて喫茶店に居た。
『魔術の特訓をしてほしい』？」
「ええ、そうよ、今回は負けられないから、貴方に特訓してほしいの
　えっと…【ノックアップ・ブラスト】…だっけ？　　こんな名前の魔術を使ってたじゃない？　あんな魔術を使えるのはすごいなって思って、あなたに修行を付けて貰おうって思って
　それに、ルミアのこともあるし…」
　そう、ルミアの秘密を知った以上、彼女の親友として守らないといけないと思ったシスティーナは一番頼りやすく、強いクロスに教えて貰うことにしたのだ。
「別にいいぞ？　俺の修行はかなりキツいから覚悟しとけよ？」
「望むところよ！」
「よし、決まった、明日の早朝から修行していくか！」
「よろしくお願いするわね？」

修行の打ち合わせとしたクロスとシスティーナはそれぞれ家へと帰っていった。
そして特訓1日目、2人は早朝の公園へやって来た。
水が入ったビンを2本ベンチに置いてから、特訓へ入る。
「それじゃあ、まず、組手をしようか」
「…は？　なんで組手？　模擬決闘をするんじゃないの？」
「案外魔術戦と格闘ってのは繋がるものがあるんだよ、今回は魔術を使っていいぞ、俺は使わないけど」
「へ、へぇー……」
そしてその状態で組手が始まったが、終始クロスが圧倒していた。
何故ならクロスは【宇宙拳法】の使い手でもあるからである。
メタ話になるが、クロスはゼットと一体化し、5年間戦っている間に、ここまで強くなれたのは、ゼットの師匠（ゼットが勝手に言っているだけだが）であるゼロや、ニュージェネレーションズのメンツや、タロウやレオにも会っており、稽古を付けてもらっていたからなのだ。（その様子は番外編で書くかも……）
そんな特訓をして人間の枠から片足出しているクロスは【ショック・ボルト】を手刀で弾いたり、【スタン・ボール】を回し蹴りで相殺するといった荒業で突き進み、システィーナの胸部に拳をぶつける寸前で止めて、離れる。

「ほらな？　魔術無しでも魔術師に勝てるだろ？（まぁ、ゼロ師匠の修行のお陰なんだけどな……重りを付けた生身の状態で人間大のウルトラ戦士と１０年間タイマンって修行はマジで死にかけるところだったなぁ……　これでセブン師匠の修行よりはマシって聞いた時は背筋が凍ったぜ……）

それじゃあ、休憩したら次は俺とお前で組手だ、ベンチに水とおにぎりを用意してあるから食べるぞー」

「え、えぇ……（クロスが人間離れした身体能力の持ち主ってことは分かってたのだけど、ここまで人間離れしてるとはね……　それにさっきの顔……ここまで行くのにどれくらいの修行をしたのかしら……）」

クロスが修行の辛さを思いだし、システィーナがどんな修行をしたらあんなに強くなれるのかというのを思っていた。

２人は軽食を取るとまた、修行を始める。

「まず、最初に言っておくが、俺の技は【宇宙拳法】と呼ばれる拳法だ、おそらく使い手はこの地球上で俺だけだろう」

「【宇宙拳法】？『この地球上で俺だけ』？　どういうことなの？」

「後で教えるから！　今は修行しようぜ！　なッ！」

「えぇ…わかったわ…」

最初はクロスは回避をするだけで、パンチが当たり始めたら攻撃を弾き始める。
そしてシスティーナは疲れて膝を付いた。
「な、なんで攻撃が当たらないの……　当たっても弾かれるし……」
「俺の師匠の攻撃に比べれば、遅いからな、弾かせてもらった」
「やっぱり…貴方の師匠って宇宙人じゃ……」
「何故その結論に至ったんだ……」
クロスが尋ねるとシスティーナは少し悩んでからこう言った。
「実は、先の事件で貴方のこのブレスレットをくれたじゃない？」
システィーナは左腕のブレスレットを撫でながらこう言った。
「お陰で、何故かすぐに回復できて、貴方の後を追ったのよ、そしたらあなたが叫んだのを聞こえたのよ
『　俺は――――【ウルトラマンゼット】だッ!!!!』って……」
「続けてくれ」
そのあと、光の扉に入ったと思ったら、クロスが私を助けてくれた謎の生命体みたいな巨人になって、デッカイゴーレムに光線を撃って倒していたの……」
「……」
「ねぇ？　クロスの正体って何なの？」

「……」
『クロス、もう話しちまえよ、俺はウルトラ大丈夫だから』
「あぁ、分かったよゼット」
「ゼット？」
「システィーナ、ここから話すことや見ることは秘密にしてくれ」
「ええ、分かったわ」
「それじゃあいくぞ」
　誰も居ないことを確認したクロスはゼットライザーを取り出し、トリガーを押し、ヒーローズゲートを背後に展開して、ウルトラアクセスカードをセットする。
《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ.》
　そしてスリットにメダルをセットせずにブレードを展開し、トリガーを押す。
《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ.》
　ヒーローズゲートが背後から通り抜けて、クロスの肉体が【ウルトラマンゼット】のオリジナル態に変化する。
「これが…クロスの正体…」
『いいや、これはクロスの正体ではございませんよ』
「!?　誰？」

『そういえば自己紹介をしていませんでしたね、俺の名前は【ウルトラマンゼット】、訳あってクロスと一体化している、宇宙人でございますよ
よろしくお願い申し上げます』
「え、ええ、よろしく…」
ゼットとシスティーナが握手をするとゼットの姿がクロスに戻る。
戻ったクロスはシスティーナにウルトラマンのことに付いて話す。
M78星雲【光の国】に集う宇宙人の総称であること。
ウルトラマン達が作った【宇宙警備隊】が宇宙の平和を守るために日夜怪獣と戦っていること。
この星にも、危機が訪れているので、ゼットがやってきたこと。
それを話した。
「――――と、いうことだ、俺はゼットと一体化しているんだ、それでウルトラマンゼットとして怪獣と戦っているんだ
そして宇宙拳法はゼットと同じウルトラマンの先輩方に教えてもらったんだ」
「そ、そうだったのね…　正直スケールが大きすぎて理解が追い付かないわ…」
「いろいろ打ち明けないと修行にならないと思ったから、打ち明けさせてもらった」
「え、ええ、貴方の強さの理由がよく分かったわ」

「なら良かった、それじゃあ修行を始めるか」
「ええ、そっちがメインだし、始めましょうか」
そして、２人は組手を始めた。
クロスは簡単な受け流しや、回避を軸にして、攻撃はパンチのみで戦っていた。
システィーナは最初こそはクロスに攻撃を当てることすら、出来なかったが、徐々に攻撃がヒットしていくようになった。
するとカイトは距離を取る。
「やるねぇ…だがここからが俺の本気だぜッ！」
「!?」
構えと同時に真剣な表情になるクロス、その本気度の変化を肌で感じ取ったシスティーナは距離を取ろうとするが――――
「デュワッ！」
「ヒィッ!?」
一瞬で近付いたクロスが、システィーナの顔の横にパンチを放つ。
パンチの風圧で、銀色の髪が揺らめき、システィーナは膝を付き、手を付けると
「ま、まるで目が追い付かなかった……気が付いたら目の前で拳を放っていた……　これが…宇宙拳法……」

「いや、これでも宇宙拳法の氷山の一角しか出してないぞ？　本来は魔術や光線とかを合わせて放つんだから

ちなみにさっきのは【フィジカル・ブースト】を使ってないぞ？　【魔脚】っていう一瞬だけ脚力を強化する技だ」

「う、嘘……　あれだけでも充分凄いのに……　ウルトラマンってそんなに強いんだ……」

「それや、そうだろ　お前も見ただろ、俺達が変身したゼットが蹴りでゴーレムの頭がぶっ壊したのを」

「生身でも魔術を使えば、それなりに戦えるようにはなるぞ？　でも本格的な特訓は諸先輩方の協力が必要だし、俺が教えられることは教えていくぞ」

「よ、よろしくお願いします！（私、特訓相手間違えたんじゃ……いや、スパルタでもルミアを守れる力が手に入るんだし、頑張るわ！）」

「押忍！　それじゃあ今日はここまでだ、最初はゆっくりやらないとな、魔術競技祭に響くと困るからな」

というと、クロス達はそれぞれ家へ戻り、学院に登校した。

ここから、この2人の秘密の修行は始まった。

軍用魔術を教えたり、宇宙拳法を教えたり、組手をしたりと、どんどん強くなり、魔

術競技祭の時には【心眼】をほぼ習得したのはここだけの話である。
「まずは【心眼】を覚えてもらう、死角からの攻撃が分かるようになる技だ、まず俺が手本を見せるから、死角から不意に攻撃してくれ」
「わ、分かったわ」
　今は魔術競技祭の特訓も兼ねて行われている修行は始まったばかりである。
「デュワ！」
「その掛け声何とかならないの？」
「気にするな、その内慣れる」

開催！　襲来！　勇気の力！

フェジテから少し離れたとある山、その中の街道を豪華な馬車が走る。
この馬車の四方に王室の親衛隊の騎士達が馬車を守るように囲んでいる。
何を隠そう、騎士達が守る馬車にはこのアルザーノ帝国のトップ【アリシア７世】が乗っているからだ。
「もうすぐ……フェジテに到着になりますわね、陛下」
と、女王アリシアの身の回りの世話を務める侍女長【エレノア】がアリシアに声を掛ける。
「ええ、そうですね、エレノア。　あの学院に顔を出すのは久しぶりですわ」
「しかし、学院の転送法陣さえ、あの忌々しい組織に破壊されていなかったら、陛下がこのようなお苦労をされることはありませんでしたのに……」
エレノアのが言った転送法陣とは、先の事件でルミアを連れ去ろうと行き先が変更されていたあの法陣である。
クロスの活躍で破壊はされていないが、この短期間で、行き先を変更することは不可能なので、壊されたという言い方をしたのだ。

「いいんですよ、たまにはこうして帝都の王宮から出て、政務を離れ、外の世界を見るのも楽しいものですよ。それに、たまには口うるさい爺やから離れて羽を伸ばすのも悪くないですし」
「はぁ……陛下ったら……それを聞いたらエドワルド卿がまた泣かれますわ……
　それにしても……ご機嫌ですね、陛下」
「ふふっ、わかりますか？」
　アリシアは遠い目で窓から馬車の行き先を見据える。
「娘に……3年ぶりに会えるかもしれないんですもの、それに……5年前に現れた【あの巨人】にも」
「エルミアナ王女殿下……ですね、それから【あの巨人】とは？」
「ああ、あの時は貴方は居ませんでしたからね、知らないのも当然です、これは5年前の話でしてね――――」
　アリシアは話し出す。
　5年前、とある街に娘達と視察に来ていた時、突然巨大な生物【怪獣】が空から降ってきて、街を襲いそうになっていた時、空から青い光が降ってきて、それが赤と青と銀色の巨人になり、怪獣を倒したことを。
「――――そしてその巨人から飛んできたのがこのメダルです。」

アリシアは持っていた箱から3枚のメダルを取り出す。
「一度鑑定してもらったのですが、何で出来ているのかわからなかったのです
でもあの巨人と同じ顔が描かれているのですから、あの巨人にこれが必要なのか確かめたいのです」
そういうとアリシアはもう一度外を見る。
また娘と……あの巨人と出会えることを信じて。

競技場の外周に等間隔でポールが立っており、その外周を飛行魔術を起動させた選手達が風を切って飛び駆けていく。
2人で1チームを作り、広大な学院敷地内に設定されたコースを一周ごとにタッチしながら、何十周も回る【飛行競争】の競技。
そして、今はラストスパート、観客席の生徒達は、競技場の外周を大きく回るように飛翔する選手達の、意外な勝負展開に歓声を上げていた。
『そして、さしかかった最終コーナーッ！　二組のロッド君がぁ、ロッド君がぁぁぁ――――ぬ、抜いた――――ッ!?　どういうことだッ!?　まさかの二組が、まさかの二組が――――これは一体、どういうことだぁぁぁ――――ッ!?
そしてッ！　そのまま、ゴオオオオオル――――ッ!?　なんとぉおおお!?　【飛行競

争】は二組が三位！　あの二組が三位だぁ――ッ！　誰が、誰がこの結果を予想したァアアアアアアアアア――――ッ!?』

洪水のような拍手とともに大歓声が上がった。

その発生源は主に競技祭に参加できなかった生徒達からだった、グレン率いる二組とは別のクラスだが

何か共感できるものがあったのかもしれない。

『殆どのクラスが速さを優先するだろう、だがこれは長期戦、途中で魔力不足で失速してしまうだろう、だからグレンはペース配分を確立させることに重視した

良い作戦だったな』

『でも本人は予想外って顔をしているでございますな』

いろいろな想定外があって、勝てた。

それを自覚しているグレンはハードルを上げ続ける生徒達を見て、憔悴していた。

そしてこの【飛行競争】の他にも、【魔術狙撃】や【暗号解読】、【精神防御】では他のクラスを圧倒して順位を上げていった。

そして、午前の種目と、昼休憩が終わり、午後の種目に入っていく――――何故かグレンやルミアが帰ってこず、弱気になっていく生徒達だが、それを覆そうとクロスが大声を張り上げる。

「ここで弱気になってどうする!?　あのロクでなしに煽られたらどうする!?　そうならないために、1組に負けないために、俺達は練習を重ねてきたんだろ!?
　というか、先生が居ないからって――――
諦めるなッ！」
「「……」」
「そ、そうだよな」
「ここで負けたらあのロクでなしに煽られるのは嫌だ……」
「やってやるよ！」
　その叫びに感化された生徒達は、焚きつけられ、気合いを入れていく。
　そして午後最初の種目である【2人決闘】の決勝――――1組対2組が始まる。
【2人決闘】のルールは、【決闘戦】と同じく、非殺傷魔術を使って相手を場外に落とせば勝ちである。
『では、1組対2組の決勝を行います！　では、スタァァァァトッ！』
「「《大いなる風よ》――――ッ！」」
「《ほっ》」
「《えい》」

「何ッ!?」
「呪文を唱えずに魔術をッ!?」
クロスとアリサは開幕放たれた【ゲイル・ブロウ】を詠唱を改変した【ゲイル・ブロウ】で相殺する。
一見呪文に聞こえなかった掛け声で呪文を唱えたことに驚きを隠せない1組の生徒達。
正直な所、今の1組にはこの勝負の勝ち目はない。
初等呪文などを早く撃てるようにしただけの1組の生徒と、実際に戦闘を経験した2組（クロスとアリサ）の生徒では実力に雲泥の差があり――――
「《気高き雷精の蒼電よ・ここに光と成りて――――》」
「――ッ!?　させるかッ！」
「《力よ無に――――》」
カイトが指を鳴らし、伸ばした左手と頭の横に寄せた右手を繋ぐように蒼電を纏わせ、呪文を唱える。
それを阻止しようと1組の生徒が妨害に入るが。
「《雷精よ》――――《踊れ》」

「ブホッ!?」
「あら、もう終わりかしら?」
「…まだだ……《雷精の紫電よ》ッ!」
アリサが【ショック・ボルト】の１０連射を、避けれないように1組の生徒達に放ち、1組の生徒2人に全て当てる。
1人は場外に押し出したが、もう1人はギリギリ【トライ・レジスト】で防御に成功し、即座に【ショック・ボルト】を放つ、だが。
「《――――・有を撃ち抜け》」
「グボァ!?」
クロスは左手を突き出し、【ショック・ボルト】の改変魔術、黒魔改【ボルト・レーザー】が放つ。
相手が放った【ショック・ボルト】の数倍速く駆ける蒼電の光線が、【ショック・ボルト】を正面から破壊し、相手の腹に直撃する。
その一撃でもう1人も気絶し、2組の勝利となった。
『き、決まった――――ッ！　2組の勝利だッ！　圧倒的な強さを見せた2組が一位だァァァァ――――ッ!!　』
クロス達は勝利の余韻に浸りながら観客席に行くと、見慣れない2人の男女が居た。

クロスが男女の男の方に声を掛ける
「誰だ？」
「あぁ、お前達には言っていなかったな、俺はグレンの昔の友人、アルベルトだ、そしてこの女はリィエルだ。
唐突だが俺は奴に突然の用事で少々取り込んでいるので、手を離せないからこのクラスの指揮を任された。」
「お願い……信じて…」
グレンの友人と名乗る長髪で鷹のような目をしている青年【アルベルト】と帝国では珍しい青い髪をして、人形のように表情が読めない少女【リィエル】はクロス達に、経緯を話し、協力を願う。
「なんとなくだが……とりあえず先生とここに居ないティンジェルさんは何かに巻き込まれてるってことだな？　……分かった、信じるよ」
「兄さんが信じるなら…私も信じるわ」
「……感謝する」
アルベルトの言葉を聞いたクロス達は、協力を承諾し、他の生徒達に競技のアドバイスを始めた。
そして【変身】や【グランツィア】等の競技で、順位を詰めて、ラストの種目【決闘

戦】が始まる前、クロスはシスティーナに声を掛けた。
「システィーナ、実戦で【アレ】を使える準備は出来てるか？」
「勿論よ、貴方の特訓のお陰で習得できたから無問題よ」
「……そうか　……頑張れよ」
「ええッ!!」
そしてその【決闘戦】の決勝――ラストバトルで、システィーナの対戦相手は【セルフ・トランスパレント】を使い姿を視認できないようにする。
相手を見つけようと周囲を見渡したシスティーナだったが、すぐに目を閉じて、左手を前へ付き出した。
そして思い出すのはクロスとの特訓
『見える物だけ信じるな、相手の存在、魔力、気配を感じろ――――』
目を閉じたシスティーナは、心眼で後ろから魔力が移動するを感じた。
それからの行動は速かった。
「！　――《拒み阻めよ・嵐の壁よ・その下肢に安らぎを》――ッ！」
開眼したシスティーナは、相手が居る方を向き、【ストーム・ウォール】を発動させる。
「な、何故居る場所が分かった――それになんだ、この呪文は――ッ!?」
「そこッ！　《大いなる風よ》――ッ！」

全く見覚えのない呪文に固まってしまった対戦相手――1組の生徒【ハインケル】の様子を見逃すことはなく、システィーナは【ストーム・ウォール】に重ねた【ゲイル・ブロウ】で場外に吹き飛ばす。

一瞬の静寂の後に、大歓声が響く。

『き、決まったァァァァ――ッ!!　場外だぁぁぁぁぁぁ――ッ！　なんと、なんとぉ!?　2組が！　あの2組が優勝だぁぁぁぁぁぁ――ッ!!』

「はぁ――はぁ――か、勝った……（クロスから【心眼】を学んでなかったらやられてたわ……）」

辛うじて勝利を拾ったものの、その激しい消耗と疲労から、システィーナがぐったりと脱力して、その場に片膝をついている。

すると――

「やったぁぁぁぁぁぁ――ッ!!」

「よっしゃぁぁぁぁぁぁ――ッ!!」

2組の生徒達が観客席から飛び出し、次々とシスティーナのもとに駆け寄ってくる。

そしてシスティーナを胴上げする。

「え!?　その、きゃあッ!?」

宙で目を白黒させながら慌てるシスティーナにお構い無く、2組の生徒達は歓喜のま

まにシスティーナの健闘を讃える。
「……よくやった」
アルベルトはそんなシスティーナ達の様子を遠目で見守りながら、誰にも聞こえない声で1人呟く。
そんな最中、クロスは何かを感じ取り、【心眼】を使用し、何かを探していた。
「――――！」
そして何かを発見したクロスは、アルベルトに声を掛ける。
「アルベルトさん、ちょっと用事が出来たんで、少し競技場を離れて良いですか？」
「？　まぁ競技祭も終わりだし、いいだろう」
「ありがとうございますッ！」
返事を聞くとクロスは、観客席から少し離れると、ジャンプで競技場の天井に登ると、【疾風脚（シュトロム）】を使用し、競技場よりも1キロスほど離れた平地に降り立つ。
『ゼット、感じるか？　何かがこの地球に来ようとしているのを』
『あぁ、ウルトラ感じるぜ、でもどちらかというと、この世界に無理やり連れてこられたみたいな感じがするぜ』
『無理やり連れてこられた……か』
クロスは学院に入学する前に倒した、ある怪獣の顔を思い出す。

『しっかりしろ、クロス、この宇宙に来てしまった以上、元の宇宙に返す手段は無いんだ、倒すしかない。
それに来た怪獣が【デビルスプリンター】で凶暴化していたら……』
『……あぁ、分かってるよ……フェジテに被害が及ぶ前に【デビルスプリンター】で凶暴化した怪獣は倒すしか無いってな』
『!?　来るぞッ！』
「ッ!?」
するとクロスより少し離れた空に亀裂が走り、その中から、一匹の怪獣が飛び出した。
その怪獣は茶色の表皮に1対の角がある2足歩行の怪獣だった。
そしてその怪獣は目が赤く染まっていた。
「ゼット！　あの怪獣はなんだ!?」
『あぁ！【古代怪獣　ゴモラ】だ！　それにあいつは【デビルスプリンター】で凶暴化している。
フェジテに被害が及ぶ前に倒すぞ！　クロス！』
「押忍ッ!!」
クロスはそう言うと、ゼットライザーのトリガーを押す。
すると【ヒーローズゲート】が目の前に展開され、クロスは直ぐにゲートに飛び込む

ヒーローズゲートからインナースペースに入ったクロスは【ウルトラアクセスカード】をゼットライザーにセットする。
《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ．》
腰のメダルホルダーから、左上に置いた【ウルトラマンゼロ】、【ウルトラセブン】、【ウルトラマンレオ】ウルトラメダルを取り出し、右手の上に広げる。
『宇宙拳法！　秘伝の神業ッ！』
ウルトラメダルをゼットライザーのブレードのスリットにセットする。
『ゼロ師匠！　セブン師匠！　レオ師匠！』
ブレードを動かし、メダルをスキャンさせる。
《Ｚｅｒｏ．》《Ｓｅｖｅｎ．》《Ｌｅｏ．》
『押忍ッ！』
ブレードを展開させると、光が集まり、【ウルトラマンゼット】がクロスの背後に立つと手を広げながらこう叫ぶ。
『ご唱和くださいッ！我の名をッ！　ウルトラマンゼェェェェェットッ!!!』
『ウルトラマァァァン!!　ゼェェェェェットッ!!!』
クロスはゼットライザーを天に掲げて、トリガーを押す。

『デヤッ！』
『デュワッ！』
『イヤァッ！』
《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ａｌｐｈａ　Ｅｄｇｅ．》
『デュワッ！』
【ウルトラマンゼロ】、【ウルトラセブン】、【ウルトラマンレオ】が残光を残して飛び、その残光が中心に集まり、その中から【ウルトラマンゼット　アルファエッジ】が飛び出した

競技祭会場は、混乱に包まれていた。
２組が優勝したと思ったら、表彰式に出てきたのは知らない２人の男女で、知らない男女の正体はグレンとルミアで、ビックリしたと思ったら、謎の結界で聞こえなくなったと思ったら、結界が解除されて、グレン達が混乱を収めようとしたら突然、外に怪獣が現れたとわけがわからないことが立て続けに起こったことによって、会場は大混乱に包まれた。
いつこちらに来るかわからない怪獣に人々が怯えていると――――
『『アルファバーンキックッ！』』

『デュワッ！』

『■■■■■■■――――ッ!?』

突然赤と青と銀色の巨人【ウルトラマンゼット】が、空から炎を纏った蹴りを叩き付け、怪獣【ゴモラ】を後ろに吹き飛ばす。

ゼットは、競技場の方を見ると、頷き、またゴモラに攻撃を仕掛けていく。

「あの巨人は、あの時に……」

「やっぱりここに居たんですね……」

ルミアとアリシアはそれぞれ、久しぶりに見たゼットの姿に驚き。

「な、なんじゃ！　あの巨人は!?」

「あれが……光の巨人か……」

親衛隊の総隊長であるゼーロスとセリカは突然現れた巨人に驚愕し。

「【ウルトラマンゼット】……クロス、その怪獣は、頼むぞ」

「クロス……気をつけて……」

「皆さん、落ち着いて！　街の方へ避難してください！」

グレンと観客席に居るシスティーナとアリサはゼットがクロスであることをしっているため、直ぐに避難誘導を開始していた。

ゼットは突進してくるゴモラを受け止め、膝蹴りからの連続パンチで、行動を阻害し、2つのゼットスラッガーをヌンチャクのように繋げて、攻撃を始めた。
『■■■■――――ッ！』
『ゼアァッ！　ゼアァァッ！　――ゼアッ!?』
だが、ゴモラの強靭な顎によって受け止められ、明後日の方向に飛ばされた。
ゼットは少し驚いたが、すぐさま宇宙拳法での攻撃を始める。
だが、ゴモラの怪力によって、技を決めることが出来ない。
『くっ……』
『ウルトラ馬鹿力だな、こいつ！』
そして尻尾での攻撃で転ばされ、さらに追撃によって立ち上がることが難しくなってしまった。
対抗しようと、巨大なウルトラゼットライザーを装備し、攻撃を仕掛けるゼットだが、、競技場の数メトラ前まで、投げ飛ばされてしまう。
その衝撃で、表彰台にまだ残っていた、5人を転ばせてしまう。
するとアリシアが持っていた箱が開き、中から3枚のメダルが飛び出す。
『あれはウルトラメダル!?　何故女王陛下が!?』
『ん…？　ってあれは【マン兄さん】と【エース兄さん】と【タロウ兄さん】のメダルじゃ

ないですか！　』
『えっ！』
『あれらがあればゴモラの馬鹿力に対抗できるはずでございますよクロス！　あの子からメダルをもらおう！』
『女王陛下をあの子呼び……　まぁいいか、でもどうやって……？　今でも人間大じゃないとしゃべれないし……』
『よし、こんな時は気合いと、ボディーランゲージだッ！』
『押忍！』
ゼットは蹴りでゴモラを押し返し、競技場に居るアリシアの方を向き、しゃがんで、モーションでアピールをした。
『　女王陛下！　そのメダルを！　くださいッ！』
「もしかして……本当にこのメダルを…？」
とアリシアが困惑していると、グレンが叫ぶ。
「女王陛下ッ！　その巨人……【ウルトラマンゼット】にメダルを渡してくださいッ！あいつならあの怪獣も何とかしてくれるはずッ！」
「ウルトラマンゼット…それが貴方の名前なのですね？　そしてこれは貴方に必要な物……」

アリシアがそう尋ねると、ゼットは首を縦に振る。
「お願いします、ウルトラマンゼット、娘を、この学院を、この街を守ってください――ッ！」
その叫びと共にアリシアはメダルをゼットに向かって投げる。
ゼットはそれを掴むと、インナースペース内のクロスのメダルホルダーに赤い光が入り込む。
『ウルトラフュージョンだ！　真っ赤に燃える勇気の力ッ！　手に入れるぞッ！』
『押忍ッ!!!』

腰のメダルホルダーから、中央上に置いた【ウルトラマン】、【ウルトラマンエース】、【ウルトラマンタロウ】ウルトラメダルを取り出し、右手の上に広げる。
『真っ赤に燃える、勇気の力ッ！』
ウルトラメダルをゼットライザーのブレードのスリットにセットする。
『マン兄さん！　エース兄さん！　タロウ兄さん！』
ブレードを動かし、メダルをスキャンさせる。
《Ｕｌｔｒａｍａｎ．》《Ａｃｅ．》《Ｔａｒｏ．》
『押忍ッ！』

ブレードを展開させると、光が集まり、【ウルトラマンゼット】がクロスの背後に立つと手を広げながらこう叫ぶ。

『ご唱和くださいッ！我の名をッ！　ウルトラマンゼェェェェェットッ!!!』

『ウルトラマァァァン!!　ゼェェェェェットッ!!!』

クロスはゼットライザーを天に掲げて、トリガーを押す。

『ヘェェッ!!』

『トワァッ！』

『タァァッ！』

《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ｂｅｔａ　Ｓｍａｓｈ・》

『デェェッ！』

【ウルトラマン】、【ウルトラマンエース】、【ウルトラマンタロウ】が残光を残して飛び、その残光が中心に集まり、その中から【ウルトラマンゼット　ベータスマッシュ】が飛び出した

『ウルトラマァァァァン!!!ゼェェェェット!!!!　ベータスァァァァマッシュッ!!!!!』

ゼットが赤と銀色を基調とした巨人【ウルトラマンゼット　ベータスマッシュ】に変化したと同時に、ゴモラを飛び蹴りで吹き飛ばす。

『イ゛ェ゛ェ゛ェ゛ェ゛ェ゛ェ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！゛！゛！゛！゛！゛』

ゼットは立ち上がり、ポーズを決め、叫ぶとゴモラへ向かって走る。

『ダ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛！゛！゛！゛！゛！゛』

ゼットはチョップや、関節技などを使ってゴモラに攻撃を仕掛ける、途中でゴモラが突進をしてくるが、角を掴み、止めようとすると、アルファエッジで受け止めれなかったゴモラを止めることに成功した。

ゼットはゴモラの角をへし折ると、両腕をZ型のカラータイマーの左右に当てて、左腕を上に、右腕を下に下げ、エネルギーでZの形を作る。

そして右手を頭の横に、左手を前へ突き出し、エネルギーを貯める。

エネルギーが溜まった瞬間、腕を十字にして光線を解き放つ。

『『ゼスティウム光線ッ!!!!』』

ゴモラをゼスティウム光線で上空へと打ち上げる、そしてゼットも上空へ飛び上がり、右腕に赤い炎のようなエネルギーをチャージすると、ゴモラに顎に向かってアッパーをぶちかます。

『『ゼスティウムッ！　アッパァァァァァ!!!!』』

アッパーが直撃したゴモラは身体を貫かれ、爆発四散した。

そしてゼットはアリシアの方を見ると、頷き、空へ飛んでいく。

「ありがとう、ウルトラマンゼット……」

アリシアはゼットの姿が見えなくなるまで空を見続けた

闇を滅する護りの炎

魔術競技祭の裏で起きていた今回の事件は、呪いの道具を使い、アリシアを人質にし、王室親衛隊によってルミアを殺害させようとした天の知慧研究会の計画だった。

だが、今回の誤算（イレギュラー）は、殺害対象であるルミアの担任が魔術の発動――――呪いの起動を封じる固有魔術（オリジナル）【愚者の世界】を持ったグレンだった。

グレンはルミアを抱えながら、王室親衛隊との逃走劇中にアルベルトとリィエルに会い、【セルフ・イリュージョン】で入れ替わって、アルベルトとリィエルとして、グレンとルミアは女王陛下の前に立つことに成功した。

そしてセリカの断絶結界内で、いざこざがありつつも、アリシアが身につけた呪いのネックレスを【愚者の世界】の範囲内で外すことに成功し、一安心してると、ゴモラが現れて、会場は大混乱になったが、ウルトラマンゼットの活躍によって、ゴモラは倒され、アリシアの言葉で会場に来た人間達を落ち着かせることに成功した。

その裏で本当は、天の知慧研究会のメンバーであったエレノアがアルベルトとリィエルと会敵したが、逃げられてしまった。

これが事件の真相であった。

クロスの自室でクロスとゼットは、色々話し合っていた。
『ゼット、今回の事件、どう思う？』
『ウルトラ不可解だぜ、なんで天の知慧の連中はここまでルミアを付け狙うのかが本当にわからない』
『そうだよな、ティンジェルさんの異能は【感応増幅】、そこまで奴らが欲しがる能力か？』
『やっぱり、何か深い歴史の闇を感じるぜぇ…』
『まぁ、ゼットと一体化して、ゼスティウム光線が撃てる時点で俺も異能者だしな』
そういうと、クロスは立ち上がる。
「――――とりあえず今は何も起きてないから、無理に探りを入れる必要はない、逆に被害が及ぶ可能性があるからな、待つしかないか」
そして、クロスは自分の部屋を後にする。

事件の数日後、クロスとアリサは、フェジテの近くにあった廃村の跡地にて、天の知慧研究会の襲撃にあった。
何故襲ってきたのか理由はわからないが、クロスとアリサは迎撃する。

「デリヤアアアアアア――――――ッ！」
「ガアッ!?」
「ぎゃあぁぁぁぁぁ――ッ!?」
クロスは2本の【エナジー・ゼットスラッガー】を連結させて、ヌンチャクにして振り回していた。
振り回されたゼットスラッガーの刃は、魔術師達の身体に深い裂傷が走り――――
「《烈火の荒波よ》――ッ！」
「グッ!?」
「アッツッ!?」
アリサが【ブレイズ・バースト】の改変魔術、黒魔改【ブレイズ・ウェーブ】を発動する。
紅蓮の業火が台風の時の荒波のように押し寄せ、魔術師達を包み込む。
大体の魔術師はこの2つで全滅したが、奥にいた2人の魔術師が残っていた。
「子供の癖にやるようだな、だが我々には通じない」
「我々には切り札がある」
そういうと、魔術師は1枚のメダルを取り出す。
それはウルトラメダルに近いが、裏面は黒く、表面には怪獣が描かれていた。

『あれは【怪獣メダル】ッ!?　何で彼奴らが持っているんだッ!?』
『【怪獣メダル】？』
『あぁ、怪獣の素材を使ってウルトラメダルと同じ製造法で作ったメダルだ』
『つまりアレからは怪獣を召喚できるってことか!?』
『いや、そういう訳ではない、そもそも光の国のテクノロジーはこの世界のテクノロジーに比べるとオーバーすぎる、いくら魔術が使えたとしても、巨大な怪獣は召喚できないだろう、成功したとしてもせめて１０メトラくらいだ』
「来いッ！《召喚（サモン）・シビルジャッジメンター【ギャラクトロン】》――ッ！」
　ゼットと会話をし終わった直後に、魔術師は召喚魔術を唱えて、足元に法陣が形成される。
　そしてその中から１０メトラほどのロボット怪獣、ギャラクトロンが出現する。
『■■■■――ッ！』
「これが怪獣かッ！　素晴らしい力だ！　これがあればお前らなんかすぐに殺せる！」
『やっぱりか、でも小さいがギャラクトロンはウルトラヤバイ強敵だ、でもギャラクトロンと戦うには、俺はデカすぎる、頑張れよクロスッ！』
　ゼットはクロスに気合いを入れるように声を掛ける。
「押忍ッ！　行くぞアリサッ！」

「ええ！」
「デリャアアアアアア――――ッ！」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁ――――ッ！」
「行け！　ギャラクトロンッ！」
「あいつらを殺せッ！」
『■■■■■■――ッ！』
クロスとアリサが咆哮を上げて、走る。
魔術師が命令をしてギャラクトロンを動かす。
こうしてクロスとアリサ対魔術師２人とギャラクトロンのバトルが始まる。
クロスは出したままのスラッガーを振り回し、ギャラクトロンを切りつけるが、ギャラクトロンの鋼鉄の外装に傷は付くどころが、逆にスラッガーを掴まれて、投げ飛ばされてしまった。
「チッ――――」
「兄さん！　下がって！　《真紅の炎帝よ・劫火の軍旗掲げ・朱に蹂躙せよ》――――ッ！」
アリサがクロスを後ろに下がらせ、【インフェルノ・フレア】を発動し、先程の【ブレイズ・ウェーブ】よりも強い炎の波がギャラクトロンを飲み込む、だが。

「効かない!?」
『いくら小さくて弱体化してるとはいえ、ウルトラマンを苦戦させた強敵だ、B級魔術が効くとは思えない』
「なら話が早い、アリサ、あいつには普通の魔術は効かない、だから時間稼ぐから被害が及ばんようにお前のアレを展開しろ」
　そういうとクロスは赫耀銃剣【クリムゾンセイバー】を取り出し、もう一度アルカナの方を振り返る。
「頼りにしてるぞ？　アリサ？」
「！　――――ええ！　任せなさいッ！」
　クロスはアリサの返事を聞くと、ギャラクトロンに向かって駆け出し、魔術を唱えながら肉薄する。アリサは赤い長剣を取り出すと、地面に突き刺し、長剣の刀身を撫でながら呪文を唱え始める。
「《我は炎を操りし者・我は炎帝の血を引く者――――》」
「《猿王の鉄槌よ》――――【猿王銃（コングガン）】ッ！」
　アリサが瞳を閉じ詠唱を始めた瞬間、クロスは赤黒い巨大な拳を放ち、ギャラクトロンを１０メトラほど吹き飛ばし、魔術師達とギャラクトロンの注意を惹き付ける。
「《――――・光は炎を広め・闇は炎で封ず・我が主は劫火を操り・我らを高める世界

を創る――――》」

「ホラホラッ！　こっちだッ！」

クロスは炎を込めた魔弾を撃ちまくり、ギャラクトロンの注意を惹き付け続ける。

最大装填数の６発を、撃ち終わったら、即座にカートリッジを抜き、別のカートリッジを差し込み、また撃ち始める。

「《――――・為らば我は其れを使い・巨悪を討ち滅ぼそう・我が居場所を護る為に――――》」

アリサの長剣が朱く光輝き、劫火を上げる。

そしてアリサが瞳を開け、最後の１節を読み上げると同時に、右手で長剣を振り上げる。

それに気付いた魔術師が声を上げる。

「しまったッ！　あの女、何かやるつもりだッ！」

「チッ！――《猛き雷帝――――》」

「させるかッ！　《追え・大蛇（パイソン）》ッ！」

止めようと、魔術師は【ライトニング・ピアス】を唱えようとするが、クロスの【大蛇砲（カルヴァリン）】により妨害される。

そしてアリサが魔術を発動させる。

「《――――――・愛する人を護る為に》ッ！」

振り上げた長剣が炎と光を放ち、周囲を炎と閃光で包み込む。

閃光で目がやられた魔術師達が目を開けると――――

「!?」

「なんだ……ここは？」

そこは赤い空に紫色のオーロラが満ち、地面は全面炎に満ちている謎の世界であった。

その空間の中心にはアリサが朱い光と劫火に包まれた剣を持ち、聖女が着るような炎の服を纏っていた。

「ここは、私達が暮らす世界では無いわ、私が操る炎の世界――――【炎の荒野（フレア・フィールド）】よ」

アリサがそう言い、更に言葉を繋ぐ。

「この空間の炎は全て私の支配下、例え貴方達が起こした魔術の炎でもね？」

アリサが手を上げると、炎が蛇のように動き、魔術師とギャラクトロンを拘束した。

『■■■■■――ッ！』

「おい、糞ッ！　離せよッ！」

「《災禍霧散せり》――ッ！《災禍霧散せり》――――ッ！　何で消えないんだ!?」

【ディスペル・フォース】を唱えても消えない炎に困惑する魔術師達にアリサはこう告げ

る。

「無駄よ、私が操るこの炎は、魔術ではない、本物の炎よ、だからそんな魔術がびくともしないわ」

その事実に青ざめる魔術師達にアリサは更にこう告げる。

「その怪獣を撃破しないと、大変なことになる、私と兄さんは容赦しないわ――――行くわよ、兄さんッ！」

「押忍ッ！」

その掛け合いと共にアリサは長剣を天へ伸ばし呪文を唱える。

クロスはホルダーから1枚のメダルを取り出し、クリムゾンセイバーのメダルスリットにセットし、アリサと同じように、天に切っ先を向ける。

『【ガイ】さん……【ウルトラマンオーブ】さん…貴方の力、お借りします！』

「《宿るは紅蓮の劫火――――》」

「《真なる業火よ――――》」

２人が呪文を唱える、２人の剣の刀身に劫火が纏わりつく。

「《――――・宿るは紺碧の海――――》」

クロスが次の一節を唱えると、この空間に合わぬ、蒼い水がクリムゾンセイバーの切っ先に纏わりつく。

「《――・宿るは剛毅な大地――》」
次の一節では、黄色の稲妻が迸り。
「《――・宿るは荒ぶる暴風――》」
「《――・我が願いに答えて――》」
更に次の一節では、緑の旋風が宿る。
すると突然、４つの属性が合わさり、虹色の光に変化する。
「《――・我が祈りの力にて・本物の光を示せ》ッ！」
「《――・全てを滅ぼせ》ッ！」
クロスはクリムゾンセイバーに宿る虹色の光を使い、上空に虹色の光の輪を作り出す。
アリサの長剣の炎は一条の朱い光となり、今にも溢れだしそうに熱を発している。
それらを見た魔術師達は急いで抜け出そうとするが、もう遅く、２人は剣を振り下ろす。
「【疑似・オーブスプリームカリバー】アアアアアア!!!!!」
「【シャイニングブレイズドライヴ】ッ!!!!」
クロスの剣からは虹色の光線が、アリサの剣からは紅の熱線がそれぞれ発射され、ギャラクトロンと魔術師達に激突する。

魔術師達は直ぐ様蒸発し、ギャラクトロンは少しは耐えたのだが、直ぐ様崩壊した。
２人の光線と熱線が止むと、空間が崩壊し、アリサが意識を失い、倒れる。
クロスは直ぐ様アリサを抱えて、付近の木陰に寝かせて、自身のコートを羽織らせる。
「ったく、頼りにしているとは言ったが、無茶しやがって」
クロスはそういうと、アリサの頭を撫でる。
そしてクロスは１人で探索を始める、すると一個の宝石が入った指輪を見つける。
クロスはそれを拾う。
「なんだこれ？　これが連中が探していたもの？とりあえず解析して見ないと分からないか」
クロスはそれをしまうと、アリサを背負い、自宅へ帰っていった。
そしてその指輪がゼットとクロスを更なる混沌に巻き込むことになるとは知るよしもなかった。

第3章―戦車と学修旅行、オレ色に染めあげろ！―戦車の通る道

フェジテから遠く離れた森の中で、ウルトラマンゼット・アルファエッジと怪獣が戦っていた。

ゼットは、怪獣をダウンさせると両腕をＺ型のカラータイマーの左右に当てて、左腕を上に、右腕を下に下げ、ゼスティウムエネルギーでＺの形を作る。

そして右手を頭の横に、左手を前へ突き出し、ゼスティウムエネルギーの帯を作り出す。

そして腕を十字にして光線を解き放つ。

『『ゼスティウム光線ッ!!!!』』

『■■■■■■■■――――ッ！』

【ゼスティウム光線】が怪獣に直撃し、爆発を起こす。

『シュワッチ！』

ゼットはそのまま上空へ飛び去る。

そのすぐ後、変身を解いたクロスが怪獣の爆心地へとやってきて、何かを探す。

「はぁ、やっぱりねぇか……」
『きっと誰かが持っているのですよクロス、見つけたらメダルをもらえば良いだけの話です』
「ウルトラメダルはこの世界じゃ、俺とその持っている人物しか居ないんだ、女王陛下のような即座に国民の命を守ろうとする人物しか渡してくる気がしないんだよな……ッ!?」
クロスは、何者かの気配を感じると即座に【疾風脚（シュトロム）】で飛び去る。
カイトが飛び去った直後に、やってきた男は爆心地を見てこう呟いた。
「これが光の巨人の力か…恐ろしいな」

家へたどり着いたクロスは自室のベットに倒れる。
『なかなか見つからねぇな、【ティガ先輩】のメダル』
『それにしても珍しいな、クロスが自分からメダルを探しにいくなんて』
『最近怪獣の出現が多いだろ？　そうなるといつかはアルファエッジやベータスマッシュじゃ勝てない相手が出てくる可能性もある、だから【ガンマフューチャー】のメダルを取り戻さねぇといけないって思ったんだ』
実は1年前まではクロスが持っていたメダルは19枚だけではなかったのだ。

クロスはアルファエッジと必殺技に使用する9枚の他に【ウルトラマンティガ】、【ウルトラマンダイナ】、【ウルトラマンガイア】のメダルを持っていた。
「この魔術世界…ガンマフューチャーがあれば何とかなるからな」
【ウルトラマンゼット・ガンマフューチャー】
アルファエッジやベータスマッシュとは違い、超能力で戦うクールタイプの戦士。
ウルトラマンティガ、ウルトラマンダイナ、ウルトラマンガイアの【輝ける先輩達】のメダルを使って変身するタイプで、鞭状のエネルギーを叩き込む【ゼスティウムドライブ】やティガ、ダイナ、ガイアの幻影を作り出す【ガンマイリュージョン】などの多彩な超能力技を繰り出せる。
クロスがこの三枚を手に入れてからはかなり活用するそとが多かったが、1年前に起こったとある事件でガンマフューチャーへウルトラフュージョンしようとした瞬間に、【セルフ・ポリモルフ】の肉体変化による硬直で動きを封じられ、敵の一斉攻撃を受け、クロスが女の身体になって吹っ飛ばされ、三枚のメダルが行方不明になるということが起きてしまったのだ。
その影響で学院への説明が大変だったのと、女性として大切なことを勉強したりと嫌な思い出しかない事件に吐き気が出てきそうになる。
『それにしても、何でダイナ先輩とガイア先輩のメダルは見つかったのに、ティガ先輩の

メダルは見つからないのでしょうかね？』
『…とりあえず天の知慧の連中が持っていないことを祈るとするか…』
そういうと、クロスは立ち上がり、【疑似（パラ）・オーブスプリームカリバー】を撃ったことにより一部機能が破壊された赫耀銃剣【クリムゾンセイバー】のメンテナンスをし始めた。
メンテナンスを始めて一時間程が過ぎた頃、アリサがクロスに声を掛けた。
「兄さん、今ちょっといい？」
「なんだ？　別に良いが…」
「グレン先生が来た、何か話したいことがあるって」
「？　何かあったのか？」
そういうとクロスは応接間に向かった。
応接間にはグレンが待っていた。
そしてクロスはグレンから、話を聞く。
「こんな深夜に来るなんて、何かヤバイことでも起こりましたか？」
「あぁ、これが魔術学院に届いたんだがとりあえずこれを見てくれ」
「かなり重要そうだが…俺が見て良いのか？」
「お前は生徒だが、魔術師殺しでありウルトラマンゼットだろ？　それにルミアに関す

ることだし、知っているお前が見ても良いだろ」
そう言うとグレンは筒型の封筒をクロスに渡す。
クロスは開けて中身を読みながら、グレンに話し掛ける。
「へぇ、鷹の紋付きの書類が魔術学院に届いたってことは、護衛が編入生として来るのか……　って【戦車】はヤバくないか？　戦場で見たことあるけど、あの猪突猛進さで護衛は無理じゃねぇか？　もうひとりは知らんが…」
「…だよな、あいつはマトモだから良いとしてリィエルは無いよな…」
「帝国軍は何を考えているんだか……」
「はぁ……」
帝国軍のわけがわからない人選にため息を付くクロスとグレンであった。

「デュワ！」
「ッ！　――――《雷精よ》ッ！《撃て》ッ！《撃て》ッ！」
グレンとの話し合いの翌日の早朝、まだ薄暗い公園の中で、クロスとシスティーナが組手をしていた。
クロスが【魔脚】で青い光を纏いながら高速で近づき、パンチを放つ。
それを見たシスティーナが後ろに回避をし、【ショック・ボルト】の３連射でクロスに

攻撃をする。
「やるねぇ、【魔連脚】ッ！」
「ッ!?」
「《こっちだ》」
　クロスは高く飛び上がり、回転しながら回避すると、【魔脚】を連続で使用し、システィーナの周囲を飛び回る。
　突然高速で飛び回り始めたクロスを見て、心眼も使えないほど硬直したシスティーナに向かってクロスは黒魔改【ボルト・レーザー】を放つ。
　組手開始前にシスティーナに貼られた防御障壁に蒼電の光線が直撃し、衝撃が公園を支配する。
　そしてシスティーナは座り込む。
「ハァ…ハァ…やっぱり勝てないわ…」
「そうか？　回避した後のショック・ボルトはタイミングが良かった、ずいぶん成長したもんだ」
「まだクロス達には遠く及ばないけどね…」
「ハハッ、お前もかなり特訓すれば、俺レベルとはいかないけど一流の魔術師になるさ」
　と軽いジョークを交わした２人は更に特訓を始めた。

特訓が終わり、クロスは家に戻り朝食を食べて、修理中のクリムゾンセイバーを倉庫にしまい、鍵を掛ける。
「よし、これで大丈夫だろう」
そういうとクロスはアリサと合流し、学院に向かって歩きだした。
学院正門へと続く上り坂にグレン達が居た。
『おっ！　グレン達がいらっしゃるぞクロス、合流しよう』
『おう、わかった……ん?』
するとグレン達の更に奥の麓に、学院の制服に身を包んだ薄青髪の小柄な少女と黒髪の少女が背を向けて佇んでいた。
『あの子達が特務分室から来た奴らですか、両方強そうだな』
『あぁ、確かにな――――』
クロスがゼットと話をしていると、突然くるりと少女がこちらを振り向くと、即座に少女が何かを呟きながら、石畳に手をつき引き上げる。
もうひとりの少女は一瞬ポカンとなるが、すぐに少女を止めに入る。
『あれは……ッ！　何をするつもりだ!?』
引き上げられた少女の手には、いきなり無骨な大剣が出現し、次の瞬間、もう1人の

少女の制止を破り、グレン達の元へ、一直線に駆け寄っていく。
「えッ！　いきなり襲撃ッ!?」
「何やってんのッ！」
　クロスが【魔脚】を使いながら、動けないシスティーナ達を飛び越え、グレンに切りかかろうとする少女の大剣に向かって駆けた。
「《光あれ》ッ！」
「「「「グッ!?」」」」
　そのままクロスはグレンの横をすり抜け、【フラッシュ・ライト】でその場に居る全員の目を一時使用不能状態にし、魔脚を使い全力で駆ける。
「ゼアッ！」
「あう」
　クロスは勢いのまま、チョップで少女の大剣を弾き、少女ごと大剣を吹き飛ばす。
　少女はその衝撃で、大剣を手離す。
　そのままクロスは右腕に赤い炎のようなゼスティウムエネルギーをチャージする。
「『ゼスティウムアッパー！』」
　吹き飛んだ大剣を冷静に【ゼスティウムアッパー】で破壊する。
　クロスは少女を抱き抱えると、グレン達の元に降り立つ。

生身でゼスティウムアッパーを使ったのは始めてで、グレンは腕を少し傷つけるが、そこまでではないので無視をする。
そうして、クロス達はグレン達と合流する。
その後、薄青色髪の少女――リィエルはグレンに『殺す気か！』と叱られていた。
あいさつの時にも変なことをやらかしそうになり、グレンに叱られていた。
そしてもう1人の少女の自己紹介の方だが…
「【カスミ＝ライトスター】といいます、よろしくお願いしますね？」
とても良いあいさつをしていた。
天然バカのリィエルとは違い、知的で、良識のある自己紹介だった。
『あの子、強いな……単純な戦闘力とストッパー（グレン）が居るから、ティンジェルさんの護衛にしたんだろうな』
『そうでございますね、正直リィエル1人で護衛だったらウルトラヤバイでしょうし』
そうクロス達が相談していると、グレンがクロスに声を掛けた。
「クロス、カスミの学院の案内頼めるか？」
「押忍！　…じゃなくてはい！」
「別に俺の場合は押忍でも良いんだがな…　まぁ頼んだ」
そういうと、グレンは教壇へと戻り、代わってカスミが話掛けてきた。

「どうも、クロスさん、カスミといいます、先ほどはリィエルを止めてくださり、ありがとうございます」
「いえいえ、先生が死んでしまったら、ヤバイと思いまして、行動しました」
「ふふっ、それにしてもリィエルの大剣を破壊できる程のパワーを持った人が学院内に居たなんてびっくりです」
「一応C級の軍用魔術は覚えているので、それに俺拳法の使い手ですし」
と色々な世間話をした。
その間、何度かカスミがビックリしたように止まったが、クロスはあまり気にしていなかった。

放課後、クロスはカスミの案内を始めた。
学院内部を全て紹介したクロスはカスミと共に屋上に上がり、外の景色を眺めていた。
するとカスミがクロスに話し掛ける。
「ねぇ、クロスさん、【光の巨人】って知ってますか？」
「光の巨人？　あぁ、【メルガリウスの天空城】の…？」
『不味い、バレてるのかも……』

とビビっていたクロスだが
「そうです、光の巨人は【メルガリウスの天空城】に出てくる謎の一つである正体不明の巨人、私すごく気になって調べてるんです」
「へ、へぇ……そうなんすか？」
「そして最近、その巨人の手がかりを見つけたんだよ」
そういうとカスミはクロスに1枚の紙を渡す。
そこには巨人と思わしき人形が描かれている壁画の写しだった、そして壁画の下部には文字か書かれている。
「えーと、【ウルティメルス・ティーガー】？」
「これは、超古代文字を少しずつ古代の文字に変換していったものなんです、つまりこれをもうちょっと古代の文字にすれば、名前が分かるって訳なので今それを頑張っているんですよ
これはナス族の古語方便を参考をして」
「へ、へぇ…でも、メルガリウスの天空城のモデルがナス族が居た時代よりも千年以上も離れてるから、もうちょっと遡りましょうよ」
「クロスくん、貴方は分かっていますね、それでは一緒に考えましょう」
「押忍！」

そして何度かの書籍を確認し、クロスが正体を掴んだ。
『この文字、最初に渡された光の巨人の文字にそっくりだ、えーと、この文字が現代のこれで、これがこれだから……【ウルトラマントリガー】だな！　……ん？』
聞いたことのないウルトラマンの名前に困惑する。
「【ウルトラマントリガー】って誰だ…？」
『…ティガ先輩に似た名前だけど…ってよく見たらこの壁画もティガ先輩にそっくりだ……』
「唯一違うとわかるところはカラータイマーの形ぐらいか…本当によく似てる」
クロス達が議論を重ねていると
「【ウルトラマントリガー】？　それが光の巨人の名前なのですか？」
「はっ!?　押忍ッ！　……じゃなくてはいッ！」
「ふふっ、そうなんだ…」
クロスの答えに満足したように笑みを浮かべるカスミ、するとカスミはクロスに話し掛ける。
「ねえ？　私の秘密教えて差し上げましょうか？」
「秘密？」
「ええ、実は私は遠い国【アマテラ王国】の第2皇女なのです」

「そ、そんなこと、出会ってすぐの一般人に言っていいんすか……？」
「別にいいんですよ、減るものでも無いですし
そしてアマテラ王国は、光の巨人に関係する王国だと言われています」
「ちょっと…話に付いていけてないっす…」
「私の任務は王女の護衛ですが、実は私個人でもうひとつここに来た理由があるんです
それは、この地にウルトラマンが居るという情報を得たからなの」
「会って、どうするつもりなんですか？」
そういうクロスの問いにはカスミはこう答える。
「ただ会ってみたいんです、【ウルトラマン】に」
「へ!?　それだけ!?」
「ええ」
単調な答えに深いため息を付いたクロスであった。

追憶と未来の日誌（ｍｅｍｏｒｙ　Ｆｕｔｕｒｅ　ｒｅｃｏｒｄ）その１

短編①【過去…ガンマフューチャーの戦い】

３年前のとある街、そこで一体の怪獣が暴れていた。

ヒーローズゲートからインナースペースに入ったクロスは【ウルトラアクセスカード】をゼットライザーにセットする。

《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ.》

腰のメダルホルダーから、右上に置いた【ウルトラマンティガ】、【ウルトラマンダイナ】、【ウルトラマンガイア】のウルトラメダルを取り出し、右手の上に広げる。

『変幻自在、神秘の光!』

三枚のウルトラメダルをゼットライザーのブレードのスリットにセットする。

『ティガ先輩!　ダイナ先輩!　ガイア先輩!』

ブレードを動かし、メダルを読み込ませる。

《Ｔｉｇａ.》《Ｄｙｎａ.》《Ｇａｉａ.》

『押忍!』

ブレードを展開させると、光が集まり、【ウルトラマンゼット】が背後に立つと手を広げながらこう叫ぶ。

『ご唱和くださいッ！我の名をッ！　ウルトラマンゼェェェェェットッ!!!』

『ウルトラマン!!　ゼェェェェェットッ!!!』

クロスはゼットライザーを天に掲げて、トリガーを押す。

『デャッ！』

『ダァッ！』

『デュアッ！』

《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ｇａｍｍａ　Ｆｕｔｕｒｅ.》

『デェア…』

【ウルトラマンティガ】、【ウルトラマンダイナ】、【ウルトラマンガイア】が残光を残して飛び、その残光が中心に集まり、その中から【ウルトラマンゼット　ガンマフューチャー】が飛び出した。

『デェア…』

突然虹色の光の柱が出現し、その中から金色のプロテクターと赤と紫と銀色のウルトラマンゼット、【ウルトラマンゼット：ガンマフューチャー】が現れた。

『ウルトラマンゼット・ガンマフューチャー…』

『■■■■――ッ！』

空から巨大な翼を持った怪獣が、ゼットに向かって飛来する。

ゼットは両腕を胸部に当て、両腕を開き、ゼットの周囲の大気の色が赤く変化する程のエネルギーを広げる。

そして両手を頭部に添えて、両手にゼスティウムエネルギーを溜め、右手を赤色の、左手を紫色のエネルギーの鞭にして、怪獣を叩き落とす。

『ゼスティウムドライブッ!!』

『■■■■――ッ!?』

怪獣は地面に叩きつけられ、体勢を崩す。

ゼットは手を回し、指を鳴らす。

『ガンマイリュージョン！』

指を鳴らすと同時にゼットから怪獣を囲むように3つの光が飛び出し、それが【ウルトラマンティガ】、【ウルトラマンダイナ】、【ウルトラマンガイア】の幻影が飛び出す。

『デャッ！』

『ダァッ！』

『デュアッ！』

怪獣が体勢を立て直すと同時にそれぞれの幻影が、戦闘態勢と取る。
ガイアは両腕の間に光球が宿り、カラータイマーに光球を翳すと、ガイアの身体が赤と青、銀色の体表に、黒と金のラインが更に増えた姿、【ウルトラマンガイア・スプリーム・ヴァージョン】にヴァージョンアップする。
『デュア！　デュアアアアア――――ッ!!!!　デュアッ！』
ガイアは右腕を、天へ向け、左手をカラータイマーに添える。
そして両腕を2回程大回転させると、両手を合わせ、右手をずらすと、ガイアSV（スプリーム・ヴァージョン）の必殺光線【フォトンスプリーム】が発射される。
『ダァッ！』
ダイナが腕を十字に組んで、必殺光線【ソルジェント光線】を発射する
『デャァァァァァァ――――ッ！　ハッ！』
ティガが両腕を前に突き出し交差させてから、大きく横に広げて紫色のエネルギーを溜めた後、同じL字に構えて放つ必殺光線【ゼペリオン光線】を放つ。
最後にゼットが両腕をZ型のカラータイマーの左右に当てて、左腕を上に、右腕を下に下げ、ゼスティウムエネルギーでZの形を作る。
そして右手を頭の横に、左手を前へ突き出し、ゼスティウムエネルギーの帯が作り出す。

そして、腕を十字にして光線を解き放つ。
『『ゼスティウム光線！』』
怪獣を四方から光線が襲い、直撃すると、爆発を起こす。
ゼットは爆発を起こす怪獣を背にし、上空を向くと、3体の幻影はゼットの身体の内部に戻る。
『シュワッチ！』
そしてゼットは紫の光の跡を残しながら上空へ飛び出すと、少し横に飛ぶと、急加速して、『Z』の軌跡を作り出しながら飛び去った。
「フフッ、面白そうな物見つけた」
そして、何処からかそれを見ていた白い服を着た女性が口を歪ませ、笑っていた

これは今から遥か未来に残った現在の文献に書かれた言葉である。
『ある闇夜、異形の巨獣現れしとき、1体の巨人が現れ、3体の巨人と共に魔を打ち払い、Z（ゼータ）を描き飛び立る』

短編②　【ウルトラマンとしての特訓・ゼロ編】
「ふッ！　はッ！　せやッ！」

『ようやくその状態でも戦うことができるようになったか！　身体能力を上げる魔術以外は解禁してもいいが、俺も少し本気で行くぞ！』
『せっかくゼロ師匠から稽古してもらえるんだ、俺も一緒だから気合い入れてけクロス！』
「――――押忍ッ！」
２年前のとある場所にてクロスは、【ウルトラマンゼロ】から特訓を受けていた。
その特訓は、魔術禁止で更に両腕と両足、胴体と頭にそれぞれ２０ｋｇの重り、合計１２０ｋｇの重りを付けて、人間大のゼロの稽古をしていた。
一見かなり時間が掛かり無理そうに見える特訓だが、ここはゼロの【シャイニング・フィールド】と呼ばれる異空間、ここは外の世界とは時間の流れが違く、眠る必要も栄養を取ることも必要ない、そんな空間で１０年もあれば充分だろう、それにクロスは既に戦うことが出来ており、魔術を解禁した。
「《吼えよ炎獅子》――――♪」
『これが魔術か！　だがおせぇぞ！』
「ッ!?　デリャッ！」
ゼロはクロスに攻撃を仕掛ける。
クロスは重りで行動が不自由だが、魔術で補いながらも自分から動いて攻撃をしてい

く。

そしてシャイニング・フィールドの内部で５年が経過した。

「ハァァァ――――ッ!!」

『デリャァ――――ッ!!』

【ツインゼロソード】と、【アルファチェインブレード】の刃がぶつかり合う。

クロスは刃のぶつかり合いの最中も、蹴りなどで、攻撃をする。

その中で目覚めたのが――――

「おりゃぁぁぁ――――ッ！」

『そんな単調な攻撃当たるわけ――――ッ!?』

確かにクロスの蹴りは当たらなかったが、避けたゼロは何故か衝撃を受けた。

「【暴風脚】、相手に風圧を叩きつける蹴り技、１発目はどうやら通ったようですね」

『へっ、やっとここまで来たか、でも、こっからは手加減無しだッ！』

「ッ!?」

ゼロは手加減をやめて攻撃を始める。

クロスは動きが変わったゼロに翻弄される。

「《超加速》ッ！」

『時間を速めて攻撃を当てるつもりか、でもそれだけじゃあ、足りねぇぜ?』

カイトは【タイム・アクセラレイト】で自身の時間を速くして攻撃を仕掛ける。
速くなっているが、あまり攻撃が当たらない。
そして効果時間が切れて、ゼロの攻撃を喰らう。
『そんなんじゃ、俺に一回も勝てねぇぜ？』
「一本はとって見せますよ、デリャッ！」
体勢を立て直したクロスはまだゼロに立ち向かっていった。
そしてシャイニングフィールドを貼って１０年が経過しそうになったとき……
「《兵士の蛇達よ・毒牙で噛み付き・敵を薙ぎ払え》ッ！」
『ふっ、来るかッ！　来いッ！』
「《黒い蛇群（ブラックマンバ）》ッ！」
クロスの両腕が赤黒く変化すると蛇を模した拳が連続で放たれる。
ゼロはガルネイトバスターに腕に纏い蛇たちを打ち返して、その炎の拳で一気にクロスに迫る。
「ッ!?」
ガルネイトバスターがクロスにヒットして爆裂する。
『手加減はしたがちょっとやり過ぎちまったかな？　大丈夫か？』
ゼロがクロスに近付こうとする。

だが、ゼロは気づく、煙の中から一本の赤黒い棒のようなものが飛び出していることに。

するとゼロの後ろから、クロスの拳がゼロに肉薄する

「何ッ!?」

「追え！　【大蛇（パイソン）】！――――――――《猿王銃（コングガン）》ッ!!!!!」

ゼロが大蛇（パイソン）を弾くと、煙の中から出てきたクロスの赤黒い巨大な左腕【猿王銃（コングガン）】が、そのままゼロの顔面にヒットする。

その瞬間、光が周囲を包む。

そして光が止むと、体感時間で10年前にゼロと修行を始めた場所だった。

『最後の最後に負けちまったか…でも、悪い気はしねぇな』

「【黒い蛇群（ブラックマンバ）】の途中に【大蛇砲（カルヴァリン）】を放ってたお陰で助かりましたよ、逆を言えば、それを撃ってなかったらやられてた、というべきですかね？」

『普通の俺相手に1本取るとはさすがだな、これなら彼奴らにも勝てると思うぜ？』

「ありがとうございますッ！」

『へっ、良いってことよ――――じゃあな、この世界は任せたぞ』

そういうとゼロは巨大化するとウルティメイトブレスレットを使って、ウルティメイ

トイージスで飛ぶ。
「俺ッ！　絶対奴らに勝ちますッ！」
クロスは拳を天に突き上げ、ゼロを見送る。
そして重りを外したクロスは、自身の身軽さに驚愕した。
「俺の身体ってこんなに軽かったんだ…」

短編③【魔術の師匠】
クロスは何かが入っている袋を持ってフェジテから少し離れた山の山頂にある、とある民家を訪れていた。
クロスはその民家のドアを叩き、ドアを開ける。
すると民家の中から無数の雷槍がクロスに襲いかかる。
「師匠！　来ました――――ってあぶねッ!?　《火拳銃（レッドホーク）》ッ！」
クロスは炎の拳で降ってくる雷槍を破壊する。
「何するんすか師匠！　俺じゃなかったら死んでましたよ！」
「ハッハッハッ、こんな辺境にやってくる人なんてキミしか居ないだろう？」
クロスが文句を言うと、民家の奥から、青みがかった白い髪をした赤色の目をした白い格好の２０代前半の女性が笑いながら出てくる。

「で、今回は私のために何を持ってきてくれたのかな？」
「今回は紅茶の茶葉とケーキを持ってきましたよ、師匠」
「おっ、気が利くねぇ、ちょうど茶葉を切らしてたんだ」
そういうと、女性は紅茶を淹れにキッチンへ向かった
クロスは持ってきたケーキを皿に乗せると、椅子に座り、少しゼットと会話する。
『それにしても、あのクロスの師匠何者なんですかね？　何故見た目が変わらないのでしょうか？』
『そういえばゼットは知らなかったか？師匠は８００年間生きてる【永遠者（イモータリスト）】なんだぜ？』
『マジですか!?　学院のアルフォネア教授よりも長生きじゃないですか!?』
『そうさ、今は隠居しているが、ウルトラ強い【永遠者（イモータリスト）】、それが師匠【マーリン＝ユートピア】っす』
「何ボーッとしてるんだい？　クロス？」
「い、いや…あっ、そうだ！　学修旅行について考えてたんすよ！　ハハハ……」
「そうだったね、クロスのクラスはサイネリア島の白金魔導研究所に行くんだってね」
「そ、そうっすね……」
「……」

「ど、どうしたんすか？　師匠？」
　クロスは不安そうに聞くと、マーリンが厳しい顔でこう言った。
「実は、白金魔導研究所は、異能者を使った非人道的な研究をしているっていう噂を聞いたんだ」
「マジか…それが本当だったらウルトラ許せねぇな…」
「それで近い内に調査をしてみようと思っててね、折角だからちょっとキミの学修旅行の日程と合わせてみようと思ってね」
「え？」
「ボクが居れば、百人力だろ？」
「でも…あの…」
　マーリンに自身がゼットであることがバレたくないクロスは渋るが、マーリンがとある物を取り出した。
「そんなに嫌がるなら、コイントスで決めよう、1年前くらいにちょうどいいコインを見つけたんだ」
　そういうと、マーリンはコイン――――【ウルトラマンティガ】のウルトラメダルを取り出す。
「これで決め「師匠、俺は着いてきても大丈夫なんで！」急に心変わりしたね……まぁ良

いけど」

『師匠からメダルをもらって、ガンマフューチャーに変身できるようにしないと…頑張るぞ！』

クロスは気合いを入れ直した。

その様子を見たマーリンは少し考え事をする。

『この巨人は１年前に見た巨人が出した幻影にそっくりだ、それにクロスがメダルを見たときの手のひら返し…

クロスと巨人の何かしらの関係があるね…　フフッ、興味深い』

そう思うとマーリンの口角は上がっていた。

神秘の光と氷炎の共演

ふと気づくと、クロスはインナースペースとは違う別の空間に居た。
「ここは…？」
そういいながら周囲の様子を確認する
すると、突然目の前に何かしらの景色が写し出される。

何が起きたのかが分からないほどに崩壊している都市に居た。
その隣には倒れる謎の巨大な黒い影と光の巨人。
そして、それを見つめる5人とそれを眺める一体の巨人がいたが、クロスから見ると顔がぼやけて見えなかった。
『あなたは…■■■…なの？』
『……』
その中の一人である女性は巨人に話しかける。
すると巨人は立ち上がると彼女達を見る、そして上空を見つめるとこちらを眺めていた巨人と共に空へ飛び上がる。

『デュア!』
『あっ…』

「何だ…今のは…　どこかで見たことあるような…」
クロスは先ほどの巨人に既視感を覚えて、頭を抱える。
すると、突然青い光のエネルギー体がクロスの胸部から内部へ侵入する。
「ッ!?」
そのエネルギーの強さに驚愕し、苦しみながらクロスが膝をつく。
そしてそのエネルギーが肉体に収まると、クロスの胸部の中心に青色の光が浮かび、光輝く。
「これは…?」
クロスは自身に宿った力に困惑すると、また1枚の光景が投影された。
その映像にはウルトラマンゼットのオリジナルと、アルファエッジ、ベータスマッシュ、ガンマフューチャーの他に、更に3体の巨人が立っていて、写るのが終わった。
「本当に…何なんだこれ…」
そういうとクロスの意識が遠退く。
最後までクロスは、自身の髪の色が赤髪に変化し、両眼が淡く輝いていたことと、1

人の少女が彼を見ていたことに気づかなかった。
「ようやく彼の力が目覚めましたか……私の子孫をお願いしますね……【■■■】…」

「ハッ!?」
「おお、起きたのかい？　うなされていたからビックリしたよ」
「し、師匠？　俺たちとは別の手段できて、別の旅籠に居るんじゃ…　それにあの痛みは…」
「ちょっとキミの居る旅籠が気になって来たんだよ、それにしてもどうしたんだ――」
クロスが飛び起きると、そこは先ほどまで居た謎の空間ではなく、遠征学修中に泊まる【サイネリア島】の旅籠の部屋の中であった。
そして、部屋の奥から、食べ物を持ったマーリンが現れる。
深く考え込むクロスに、困惑するマーリンだったが、瞬間、凄まじい振動と咆哮が周囲を支配する。
「ッ!?」
２人が旅籠の外へ飛び出すと、そこには、シヴィルジャッジメンター【ギャラクトロン】が居た。
その目は通常時よりも赤黒く光っていた。

『今度は【デビルスプリンター】で暴走したギャラクトロンか！』
『クロス！　相手は強敵だ、気をつけて戦え！』
『押忍ッ！』
「あの怪獣は一体なんなんだ…って！　クロス!?」
クロスは物陰に隠れて、ゼットライザーのトリガーを引き、ヒーローズゲートを展開、そのまま中へ突入する。

ヒーローズゲートからインナースペースに入ったクロスは【ウルトラアクセスカード】をゼットライザーにセットする。
《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ．》
腰のメダルホルダーから、中央上に置いた【ウルトラマン】、【ウルトラマンエース】、【ウルトラマンタロウ】ウルトラメダルを取り出し、右手の上に広げる。
『真っ赤に燃える、勇気の力ッ！』
ウルトラメダルをゼットライザーのブレードのスリットにセットする。
『マン兄さん！　エース兄さん！　タロウ兄さん！』
ブレードを動かし、メダルをスキャンさせる。
《Ｕｌｔｒａｍａｎ．》《Ａｃｅ．》《Ｔａｒｏ．》

『押忍ッ！』

ブレードを展開させると、光が集まり、【ウルトラマンゼット】がクロスの背後に立つと手を広げながらこう叫ぶ。

『ご唱和くださいッ！我の名をッ！　ウルトラマンゼェェェェェットッ!!!』

『ウルトラマァァァン!!　ゼェェェェェットッ!!!』

クロスはゼットライザーを天に掲げて、トリガーを押す。

『ヘェェッ!!』

『トワァッ！』

『タァァッ！』

《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ｂｅｔａ　Ｓｍａｓｈ.》

『デェェッ！』

【ウルトラマン】、【ウルトラマンエース】、【ウルトラマンタロウ】が残光を残して飛び、その残光が中心に集まり、その中から【ウルトラマンゼット　ベータスマッシュ】が飛び出した

『ダ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛！゛！゛！゛！』

ギャラクトロンへ突貫したゼットは、チョップや肘打ちで攻撃を仕掛ける。

ギャラクトロンは後頭部から伸びる大きな鉤爪【ギャラクトロンシャフト】でゼットの首を掴む。
『デュワッ!?　デュワ!　デュワ!』
ゼットが拘束から抜けようと暴れるも、抜けず、ギャラクトロンは胸部にエネルギーを充填し始める。
『不味い!　クロス!』
『分かってる!』

クロスは腰のメダルホルダーから、左上に置いた【ウルトラマンゼロ】、【ウルトラセブン】、【ウルトラマンレオ】ウルトラメダルを取り出し、右手の上に広げる。
『宇宙拳法!　秘伝の神業ッ!』
《Ｚｅｒｏ.》《Ｓｅｖｅｎ.》《Ｌｅｏ.》
『ウルトラマァァァン!!　ゼェェェェェットッ!!!』
『デヤッ!』
『デュワッ!』

『イヤァッ！』
《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ａｌｐｈａ　Ｅｄｇｅ．》
『デュワッ！』

『「ゼスティウムメーザー！」』
アルファエッジに切り替えたゼットは額のビームランプから緑色の光線を発射し、装甲と装甲の間にある隙間にピンポイントで直撃させる。
数秒間当て続けると、当てた部分から火花が飛び散り、ギャラクトロンシャフトの鉤爪は力を失ったようにゼットの首を離す。
『「アルファチェインブレード！」』
離されたゼットは、瞬時に2本のゼットスラッガーを操り、ヌンチャクのように2つをエネルギーの帯で繋げる。
ゼットはアルファチェインブレードで装甲に攻撃するが、攻撃が通らないどころかギャラクトロンシャフトに攻撃されてしまう。
『駄目だぁ！　今の俺たちじゃあ、ギャラクトロンは撃破できねぇ！』
『あのときは、ギャラクトロンがメダルで無理やり召喚されただけで、装甲も脆くなってたし、アルファエッジのゼスティウムメーザーじゃ、時間が掛かって変身時間が切れる』

『メダル…そうだ！　クロス！　お前の師匠が持っていたティガ先輩のメダルでガンマフューチャーになるんだ！　そうすれば、どうにかなりますよクロス！』
『そうか！――――ええっと、師匠は何処だ――――』
「似てる…」
『『えっ？』』
　ゼットが周囲を見渡そうとすると、肩から声が聞こえた。
　肩を見るとそこには、いつの間にかマーリンが乗っていた。
『師匠おおおお!?』
「やあ、巨人クン。いや、クロスというべきかな？」
『そういえば師匠の近くで変身したんだよな…それやそうなるわな…』
　インナースペースのクロスがため息をつくと、マーリンがティガのメダルを取り出す。
「キミが欲しいのはこれだろ？　キミに似ている人形生物が描かれているメダルに、そのメダルを初めて見せたときのキミの態度…　間違いなくこれが目当てと私は考えた、合ってるかい？」
『…ジェッ』
　ギャラクトロンを迎撃しながら『そうだ』と首を振るゼットにニヤリと口を歪ませる

と、マーリンがゼットの肩から飛び下りると、途中でティガメダルをカラータイマーに向かって投げる。
　するとインナースペース内のクロスは飛んでくる紫の光を掴み、ティガのメダルを再入手する。
「折角渡したんだからそのメダルでできる可能性、私に見せてくれよ！」
　マーリンは地上に到達する前に【疾風脚（シュトローム）】で戦闘地帯から飛び去る。
『よし、ガンマフューチャーで……』
『待てクロス！　一度試したいウルトラフュージョンがある。　ゾフィー兄さん、メビウス兄さん、ティガ先輩でウルトラフュージョンしてくれ、炎と氷の力で行動不能にできるかもしれない』
『…押忍！』

　クロスは腰のメダルホルダーから、中央下に置いた【ウルトラマンゾフィー】、左下に置いた【ウルトラマンメビウス】、右上に置いた【ウルトラマンティガ】のウルトラメダルを取り出し、右手の上に広げる。
『炎と冷気、相対する力！』
　３枚のウルトラメダルをライザーのスリットにセットする。

『ゾフィー兄さん！　メビウス兄さん！　ティガ先輩！』
　そのままスリットのメダルをライザーに読み込ませる
《Ｚｏｆｆｙ．》《Ｍｅｂｉｕｓ．》《Ｔｉｇａ．》
『押忍！』
　ブレードを展開させると、光が集まり、【ウルトラマンゼット】がクロスの背後に立つと手を広げながらこう叫ぶ。
『ご唱和くださいッ！我の名をッ！　ウルトラマンゼェェェェェェットッ!!!』
『ウルトラマァァァン!!　ゼェェェェェットッ!!!』
　クロスは天にライザーを掲げて、トリガーを引く。
『シェアッ！』
『デアァッ！』
『ハッ！』
《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ｓｉｇｍａ　Ｂｒｅｓｔｅｒ．》
『デュワァ！』
【ゾフィー】、【ウルトラマンメビウス】、【ウルトラマンティガ】が残光を残して飛び、その残光が中心に集まり、その中から【ウルトラマンゼット　シグマブレスター】が飛び

出した

シグマブレスターに変身したゼットは、攻撃を繰り出したギャラクトロンを右腕で受け止め、胸部に冷気を発射して、凍らせる。
そして左腕の炎を纏った拳で凍った胸部を殴り付ける。
『「シグマエクスプロージョンナックル！」
すると、殴った胸部が先程の氷と拳の炎によって水蒸気爆発を引き起こして、ギャラクトロンを吹き飛ばす。
そしてゼットは両腕を水平にして上から円を描くようにエネルギーを込める。
エネルギーが最大まで溜まった瞬間、腰を低く落とした姿勢で両腕を十字にして、炎と冷気の光線を放つ。
『「ゼスティウム
レイバーストォォ!!!」』
放たれた炎と冷気の光線は、ギャラクトロンに直撃した途端、その巨体を炎と冷気が嵐のように包み込む、その装甲はギャラクトロンの纏わり付く炎と冷気によって、局所的な水蒸気爆発を起きて、装甲が傷付く。
そして冷気と炎の嵐が止むと、ギャラクトロンは機能停止していなかったが、動けな

いほど外装はボロボロになっていた。
『よし、トドメはガンマフューチャーだ！　決めろクロス！』
『押忍！』

クロスは腰のメダルホルダーから、右上に置いた【ウルトラマンティガ】、【ウルトラマンダイナ】、【ウルトラマンガイア】のウルトラメダルを取り出し、右手の上に広げる。
『変幻自在、神秘の光！』
《Ｔｉｇａ．》《Ｄｙｎａ．》《Ｇａｉａ．》
『ウルトラマン!!　ゼェェェェェットッ!!!』
『デャッ！』
『ダァッ！』
『デュアッ！』
《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ｇａｍｍａ　Ｆｕｔｕｒｅ．》
『デェア…』

『「ガンマスルー！」』
ゼットは飛び上がり、身体を小さくすると、ギャラクトロンに向かって魔法陣を展開、

魔法陣を潜り、ギャラクトロンの内部に入り込む。
そして両腕をZ型のカラータイマーの左右に当てて、左腕を上に、右腕を下に下げ、ゼスティウムエネルギーでZの形を作る。
そして右手を頭の横に、左手を前へ突き出し、ゼスティウムエネルギーの帯が作り出す。
そして、腕を十字にして光線を解き放つ。
『『ゼスティウム光線！』』
周囲を焼き払うように、全体的にゼスティウム光線を浴びせ、ギャラクトロンを爆発させた。
ギャラクトロンの爆発の直前にゼットは巨大化と共に紫の光の跡を残しながら上空へ飛び出すと、少し横に飛ぶと、急加速して、『Z』の軌跡を作り出しながら飛び去った。
「炎と冷気の姿に超能力戦士…実に興味深い」
その様子を見ていたマーリンはニヤリと笑った。

虹色の光

　クロスはギャラクトロンとの戦いが終わり、旅籠に戻ると、アリサに呼ばれてとある部屋に連れてこられた。
　そこには怪我をしているグレンとアルベルトとカスミ、そして寝ているシスティーナが居た。
「…どうかしましたか?」
「実はな…」
　カイトとアリサはグレンからクロスが寝ている時からギャラクトロンとの戦闘中に起きたことを話された。
「なるほどね…リィエルが兄と名乗る人物に唆されて、グレンを刺してティンジェルさんを拐ったと…」
「その話を聞くと一応付け入る隙はあるようだな…リィエルが信じたってことは、その”兄”について覚えてないよう…いや、【消されている】といった感じか」
「そういうことだ、協力してくれねぇか？　こいつ(アルベルト)から聞いた情報も重ねると、クロス、お前の協力が必要になるだろう」

そう頼むグレンにアルベルトやカスミが呟く。
「貴様らの情報は少々調べさせてもらった、【黒腕】と【炎の戦女神】だったな、1年前にも共闘したときに、貴様らの強さは把握している。　それに今回は【黒腕】が居なければ難易度が上がるような敵が待ち構えているらしい、ならば共闘もあり得るだろう」
「お願い、私の友達を助けて……」
少し考えてたカイトとアリサは、答えた。
「　分かった、協力するよ、それに確かめたいこともあるしな」
「折角仲良くなったんですもの、私も協力するわ」
その答えにグレンは口角を歪めて立ち上がる。
「よし！　ルミアを助けてリィエルにお尻ペンペンだぁ！」

敵の潜伏先である白金魔導研究所へ隠し通路から入り込んだ5人は、魔導研究所で作られたとされるキメラ獣と戦っていた。
「オラッ！」
「《雷鳴》――――――ふッ！」
前衛のグレンとカスミが拳と雷鳴を纏う刀でキメラ獣を吹き飛ばして攻撃する。
そして2人が後ろへ飛ぶと――――

「《雷槍よ》」
「《炎槍》ッ！」
後衛のアルベルトとアリサが【ライトニング・ピアス】と【ブレイズ・バースト】の改変魔術の雨を撃ち込み、前方に居たキメラ獣を倒していく。
そして呪文の雨が止み、グレンとカスミが攻撃を仕掛けようとすると――
「お前ら、下がれ！」
クロスの声が聞こえてもう一度後ろへ飛ぶ。
《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ．》
《Ｃｏｓｍｏｓ．》
《Ｎｅｘｕｓ．》
《Ｍｅｂｉｕｓ．》
『「ライトニングジェネレートッ！」』
２人が後ろへ飛んだのを確認するとクロスはゼットライザーを掲げる。
ゼットライザーから放たれる光が空中で雷雲を発生させる、そこに赤、青、緑の光線が一点に集中すると、虹色の電撃光線がキメラ獣の軍団に降り注ぐ。
『『『『『■■■■――――ッ!!??』』』』』
目の前に居たキメラ獣の軍団は跡形も無く全て消し飛んだ。

「さすがだな…クロス」
「すごい…これが【黒腕】の力……」
グレンやカスミが驚愕する。
「余所見している暇はないッ！」
クロスは魔脚を使い、突然現れた体長１０メトラほどの宝石の大亀に突撃し、ゼットライザーで切り裂こうとする。　だが――
ガギン！　とゼットライザーの刃が弾かれる。
「!?　こいつ、堅いッ!?　　ならッ！《我が肉体よ・業火を纏いて・赤になれ》――ッ!!」
ならばと、クロスは【フィジカル・ブースト】を発動しながら、全身に爆炎を纏わせ、突撃する。
「【インフェルノ・ダイナマイト】オオオ!!」
そのまま炎を纏った身体を宝石大亀に叩きつける。
だが、爆炎は大亀には通じず、爆炎が弾ける。
大亀が立ち上がり、クロスにその豪腕を叩きつける。
「クロス!?」
「兄さん!?」

グレンとアリサが叫ぶ。　だがその声も虚しく、大亀の豪腕が叩きつけられる。
だが――――
《Ｊａｃｋ．》
《Ｚｏｆｆｙ．》
《Ｆａｔｈｅｒ　Ｏｆ　Ｕｌｔｒａ．》
「片手【黒い蛇群（ブラックマンバ）】！」
大亀の豪腕が黄金の竜巻によって、浮かさせ、その間から黄金の竜巻が飛び出し、黄金の竜巻で浮いた大亀の甲羅に向かって、赤黒い拳が何匹も突撃する。
そして黄金の竜巻が弾け、中から巨大な光輪が飛び出す。
「『Ｍ７８（ナナハチ）流　竜巻閃光斬――――ッ!!!!』」
巨大光輪は大亀の宝石の甲羅を正面から切り破ろうと回転を強める。
大亀は光輪を止めようと甲羅から雷を出すが遅く、光輪は甲羅の一部を破壊し、光となって消滅した。
弾けた黄金の竜巻の中から出てきたクロスが地面に降り立ち、そのクロスを稲妻で倒そうと、大亀が甲羅で帯電させるが――――
「ぶっ飛べ、有象無象」
クロスの攻撃中に唱えられたグレンの黒魔改【イクスティンクション・レイ】の光の

衝撃波が稲妻ごと大亀を飲み込み、その存在を消滅させる。

大亀を倒した後、5人は一度、3組に別れて行動することになった。
そしてクロスは不意に開けた空間に出た。
「ここは…　なんだ？」
薄暗い大広間に液体に満たされたガラス円筒が魔導装置にコードに繋がれ、無数に並んでいる。
何気なくクロスはガラス円筒の中を覗き込む。
「これは…ッ!?」
そこにあったのは人間の脳髄だった。
それを理解した瞬間、クロスは全ての円筒を覗き込む。
人間の脳髄が、延々と標本のように並んでいる――――
――否、実際にこれは標本なのだろう。
するとカイトは円筒につけられたラベルの文字を読む。
「【感応増幅者】……まさかッ!?　ゼット！　これはッ!?」
『あぁ、全て異能持ちの人間の物だろう、クロスのお師匠様のいう通りこの研究所は異能者を使った非人道的な研究をしているのだろう　…ウルトラ許せねぇな』

「…あれはッ!?」
カイトは一番奥にある、全身を無数のチューブで繋がれて無理やり生かされている手足が切除されている少女が居たことに気付き、駆け寄る。
「……」
少女は意識があったようで、クロスに気付き、身じろぎする。
虚ろな目を浮かべながら、少女は弱々しく口を動かす。
『【コ・ロ・シ・テ】……【殺して】……か、殺すしかないか…』
覚悟を決めたクロスは額に右手を当てて、エネルギーを溜める。
そしてエネルギーが溜まりきった瞬間、手を前に突き出し、手から青い光を放つ。
「【セルチェンジビーム】……」
すると少女の体は光となって消えていき始めた。
どんどん安らかな顔になっていく少女は最後に【ありがとう】と口を動かして、消えていった。
「重いッ……」
早く見つけてあげれば良かったと後悔するクロスは少女が居た場所にあった何かを拾う。
それはエメラルド色に輝くかなり小さい槍だった。

『これは…なんだろうかこれ？』
　使い方に悩んでいると、ゼットが声を掛ける
『…クロス、誰か来るぞ』
『何ッ!?』
　クロスが振り向くと、場違いで、筋違いな声が響く。
「おのれぇッ！　今、貴様らが壊したサンプルがいかに魔術的に貴重なものか、それすら理解できんのか!?　この愚鈍な駄犬共ッ！　絶対に許さんぞッ！」
「なぁ…お前……お前が切り刻んで標本にした人達のこと…どう思ってるんだ？　罪の意識ぐらいあるんだろうな」
「はぁ？　罪だと？　何を戯けたことを」
　クロスの問いかけに馬鹿を見るような眼で、男――――バークスがクロスを見る。
「偉大なる魔術師の私のために身を捧げることができたのだぞ？　寧ろありがたく思って欲しいくらいだ。　大体、どいつもこいつも全く役に立たん……だが！　たまたま、少しは役に立ちそうな実験材料が見つかったと思えば、たった今、貴様が台無しにしてくれた……いい加減にしろッ！　魔術の崇高さを欠片も理解できぬ愚者共が……ッ！　地獄に堕ちろッ！」
「……かわいそうな人だ」

「今、私のことをなんと言ったのだ!?」
クロスはバークスのことを養豚場の豚を見る眼で見つめる。
その言葉に激昂したバークスにクロスはこう言う。
「【かわいそうな人だ】って言ったんだよ、異能者のことを人間では無いと思っている人は何度か見たことあるが、てめぇみたいに【道具】だと思っているやつは始めてみたよ。
――――――いや、呼び方を変えよう……てめぇは……
【そんな実験道具にすら慣れないゴミカス】だ、さっさと失せろ」
その瞬間、カイトの髪色は赤髪に変化し、両眼から稲妻が迸る。
そしてカイトの胸部の中心に青い光が浮かぶ。
「帝国学院の生徒ごときがそんなことを私に吐き捨てるとはな……良いだろう、貴様は偉大なる魔術師である私が殺してやろう!」
そういうとバークスは注射を取り出し、それを自身に刺す。
「気になるか?　ふっ、これはな……魔術を破壊にしか使えぬ、下らぬ犬に過ぎん貴様には到底想像もつかぬ神秘の産物よ」
するとバークスの身体が肥大化していく。
「これはッ……!」

『多分、さっきの人達とは他の人の異能を奪って使ったんだ！　クロス！　こいつの行動はウルトラ許せねぇ、俺たちで倒すぞ！』

「押オォォ忍ッ!!」

クロスはゼットライザーを構える。

「ふはははは！　お前にこれの凄さがわかるか!?　今、この私に何が起こっているか理解出来るか？　この発見を魔術学会で報告すれば――――」

「させねぇよ」

クロスは魔連脚で、すれ違い様にバークスの肉体を何度も切り付けながら、歌うように次々と魔術を唱えて吹き飛ばす。

「効かん、効かんなぁ…」

壁にぶつかったバークスの身体についた傷口なめきめきと音を立てて、塞がっていく。

「《雷鳴武装》――――《猿王群鴉砲（コングオルガン）》――ッ!!」

クロスは簡易詠唱で唱え、両手の【猿王銃（コングガン）】に稲妻を纏わせて、目にも留まらぬ速さでバークスに叩き込む。

巨大な拳の嵐と纏う雷撃が、バークスの両腕を灰にしながら、体をミンチにしていくが――――

「はて……？　何かしたかの？」
信じられない速度で骨が、肉が成長し、再生していく。
そして、バークスが呪文を唱えずに、ぬんと気合いを込めると、バークスの右腕が激しい勢いで燃え上がり始めた。
「発火能力の異能かッ！《光輝く七つの障壁よ》ッ！」
クロスは七枚の障壁を張り、バークスの業火を耐え抜く。
「ほう、耐えたか…　だが、こういうこともできるぞ？」
そういうとバークスは手をかざす。
すると、クロスの周囲を燃え盛っていた炎が消え――――
「ッ!?」
クロスが魔脚で飛ぶのと同時に、ガラスが砕けるような音を立てて、一瞬で氷点下を極限まで振りきっていた。
先ほどまでクロスが居た空間のみが氷結地獄になり、他の場所は、煉獄のように燃え盛る。
「はっはっはっ！　見ろッ！　これが私の研究成果ッ！　異能者の異能を抽出し、己の能力として意図的に引き起こす魔薬（ドラッグ）の合成に成功したのだよッ！
しょせん、異能なぞこんなものよ！　異能ごとき、真の魔術師にとっては使われる道

具に過ぎん！　これが魔術師の真の力だっ！」
興奮の絶頂に居るバークスの笑い声が響く中、天井に貼り付いたクロスは思案していた。
「ギリギリ回避が間に合ったのはいいが、これ（冷凍能力）の対処はどうすればいいんだ……」
すると、突然クロスのコートのポケットが輝く。
「これは……」
クロスは自身のコートのポケットを探る。
ポケットの中から、２つの物が出てくる。
１つは先ほどの少女から出てきたエメラルド色の槍、もう１つは宝石が埋め込まれた指輪だった。
「あの少女から出てきたやつと、あの時の指輪か…　付ければ何か起きるのか？」
クロスは指輪を付ける。　すると突然、ゼットのとは違うヒーローズゲートが展開、クロスを強制的に引きずり込む

『ん？』
クロスが眼を開けると、目の前に青髪に白いメッシュの少女が居た。
『貴方は…？』

『……』

突然少女がクロスに手をかざし、青黒い魔力と虹色の魔力をクロスに送る。

するとクロスの胸部の青い光と連動するように、右手のエメラルド色に輝く小さな槍が発光し、自身が持てるほどに巨大化した。

『どういうことだ…?』

クロスが驚愕していると、その少女は、光となって、クロスの身体に入り込む。

すると、クロスの脳にこの剣の使い方が流れ込んでいく。

クロスは驚くが、何故かすぐに落ち着く。

『なんだろうか…急に力が戻った…っていう感じだ』

そういうと、この空間が崩れて、元居た場所に戻った。

するとゼットの声が聞こえる。

『クロス!　大丈夫か!?　急にお前とのリンクが繋がらなくなったからビックリしたぜ!?』

「すまん、ちょっとな……　とりあえず、突破口は見えた!　行くぜ!」

そういうと、クロスは、持っていたエメラルド色の槍のトリガーを1回引く。

すると、槍の先に雷のようなエネルギーが纏わりつく。

「【ゼットライトニングバーン】ッ!」

クロスはそういうと、氷結地獄へ飛び降り、槍を地面に突き付ける。
その瞬間、氷結地獄や煉獄を吹き飛ばす、青い稲妻が周囲を照らす。

「今は使える物は少ないが、研究が進めば全ての異能を物とし、私はすぐにでも第三団【天位（ヘヴンス・オーダー）】にのし上がってくれよう！　この力がさえあ――――」
バークスがと突然、青い稲妻が氷結地獄と煉獄を吹き飛ばし、周囲を制する。
「な、なんなのだ！　こ、これはァ！」
稲妻が収まると、その中心には不思議な形の槍を持ったクロスの姿があった。
「き、貴様ッ！　あの氷結地獄で生きていただと!?　有り得んッ！」
「【不可能を可能にする】、それが魔術だろ？　異能に溺れてそんなことすら忘れたのか？」
「黙れッ！　貴様ごときが、魔術を語るなッ！」
そういうとバークスは今度は絶対零度の冷気をクロスに向かって放出した。
「いくら障壁があろうと、いくら高い炎熱系魔術があろうと、この冷気は止められんぞッ！」
「そうだな、こんな冷気を止められる炎熱系魔術を俺は持っていない――――――――
ただ、跳ね返すことしかできない」

クロスはトリガーを2度引き、構える。
すると、刀身にエメラルド色の暴風が宿り始める。
そして絶対零度の冷気がクロスに到達する瞬間、クロスは槍を振るう。
「【ゼットハリケーンアタッカー】ッ!!」
振るった槍から、凄まじい暴風が吹き荒れ、絶対零度の冷気を跳ね返し、バークスに向かって突撃する。
「なにぃ!?」
バークスは自身が起こした冷気よりも速い冷気をギリギリで回避するが、周囲の冷気で腕が凍ってしまう。
「クソォ!」
バークスはすぐに発火能力で凍った腕を解凍するが、それは相手に隙を晒すということで――――
「今だ!」
クロスはトリガーを3回引く
すると刀身に青い稲妻とエメラルド色の暴風が混ざる。
「【ゼットホークスマッシャー】ッ!!!」
クロスが槍を構えて、バークスに突撃する。

すると槍のエネルギーの形が鳥のような形に変わり、バークスに接近し、Zの形に切り付ける。
「グボォッ!!!?」
切られたバークスは吐血したが、すぐに笑みを浮かべる。
「ふふふ…だが、瞬時に再生する。　再生したら殺してやろう」
そして、肉がめきめきと動き――――何故か再生ができなかった
「何ッ!?　何故だッ!?」
バークスは傷口を見ると、そこには青い稲妻が、傷口に纏わりつき、再生ができていないようだった。
「なんだこれは!」
「もう遅い!」
クロスは槍に構えると、そのまま急加速して突き刺した
「ば、バカなァァァァァァ――――ッ!!!」
エメラルド色の槍の突撃を受けたバークスは自身の魔力によって爆発を起こし、消滅した。
「あとは、地獄で裁かれろ」
そう言い残すとクロスは、奥へと走り出す。

絆（友情）と絆（ユナイト）

「チェストオオオオッ!!!!!」

クロスは新しく手に入れたエメラルド色の剣【ウルトラスパークランス】でキメラ獣を切り裂きながら、両足で【魔脚】を連続起動して突撃する。

先ほどの部屋よりも広い部屋へ出るとクロスは、やけに布面積が少ない服を来たリィエルと同じ見た目をした少女達に襲われているリィエルを守るグレンとカスミの姿を

そして鎖で縛られ、服を破られたルミアと、奥にあった破壊された三本の水晶を目にした。

『クロス！　【Ｐｒｏｊｅｃｔ：Ｒｅｖｉｖｅ　Ｌｉｆｅ】が成功しちゃってるでございますよ!?』

『やっぱりティンジェルさんの異能って感応増幅にしてはおかしい…　とりあえず迎撃だ』

クロスはスパークランスを右手で持ったまま、左手を頭に添えて呪文を唱える。

「《ゼットスラッガー》ッ！」

クロスが左手を振り下ろすと４本のゼットスラッガーを繰り出す。

４本のスラッガーが、連携をしているように、３人のリィエル【リィエル・レプリカ】達の大剣を迎撃していく。
「ウルトラノック戦法…ってな。　大丈夫か？　先生とカスミ、そしてリィエル？」
「あぁ、助かったぜ」
「ありがとう、クロス」
グレンとカスミが感謝を告げるなか、リィエルがぼそりと問う。
「どうして……グレンもカスミも、クロスもわたしなんか守るの？　わたしには……何もない……　わたしは作り物で……人間ですらないのに……」
クロスは、【ウルトラマンギンガ】のメダルを取り出したクリムゾンセイバーのスリットに入れ、トリガーを引き、特殊な魔術を籠めた水晶を剣先にかざす。
セイバーの剣先に翳した水晶はセイバーが放つ青い光と共鳴し崩壊を始めると、青い魔方陣を展開する。　そして魔方陣が高速回転し、２つの青い光の渦がクロスの形に展開される。
そして飛び上がるとクロスは着地と同時に地面にセイバーの剣先を叩きつける。
「【ギンガサンダーチェイン】ッ！」
するとリィエル達を守るように、周囲の地面から土煙が立つと、青い稲妻が迸り、リィエル・レプリカ達を拘束する。

「以前、お前みたいな作られた人間では無い人にあったことがある」
「…えっ？」
「その人はこう言ってたよ、【この身体が作られた物でも、この魂は僕の物だ】って」
「ッ!?」
「それに彼はこう言っていた、【僕の運命は、僕が決める】って――――――この状況から察するに、お前の兄と名乗ってたアイツに【要らない】と言われたんだな？」
そういうとクロスは【ギンガサンダーチェイン】に何故か巻き込まれている青髪の男を睨み付ける。
最も、もがき苦しんでいる男には届いていないようだが、カイトは話を続ける
「まだアイツが要らないと言っただけだろ？　彼――――【ウルトラマンジード】のようにお前の運命はお前が変えろ！　絶望するな！　お前の希望は兄だけじゃねぇだろ！」
「うっ……ぁ……あぁああ、あ……」
クロスの声にリィエルの目尻から涙が溢れ出す。
その心には、ルミアやシスティーナやアリサ達の姿が浮かぶ。
『またクラスのみんなと一緒に遊びたい――――』
「あ……」
今、リィエルは理解した、魔術学院にやってきて以来浮かぶ温かい不思議な感じの正

体が。

『わたしは――あの三人と一緒にいることが――楽しくて、嬉しかったんだ――』

『クラスの賑やかな空気が――くすぐったくて、心地よかったんだ――』

その瞬間、青い光と赤黒い稲妻を纏った紅い銃剣が目の前に突き刺さる。

その剣には1枚のメダルが装填されていた。

「それは俺の銃剣だ、それにはウルトラマンジードの力が籠められている。　そいつを使ってお前の妹達を眠らせてやれ！」

カイトにそう言われた後のリィエルの行動は早かった。

即座にその銃剣を手に取る。

すると、赤黒い稲妻が身体に纏わりつき、自身の青い髪と眼が発光し始め、それと同時にリィエルの頭の中に1人の悪魔のような鋭く青い眼をした赤と黒と銀色の巨人が光線を発射するビジョンが映る。

リィエルは涙を溢しながら、暴風のように駆ける。

「――うぁあああああああああ――――ッ!!!」

そしてリィエルは三人のリィエル・レプリカを巻き込むように銃剣を振り、頭に浮かんだ技名叫ぶ。

その最中、クロス達はリィエルの後ろにリィエルのビジョンに映った巨人【ウルトラ

マンジード】の幻影を目撃する。
『レッキングバーストォォォォッ!!!!』
赤黒い稲妻を纏った青い光の斬撃は3人のレプリカ達に直撃すると、レプリカ達を悲鳴も上げさせずに消滅させた。
人の悪意によって生まれたその儚い命の幕を下ろした。
その斬撃はレプリカ達を消滅させた後も止まらずに、拘束されたルミアの鎖を絶ち切ると同時に、天へ昇っていく。
「ば、ば、馬鹿なぁ――グボォ!?」
「《音速ノ大蛇砲（ジェット・カルヴァリン）》……」
あり得ないと叫ぼうとした男は、凄まじいスピードで近付いたにクロスの魔術の大蛇に吹き飛ばされ、壁に激突すると気絶する。
ルミアはカスミとリィエルが介抱し、吹っ飛ばされた男はグレンと今きたアリサとアルベルトが拘束した。
そして白金魔導研究所の入り口付近に着いた時にクロスは声を上げる。
「まぁ、これで事件は終結か――」
『クロスさん！　聞こえますか!?』
『!?　――聞こえますけど、ちょっと待ってください！』

「すいません！　ちょっと先に出ます！」
「お、おいクロス!?」
そういうとクロスは走る。
そして白金魔導研究所の入り口に辿り着くと通信相手に話しかける。
『突然連絡をしてきて、一体何が起こったんですか!?　【リクさん】!?』
通信相手は、【ウルトラマンジード】である【朝倉リク】だった。
『実は……　クロスさんがいる星に、宇宙警備隊がマークしていた凶悪な怪獣【ファイルザード】が迫っています！』
『何ッ!?』
『ええ、なので僕達はファイルザードを追ってこの宇宙にやってきたんだけど…遅くなる可能性があります。　だから君には、相手の足止めか撃破をお願いしたいんです』
『それは良いんですが…何処に潜伏しているのやら……』
その瞬間、夜が明け、朝日が顔を出す空に赤い光が浮かび、その中から、２本の角を生やした怪獣が飛び出す。
現れた怪獣【ファイルザード】が咆哮を上げる。
『リクさん！　ファイルザードが現れました！　足止めを始めますッ！』
『なんだってッ!?　なら、対処をお願いします！　あと――――』

『クロス！　ウルトラフュージョンだ！』
「押忍ッ！」
リクが何かを言おうとしていたが、ゼットに遮られて、通信が切断されてしまう。
クロスはファイルザードに向かって走りながら、ゼットライザーのトリガーを押す。
すると【ヒーローズゲート】が目の前に展開され、クロスは直ぐにゲートに飛び込む。

ヒーローズゲートからインナースペースに入ったクロスは【ウルトラアクセスカード】をゼットライザーにセットする。
《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ．》
腰のメダルホルダーから、左上に置いた【ウルトラマンゼロ】、【ウルトラセブン】、【ウルトラマンレオ】ウルトラメダルを取り出し、右手の上に広げる。
『宇宙拳法！　秘伝の神業ッ！』
ウルトラメダルをゼットライザーのブレードのスリットにセットする。
『ゼロ師匠！　セブン師匠！　レオ師匠！』
ブレードを動かし、メダルをスキャンさせる。
《Ｚｅｒｏ．》《Ｓｅｖｅｎ．》《Ｌｅｏ．》
『押忍ッ！』

ブレードを展開させると、光が集まり、【ウルトラマンゼット】がクロスの背後に立つと手を広げながらこう叫ぶ。

『ご唱和くださいッ！我の名をッ！　ウルトラマンゼェェェェェットッ!!!』

『ウルトラマァァァン!!　ゼェェェェェットッ!!!』

クロスはゼットライザーを天に掲げて、トリガーを押す。

『デヤッ！』

『デュワッ！』

『イヤァッ！』

《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ａｌｐｈａ　Ｅｄｇｅ．》

『デュワッ！』

【ウルトラマンゼロ】、【ウルトラセブン】、【ウルトラマンレオ】が残光を残して飛び、その残光が中心に集まり、その中から【ウルトラマンゼット　アルファエッジ】が飛び出した

ファイルザードの数百メトラ先にウルトラマンゼットが着地する。

『ジェッ……』

『相手は宇宙警備隊の包囲網を突破した強者、周辺に被害が及ぶ前に倒すぞ』

『押忍ッ!!!!』

『■■■■■■――――ッ!!!』

ファイルザードが角を光らせ、炎を放ちながらゼットに向かって突撃をする。

『ジェッ!』

ゼットもファイルザードへ突撃し、宇宙拳法を駆使してダメージを与える。

だが、ファイルザードの火炎放射によってダメージを受ける。

『『ゼットスラッガーッ!』』

ゼットは直ぐに体勢を立て直し、ゼットスラッガーを放ち、ファイルザードに直撃し、煙が立ち込める。　だが――

『■■■■■――ッ!』

ファイルザードはもう1本の角と、1対の翼を生やした姿に変化する。

『姿が変わったッ!?』

驚くゼットに向かってファイルザードはゼットに口と両手から炎を浴びせる。

そして怯んだところに、強力な火球を繰り出す。

『ジェエエアアアアッ!!?』

その一撃でゼットのカラータイマーは赤く点滅する。

『なんていう威力なんだ……』

『クロス、ガンマフューチャーにウルトラフュージョン――――って危ないッ!?』
『ッ!?』
ファイルザードの炎を纏った突撃を間一髪で躱したゼットは、ウルトラフュージョンができなかった。
ゼットはアルファエッジの状態でカウンターなどをして攻撃をしたが、防戦一方で自身のエネルギーを消耗していく。
ゼットの残りエネルギーが少ししかなくなってしまい、疲弊しているところにファイルザードはまた炎を纏い突撃しようとする。
『ウルトラヤバイぞ、クロス!?』
『万事休すか……こうなったらゼスティウム光線で――――』
その時だった、街からXの形の光が現れ、その中から1つの光が飛び出す。
『イィーッ…サァァッ!!!』
《エックス、ユナイテッド!》
飛び出した黄色の光が、青いスパークを放ちながらファイルザードに直撃し、地面に下り立つと、光が弾けて、土煙が立つ。
土煙が晴れるとそこには、赤と銀を基調としたカラータイマーがXの形のウルトラマン【ウルトラマンエックス】が現れた。

『エックス先輩ッ!?』
『どうしてここに…？』
『別の任務でこの星に来ていてね、そしたら、君たちがあの怪獣と戦っていたというわけさ』
『ジードから話は聞いてる、ファイルザードは強敵だ、協力して倒そう！』
『『はいッ！』』
クロスとゼットはエックスと彼と融合（ユナイト）している青年【大空大地】と会話を交わす。
ファイルザードはその間に体勢を立て直し、火球を放つが、２人に容易く回避されてしまう。
『ゼット、あれを試して見るぞ！』
『分かったぜ、クロス！』
《サイバーゴモラ、ロードします》
《サイバーゴモラアーマー、アクティブ！》
ゼットは構えを変え、エックスは【サイバーゴモラアーマー】を展開し、武装する。
エックスがファイルザードに接近し、アーマーのクローでファイルザードの表皮を切り裂く。
エックスは青いスパークを上げ、クローにエネルギーを纏わせるとファイルザードに

突撃する。
『うぉおおおおッ!!!』
　エックスはクローに溜まったエネルギーを一気に放出させて、ファイルザードを打ち上げる。
『イィーッサァッ!!!』
『ゴモラ振動波ッ！』
『■■■■■――――ッ!!?』
　エックスのゴモラ振動波を受けて、ファイルザードを上空に打ち上がるのを見てゼットが飛び上がる。
　クロスはゼットのインナースペース内で魔術を唱える。
　するとゼットの腕が巨大な赤黒い拳になる。
『『巨猿王銃（ギガントコングガン）ッッッ!!!』』
　ゼットはその巨大な拳を、ファイルザードに向かって叩きつける
『ゼァアア――――ッ!!」
『■■■■■――――ッ!!!?』
巨猿王銃（ギガントコングガン）が直撃したファイルザードは起き上がるのがやっとの状態まで疲労していた。

ゼットは両腕をZ型のカラータイマーの左右に当てて、左腕を上に、右腕を下に下げ、ゼスティウムエネルギーでZの形を作る。
そして右手を頭の横に、左手を前へ突き出し、ゼスティウムエネルギーを貯める。
その横でエックスが着地すると同時にカラータイマーの色は青から黄色に変わる。
『よし、行くぞ！』
『あぁ！――――――
ザナディウム光線ッ!!!!!!』
エックスはカラータイマーに右手を添えて、右上に上げる。
両腕を左へ振りかぶりながら左脚で踏ん張る。　その際に足の裏から周囲の地面や空中にエネルギーの余波が放射される。
エネルギーが溜まった瞬間、ゼットは腕を十字にして、エックスは腕をクロスさせて光線を解き放つ。
『イィーッ――――――サァァァァッ!!!』
『『ゼスティウム光線ッ!!!!!!』』
２条の光線がファイルザードに直撃し、ファイルザードは爆散する。
だが、瞬時にその爆散した身体は光となり、小さな光として、爆心地に落ちる。
そして２体のウルトラマンは上空を見上げると――――

『シュワッチ！』

空へ飛んでいく。

その後、爆心地を訪れたクロスと大地は、ファイルザードの【スパークドールズ】を回収し、その場を立ち去った。

追憶のしずく

現代編①：新アイテムと流れ込む未来

「――――つまり、この星にはまだ宇宙規模の危機が迫っていると？」

「あぁ、クロスさん、貴方はこの世界や僕達ウルトラマンとは異なる別の力を感じたことがありますか？」

「……あるかと言われればある」

『それは本当か!?』

「詳しく教えてくれ」

クロス達はリクと合流して、リクの住む宇宙船、【ネオ・プリタニア号】にて会議をしていた。

クロスが異なる別の力を感じたというのはもちろん【ルミアの異能】のことだ。

クロスは感応増幅の能力者にあったことがあり、一度体験している。

ルミアの異能はこれの更に上を行く効果があり、尚且つ、術式構築者しか成功させることが不可能な【Ｐｒｏｊｅｃｔ：Ｒｅｖｉｖｅ　Ｌｉｆｅ】をルミアの異能によって成功させていることが、クロスに取っては引っ掛かっていた。

「――――【感応増幅】という名前以上の力を発揮しているのか、それは引っ掛かるな」
『完全に私達のように別の宇宙から来た力なのは間違いなさそうだな』
「クロスくんはこれからどうするんだい？」
「もちろん、いつも通り接していくよ、変わったことがあったら連絡をしたいけど……ゼットライザーの通信が光の国に届かないんだよな……」
　クロスが悩んでいると、思い出したかのように、リクがクロスに声を掛ける。
「そういえばクロスさんにゼット、タロウ教官から君たちに贈り物を預かっていたんだっけ、ちょっと待ってね……」
「？」
「あったあった！　はい、どうぞ！」
　そういうと、リクは籠手型のアイテムをクロスに渡す。
「これは……タイガ先輩達の【タイガスパーク】？　」
「それは変身機能の他に、ウルトラマンヒカリの改造で別宇宙からの通信機能やウルトラメダルを使える機能を搭載した改良型です」
「なるほど……」
　そういうと、クロスはタイガスパークを右腕に着ける。
　すると、左腰に、ゼットを模したアクセサリーが付く。

それと同時に脳内に様々な場面が再生される。

「闇の力……お借りしますッ!!」
「【天より降りたる光の槍】…？」
「久しぶりにお前さんを強くしてやる」
「■を飲み込めッ！■■の嵐ッ!!」
『ジュゥワッ!!』
『俺様を手にして―■■■■』
様々な映像が映し出されるなか、最後に1つの映像が目に飛び込む
『ゼェア…！』
燃え盛る大地に立つ8体のウルトラマン。
その中に居る全身の一部部位が緑色に発光しているタイガスパークを付けたウルトラマンが謎の黒い巨大生物に持っている銃剣でビームを発射する――――

「うぉっ!?」
『ど、どうしたんだ？　クロス？』
「なんか……見たことのない記憶が流れてきたんだが……」

「記憶？」
　リクがクロスの発言を聞いて困惑の表情を浮かべる。
「それはそうとして……これで本当のゼットで戦えるんだな……今まで人間大の戦闘か、ウルトラフュージョンだったし」
『緒先輩方の力を借りずとも怪獣に勝ってやりましょうクロス！』
『押忍ッ!!』

　現代編②…ゼットとエックスの共闘、グレン達ｓｉｄｅ
『ジェェェアァァァッ!!?』
「ゼットッ!?」
「そんな……あのウルトラマンが……」
「あんなのに勝てる気がしないわ……」
「それに関しては同感だ、さっさと退避するぞ」
　ゼットがファイルザードにやられていく姿を見て驚愕こ表情を浮かべるグレン達だが、たった1人リィエルはただ、一点を見つめていた。
「リィエル？　どこを見てるんだ？」
「あの巨人は勝つ　……よくわかんないけど、わたしにはわかる」

「それはどういうこ――――」
グレンがリィエルの言葉に困惑し、声をかけようとすると――――
『イィーッ…サァァッ!!!!』
突然街中からXの形の光が浮かび、黄色い光が青いスパークを放ちながら飛び出す。
そしてその光がファイルザードに直撃し、地面に下り立つと、光が弾けて、土煙が立つ。
土煙が晴れるとそこには、赤と銀を基調としたカラータイマーがXの形のウルトラマン【ウルトラマンエックス】が現れた。
「ん……　なんか新しいでっかいの出た」
「新しい……ウルトラマン……?」
「Xのウルトラマン……【ウルトラマンエックス】……?」
「少しの時間に2体のウルトラマンを見れるなんて……」
「先ほどの光の巨人とは違ったオーラが感じられる……強いな、あの巨人」
彼らが驚いているのも束の間、ゼットとエックスはお互いに強力な技を打ち込み、それぞれの光線技でファイルザードを撃破し、飛び去っていく。
すると、リィエルの前に2枚のメダルが落ちてきた。
「さっきの爆発から飛んで来た物?」

リィエルはそのメダルを拾い上げ、絵柄を確認する。
「……なにこれ？」
それは角の生えた黒と黄色の何かが描かれたメダルと、双頭の鳥のような怪獣が描かれたメダルだった。
「とりあえずクロスに渡そう　……よくわからないけど同じような物持ってたし」
その後、リィエルからメダルを渡されたクロスはメダルの絵柄に驚愕の表情を浮かべると、何か納得した表情を浮かべ、リィエルの頭を撫でて、メダルを貰い受けた。
心なしか嬉しそうな顔をして去るリィエルの尻目に、クロスはその２つのメダルを見て、呟く。
「宇宙恐竜【ゼットン】と双頭怪獣【パンドン】のメダルか……やけに聞いてた話とファイルザードの炎の温度が高すぎると思ったらそういうことか……」
『今回のファイルザード、何かがおかしかった、いくら凶暴な怪獣だからといって、本来のファイルザードは宇宙警備隊の包囲網を突破できるほどの火は放てない筈だしな……』
クロスはファイルザードの違和感の原因が分かったことをリク達にタイガスパークの通信で話してから、自身が泊まっている旅籠の屋上に登り、ゼットンとパンドン、そしてもう一枚の怪獣メダルを取り出す。

「【ゼットン】【パンドン】【マガオロチ】……まさか俺がこの3枚のメダルを揃える時が来るとはな……」
　クロスの脳裏に1人の男の姿が浮かぶ。
「それにあの時の記憶は……そういうことね。　でもゼットのアクセスカードで怪獣に変身できるかどうか……」
　そう言うとクロスは3枚のメダルを懐にしまうと、屋上から飛び降りる。

第４章―結婚騒動と正義、変えるぜ！　運命！―
システィーナ結婚騒動―セカンド・ジャグリング―

とある日の昼下がり、クロスとグレンは町外れの路地に居た。
「さぁ……やるか」
何かをクロスと話したグレンは突然何処かへ走る。
「……あぁ、頼んだぞ」
そういうとクロスは色違いのウルトラゼットライザー【ダークゼットライザー】を使ってフェイクヒーローズゲートを開き、中へ入る

クロスはダークゼットライザーにアクセスカードをセットする。
《Ｇｅｎｅｓｉｓ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ．》
懐から三枚の怪獣メダルを取り出し、ブレードのスリットにセットする。
『ゼットンさん、パンドンさん、マガオロチ』
ブレードをスライドさせてメダルを読み込ませる。
《Ｚｅｔｔｏｎ．》《Ｐａｎｄｏｎ．》《Ｍａｇａ―Ｏｒｏｃｈｉ．》

後ろに三枚のメダルの幻影が浮かぶ中、ダークゼットライザーを顔の横に構え、クロスは呟く。

『お待たせしました、闇の力……お借りします！』

そして上へ突きだし、トリガーを引く

《Ｚｅｐｐａｎｄｏｎ．》

ダークゼットライザーから光が飛び出すと、クロスの身体が光に包まれ、光でできた魔人へと変貌すると、三枚のメダルの幻影がクロスの体内に入ると巨大化。

合体魔王獣【ゼッパンドン】へと変貌してインナースペース外に飛び出す。

『しっかし……本当に面倒なことになったなぁ……』

《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ．》《Ｒｉｋｕ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ》

『宇宙拳法！　秘伝の神業ッ！』

『ライブ！　ユナイト！アップ！』

『ゼロ師匠！』《Ｚｅｒｏ．》

『ウルトラマンギンガ』《Ｇｉｎｇａ．》

『セブン師匠！』《Ｓｅｖｅｎ．》

『ウルトラマンエックス！』《Ｘ．》
『レオ師匠！』《Ｌｅｏ．》
『ウルトラマンオーブ！』《Ｏｒｂ．》

『集うぜ！　綺羅星！　ハァァァァ……ハッ！』
『ゼェェェェェットッ!!!!』
『ジィィィィ……!!!!』
『デヤッ！』
『ショォワ！』
『ジュワッ！』
『イイッ――サァァッ！』
『イヤァァッ！』
『ジュアッ！』

《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ａｌｐｈａ　Ｅｄｇｅ．》
《Ｕｌｔｒａｍａｎ　ＧＥＥＤＧａｌａｘｙＲｉｓｉｎｇ》
『デュワッ！』

『ハッ！』

クロスがゼッパンドンに変身する数日前、ゼットとジード（クロス　リク）はデビルスプリンターによって凶暴化した怪獣の対処をしていた。

ゼット・アルファエッジが宇宙拳法を駆使し巧みに攻撃を浴びせ、ジード・ギャラクシーライジングが更に攻撃を叩き込む。

『レッキング…フェニックス!!!』

『ゼスティウム光線!!!』

『■■■――――ッ！』

２体のウルトラマンのエネルギー光線を受けた怪獣は攻撃に耐えきれずに爆散した。

爆破を見届けた２体のウルトラマンは上空へ飛ぶ。

その様子を見ていた１人の男が居た。

「クロスのやつ、たるんでやがる……　久しぶりに叩き直してやる。　フフッ……」

男は自分が持つ１本の刀を見て、去っていった。

変身を解いたクロスは、街の裏路地を通りながら先に星雲荘に帰ったリクと通信をしていた。

『最近、デビルスプリンターによって凶暴化した怪獣の出現が多いね。　確かこの宇宙って、怪獣なんて居なかった筈なのに……』
「ええ、この世界の歴史を調べていたら、一度だけウルトラマントリガーとらが訪れた時に怪獣が現れたぐらいで、それ以来ゼットが追いかけていた怪獣が来るまで、普通の怪獣の出現すら無かったです。」
『何か……陰謀のような物を感じますね……　ひとまずやることも終わったので、僕らはこの地球を出ます。　また何かあったら通信をお願いします』
「はい！」
　通信が切れると後ろから1人の男がクロスの右肩に顎を載せ、話し掛けてきた。
「久しぶり～♪」
「うぉっ!?　……ってジャグラーさん!?　どうしてまたこの地球に……」
「へぇ～、お前さんもこの三枚のメダル持ってんのか」
　そう言う男【ジャグラー】の手にはクロスが持っていた三枚の怪獣メダルが収まっていた。
「ちょっ!?　返してください！」
「なぁ、さっきの戦い見せてもらったが……お前弱ってないか？」
『クロス！　こんなやつの言うことに――――』

「いや……全く、仰る通りです」
『クロス!?』
　ジャグラーの言うことに否定をするゼットとは反対に肯定するクロスに、ゼットは驚愕する。
「あら？　分かってたのか？」
「2年前のゼロ師匠の修行で力を付ける器(身体)は大きくなりましたけど、中身(力)が減っていれば結局弱体化したのと同じだ。　でも力を付けれるような相手がなかなか居ないんだよな、元々怪獣が居なかった世界なんだし……」
「なら、俺が叩き直してやろうか？」
　ジャグラーが邪悪な笑みを浮かべてそう言った。
「本当ですか!?」
「元々それが目的だしな、手伝ってやる」
　クロスはジャグラーの申し出に快く答える。

　そして翌日、クロスは学院に数日欠席することを伝え、ジャグラーとの待ち合わせ場所に向かった。
「分かってると思うが、今回は殺す気でかかってこいよ」

「分かってますよ、それに相手は歴戦の猛者、本気で行かないと失礼っすからね。　あと勝ったらゼッパンドンへの変身方法教えてもらいますからね」
「歴戦の猛者……言ってくれるねぇ、殺す気で叩きのめしてやるよ!」
　クロスとジャグラーは同時にゼットライザーとダークゼットライザーでゲートを展開し、飛び込む。
　その刹那、【ウルトラマンゼット・アルファエッジ】と合体魔王獣【ゼッパンドン】が光の中から現れる。
『ジェアァァァァァ――――ッ!!!』
『■■■■■――――――ッ!!!!』
　ゼットとゼッパンドンはそれぞれ、ゼスティウムエネルギーの光線【ゼスティウムメーザー】と紫色の破壊光線を放つ。
　2つががぶつかり合い、巨大な爆発が起きる。
『ジェッ!』
『■■―ッ!』
　ゼットとゼッパンドンは更に蹴りや爪での斬撃を繰り返し、それぞれダメージを与えていく。
『クロス、ガンマフューチャーに変えた方が良いのでは?』

『いや、アルファエッジのままで戦う』
そのままダメージの与え合いを続けていると、ゼットのカラータイマーが点滅する
『とりあえず、妥協点までは行っているようだなぁ、だがまだ弱いッ！』
ゼッパンドンは口から吐き出す超高温の火球【ゼッパンドン撃炎弾】を放つ。
『【ゼットアイアス】ッ！』
ゼットはバリアで防ぐが、守りきれずにバリアが破壊され、ダメージを受ける。
『ジェェェアァァッ!!?』
『くッ!?　こうなったらあの技で……』
クロスはウルトラメダルを取り出そうとする。
『させねえよ』
ゼットに、ゼッパンドンが追撃を仕掛ける。
『グァッ!?』
クロスはインナースペース内で転ぶ。
そしてインナースペースが少しずつ、色素が無くなっていくかのように、色を失っていく。
『……ッ！　うおおおおおおお!!!!』
その中でクロスは無我夢中で【ウルトラマンギンガ】、【ウルトラマンビクトリー】【ウ

ルトラマンエックス】のウルトラメダルをホルダーから引き抜き、ゼットライザーのスリットにセットし、勢いよくブレードを展開し、天に掲げてトリガーを引く。

すると――――

《Ｇｉｎｇａ.》

《Ｖｉｃｔｏｒｙ.》

《Ｘ.》

『ショオウラァッ!!!』

『ツェア!!!』

『イィーッ…サァァァァッ!!!』

《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ｏｍｅｇａ　Ｔｒｉｎｉｔｙ.》

『ジェァッ!』

ウルトラマンギンガ、ウルトラマンビクトリー、ウルトラマンエックスが、残光を残して飛び、その残光が中心に集まると、クリスタルが無数に散らばり中心に銀河がある空間、サイバー空間のような空間、黒い空間に無数の虹色の光が吸い込まれる背景をバックに見たことが無い姿のゼットが飛び出した

――――――――――――――――――――

『おん?』

突然ゼットの身体を光が包み込む。
そして――――
『ジェァッ!』
光が弾けると、1体のウルトラマン――――赤と銀と黒のボディカラーと両足の金色の装飾の上のXの形の青い発光体と、両腕の金色の装飾の上のVの形の青い発光体と、頭部の目の上からトサカの部分までに付いて【ウルトラマンギンガビクトリー】のような青い発光体と、両肩の金色の装飾の上のZの形の青い発光体と、胸部のZ型のカラータイマーとそれを囲むようなΩの形の青い発光体の装飾が特徴のウルトラマン【ウルトラマンゼット・オメガトリニティ】が立っていた。
『これは……どうなってるんだ?』
『そんなこと俺も聞きたい!　このウルトラフュージョンが何なのか全く分からん!』
『兎に角、やるしかないか!』
『ジェァ!』
クロスがインナースペース内で構えると、ゼットも同時に構えを取る。
それを見たジャグラーが笑う。
『なるほどな……面白い!　かかってこい!』

そして2体は再び交戦する。
新たな姿のゼットは近接戦でゼッパンドンを圧倒する。
戦っている内にクロスはとある違和感に気付く。
『明らかに今までのウルトラフュージョンより圧倒的に強い。　どういうことだ?』
『クロス!　メダルを見てみろ!』
『ん?　……ッ!?』
クロスがスリットのメダルを見ると、三枚のメダル全ての縁がメタリックブルーに変化していた。
『ギンガさん、ビクトリーさん、エックスさんの力が共鳴して、メダルがパワーアップしたんだ。　これまでのウルトラフュージョンとは格が違うのは当然でございますな』
クロスは更に攻撃を連続で叩き込む。
そして飛び蹴りでゼッパンドンを引き離したゼットは行動を取る。
『【オメガサンダーX】ッ!』
ゼットがジャンプし、両腕と両足を曲げて縮こまる。
『ジェアッ!』
そして両腕両足を勢いよく伸ばし、X状のスパークを発射し、それがゼッパンドンに直撃する。

『ゼッパンドンが怯んでいるぞ！　今がチャンスだ！』
『ああ、これで決めるッ！』
ゼットに付いている全ての発光体が光輝き始めると、ゼットは両腕をZ型のカラータイマーの左右に当てて、左腕を上に、右腕を下に下げ、虹色のゼスティウムエネルギーでZの形を作る。
『ジェェェェ……』
更に右腕でV字を描いて形成した虹色のエネルギーを左手に纏わせる。
そして両腕で水平に開き、両腕を左へ振りかぶりながら左脚で踏ん張る。　その際に足の裏から周囲の地面や空中に虹色のエネルギーの余波が放射される。
左手にエネルギーが溜まると、砲丸投げの要領で全力でゼッパンドンへ振りかぶる。
『ゼスティウムゥゥゥゥ……光オォォォ流ッッッッッッ!!!!!!』
『ッ!?　【ゼッパンドンシールド】ッ!!』
光線がゼッパンドンが張ったシールドに阻まれる。
『チェストォォォッ!!!!』
クロスが叫ぶと光線の威力が増して、シールドを破壊する。
『■■■■――――ッ!!!!!!』
ゼットとの連戦で疲弊したゼッパンドンはゼスティウム光流が直撃し、叫び声を上げ

て爆散する。
　爆発を見届けたゼットは緑色の光の跡を残しながら上空へ飛び出すと、少し横に飛ぶと、急加速して、『Z』の軌跡を作り出しながら飛び去った。

　数分後帰ってきたクロスと、ボロボロのジャグラーが話をしていた。
「あの姿で倒せないとなるとまぁまぁだが、新しい姿の攻撃は結構堪えたぜ」
「あはは…やっぱり手厳しいな……」
「でも約束は約束だ、ダークゼットライザーの作り方からゼッパンドンの変身方法まで教えてやるよ」
「押忍！　ありがとうございます！」
　話を聞いたクロスはゼットライザーを切り株の上に載せて、クリムゾンセイバーをゼットライザーに向かって突き付ける。
「星の瞬く狭間の闇よ、暗黒のパワーを我にもたらせ！」
「光から闇へ、闇から光へ！」
　クリムゾンセイバーを上へ突き出すと、黒い雲が現れるのと同時に紫色のスパークが迸り、さらにそれがゼットライザーに直撃し、ゼットライザーに変化が訪れる。
　ライザーが分裂し、片方のライザーの青と黒の部分が黒と赤になっていく。

そしてクロスのアクセスカードが2つに分離し、片方がそのままゼットに変身するアクセスカードで、もう片方が紫色で、クロスの後ろに阿修羅のような生物が写る新たなアクセスカードに変化する。

クロスは両方のゼットライザーを手に取ると――――

「よし、ダークゼットライザーを作り出せた」

こうしてクロスはゼッパンドンに変身することが可能になった。

そして数日後、クロスがフェジテに戻るとアリサ達に特訓をしていたことを後悔するようなことを聞かされる。

「ハァ!?　システィーナの婚約者が押し掛けてきて、夢を諦めて結婚しろ!?　しかもそれ受けちゃったの!?」

「でもシスティとその婚約者の行動が怪しすぎるのよ。システィは最初はグレンを偽の恋人にして断っていたし、その婚約者に至っては自身の家の名誉を落とすような行動をしてるの」

「自分の家の名誉落とすなんて、普通の貴族がするとは思えん行為だな……それに遠見の魔術を使ってたんだけど、婚約者の人、【人工精霊（タルパ）】を使っていたのよ」

「!?　――――いや、なるほどな……アイツの仕業か……」

クロスは握っていた堅い果物を握り潰す。

「ええ、アイツの仕業でしょうねって何処へ行く気なの兄さん!?」
アリサは何処かへ行こうとしていたクロスを呼び止める。
「いや？　結婚式はまだ挙げてないんだろ？　なら結婚式を襲撃する準備をしようと思ってな。　正直今襲撃しても俺1人じゃ1／3の確率でしか勝てないだろうし」
「……ということでちょっくら行ってきます。　ちゃんと結婚式には参加してやれよ？」
「ちょっと!……1週間以上見ない内に成長しすぎでしょ」
クロスは玄関からではなく、窓から飛び出し、一瞬で姿を消す。
それを見たアリサはため息を付く。

そして話は最初に戻って結婚式当日、クロスはゼッパンドンで結婚式会場を襲撃した。
といっても、光線や炎は出さずに、踏み荒らすだけだが、それでも会場は大騒ぎ。
その間にグレンはシスティーナを誘拐（救出）してて、クロスにサインを送る。
クロスは土煙を上げながらゼッパンドンの変身を解き、誰にも気付かれないように、式場を去り、グレン達と合流する。
「待たせたな」

クロスはグレン達の元に着地する。
「クロス!?　何でここに!?」
「悪いが俺も先生の協力者でな、あの怪獣（ゼッパンドン）は俺だったんだよ」
「貴方怪獣にもなれたの!?」
「俺も初めて見たときびっくりしたぜ」
クロスの話に驚きを隠せないシスティーナと苦笑いで呟くグレンを尻目に、クロスはクリムゾンセイバーの銃口をグレン達の後ろに向けて銃弾を発射する。
「今度は何?」
システィーナが後ろを振り向くと、光が灯ってない虚ろな目に土気色の顔色の全身に血管が浮き出している人間の心臓にクロスの銃弾が直撃しているところだった。
「……えっ?」
システィーナが驚愕していると、横からクロスが飛び出す。
クロスは背後にフェイクヒーローズゲートを展開し、インナースペースに入らずにアクセスカードをダークゼットライザーにセットし、装填済みのメダルを読み込ませる。
『闇の力……もう1回お借りするぜッ!!!』
クロスはダークゼットライザーを天に掲げて、トリガーを押し、フェイクヒーローズゲートを潜るとゼッパンドンに変身する。

ゼッパンドンは奥からやってきた自分が撃ち殺したのと同じような症状の人達を着地の衝撃で吹き飛ばす。

ゼッパンドンは吹き飛ばした人々を尻目にグレンとシスティーナに念話で叫ぶ。

『先生！　こいつらは【天使の塵（エンジェル・ダスト）】の末期中毒者だ！　俺が食い止めてる間に逃げろ！』

ゼッパンドンは巨体を利用して、人々を食い止める。

「何ッ!?　……とりあえず、任せたぞクロス！　白猫ッ！　行くぞッ！」

「ちょ……【天使の塵（エンジェル・ダスト）】って何なの!?」

グレンはシスティーナの手を引き、走る。

そを見たゼッパンドンは、防御を止める。

『【天使の塵（エンジェル・ダスト）】の末期中毒者は何故かコスモス先輩のメダルを使ったヒーリング技でも救うことができない……ならば方法はひとつッ！』

『■■■――――ッ!!』

クロスはゼッパンドンとなって人々を塵も残さず消し去っていく。

そして中毒者を全て葬ったところで、クロスの視線の先に遠くの建物の屋上に1人の青年が立っているのが映る。

『ッ！　――――てめぇ！』

変身を解除したクロスはそのまま、その青年の数メートル前に着地する。

そして怒りの視線を相手に向けてクロスは声を出す。
「よう……久しぶりだな、【正義】……ジャティス＝ロウファン！」
「久しぶりだね、クロス――ウルトラマンゼット……」
【黒腕（クロスとゼット）】と青年――【正義（ジャティス）】、この２人が再びぶつかり合う。

システィーナ結婚騒動―正義と白猫と新時代の勇者―

クロスとジャティスの戦闘が始めてから３０分経ち、システィーナを置いてきたグレンが参戦した。

「デリャァァァァァァァ!!!!!」

クロスがゼットライザーを構えて、ジャティスに突撃する。

ジャティスが斬撃を回避する。

すると、後ろからグレンの拳銃から銃弾がジャティスに向かって放たれる。

「そんな単純な攻撃当たると思っているのかい？」

ジャティスが読んでいたかのように回避する。だが、そんなジャティスの後ろにクロスが忍び寄り、斬りつけ、グレンが突撃して拳を振るう。

ジャティスはグレンの拳を人工精霊（タルパ）【彼女の右手（ハーズ・レフト）】という黄金の剣を握る左手という奇妙な姿の精霊で受け止めるが、クロスの斬撃が少し間に合わず、少し斬撃がヒットする。

《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ．》

《Ｃｏｓｍｏｓ．》

《Ｎｅｘｕｓ．》
《Ｍｅｂｉｕｓ．》
『「ライトニングジェネレートッ！」』
掲げられたゼットライザーから放たれる虹色の光がジャティスに襲いかかるも、人工精霊（タルバ）【彼女の怒り（ハーズ・レイジ）】という一対の翼を生やした葡萄の姿をした数体の精霊の爆発によって威力を軽減させる。
――そしてその爆発の中から高速で飛ぶ【大蛇砲（カルヴァリン）】――――【音速ノ大蛇砲（ジェット・カルヴァリン）】を発動させたクロスの拳が高速で伸びていきジャティスの周囲を回って顔面に直撃する。
ジャティスは少し吹き飛ぶが、体勢を立て直しつつ、追撃の大蛇（パイソン）を避けながら呟く。
「さすがウルトラマンの力、僕の正義を打倒する力……君を超えることで僕は完全な正義になれるッ！」
「ウルトラマンの力はそんなことのために使われるものじゃねぇッ！」
クロスが更に攻撃を仕掛けようとするが、衝撃波が周囲を包む。
「!?」
クロス達が衝撃波の元を見ると、腕に剣のようなものが付き、細い尻尾と羽根が付いている昆虫のような見た目の黒いボディカラーに黄色い発光体があるスタイリッシュなフォルムの怪獣が立っていた。

「嘘だろ……【ハイパーゼットン】!?」
『ゼッ……トン……』
『ハイパーゼットンはゼロ師匠がコスモスさんやダイナさんと3人がかりでも倒されてしまったウルトラやばいやつだ、さっさと倒さないと街が壊滅するぞ！　でも俺達だけでやつに勝てるかどうか……』
「先生！　あの怪獣は俺に任せてください！」
「!?　あ、あぁ分かった！」
　クロスはハイパーゼットンに向かって走りながら、ゼットライザーのトリガーを押す。
　すると【ヒーローズゲート】が目の前に展開され、クロスは直ぐにゲートに飛び込む。

《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ．》
《Ｚｅｒｏ．》《Ｓｅｖｅｎ．》《Ｌｅｏ．》
『ゼエエエエットッ!!』
『デヤッ！』
『デュワッ！』
『イヤァッ！』

《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ａｌｐｈａ　Ｅｄｇｅ．》

『デュワッ！』

『アルファバーンキックッ！』

ゼット・アルファエッジがアルファバーンキックで突撃する。

だが、ハイパーゼットンはテレポートで離れた場所に飛ぶ。

『ゼスティウムメーザーッ！』

ゼットは即座に飛び上がると額のビームランプからゼスティウムメーザーをハイパーゼットンに打ち込むが、これまたテレポートで回避され、逆に火球で追撃を受ける。

『グァッ!?　……相変わらず、恐ろしくはえぇな。だが、こっちは成長してるんだよッ！』

ゼットは両腕を赤黒くさせて連続で拳を振るう。

『《黒い蛇群（ブラックマンバ）》！』

ゼットの腕から放たれる赤黒い拳の乱舞がハイパーゼットンに襲いかかる。

ハイパーゼットンが怯んでいる間に、ゼットはスパークランスを取出しトリガーを３回引き、ハイパーゼットンに向けて切っ先を突き出す。

『ゼットホークスマッシャー！』

剣先からエメラルド色のビームが飛び出し、ハイパーゼットンに襲いかかる。
だが、ハイパーゼットンはゼットホークスマッシャーを吸収して、跳ね返した。
『ウルトラアイアス!』
ゼットはバリアを張り、ハイパーゼットンの光線を受け止めるが、バリアが破れ、ダメージを受ける。
『クッ……強いな……でも勝てない相手じゃないな』
『その自信は?』
『ゼロ師匠達が戦ったハイパーゼットンよりも弱体化している。ハイパーゼットンは既に倒されているから、多分何かしらの影響で復活した影響かもしれないな』
『でも、強いのは変わりありません。どうすればいいのやら……』
『とりあえず弱点を見つけるしかないな……ん?』
するとクロスがハイパーゼットンのとある動きを目に思い出す。
それはゼスティウムメーザーを避けた後のハイパーゼットンの動きであった。
『そういえばあの動きって……』
ゼットは立ち、飛び上がるとゼスティウム光線を放つ。
だが、ハイパーゼットンはゼットンシャッターで防御すると、火球を放ちゼットを落とそうとする。

『やっぱり！』

クロスは確信を得ると、ハイパーゼットンの攻撃を回避し、ゼットに話す。

『ゼット！　あのハイパーゼットン、何かしらの影響で変化したゼットンかもしれない』

『何っ!?』

『今まであいつは一切飛んでいない。ハイパーゼットンは凄まじい速度での飛行が可能なのに飛び上がって放ったゼスティウムメーザーやゼスティウム光線の後は火球を使った。まだ決まった訳じゃないけど、ハイパーゼットンにしてはおかしな行動が多い。なら空中からの近接攻撃をするのが得策だろう』

『なるほど……試してみるか！』

《Ｊａｃｋ．》

《Ｚｏｆｆｙ．》

《Ｆａｔｈｅｒ　Ｏｆ　Ｕｌｔｒａ．》

ゼットはゼットライザーを取り出すと、光剣とスパークランスの二刀流で、空中からヒットアンドアウェイで攻撃を仕掛ける。

ハイパーゼットンはテレポートでの回避を続けるが、何故か空を飛ばすに、火球や光弾で打ち落とそうとする。

『『ゼットハリケーンアタッカーッ！……Ｍ７８流（ナナハチ）　竜巻閃光斬――――――ッ

!!!!
!!!!』
スパークランスの刀身から巨体すら吹き飛ばしそうな暴風し、ハイパーゼットトンを撹乱し、その内にゼットは巨大な光輪を投げる。
ハイパーゼットトンはゼットトンシャッターで防ごうとするが遅く、光輪が直撃しダメージを受ける。
『ウルトラヒットお！　クロス！　これを繰り返していれば勝てるでございますよ！』
ゼットが喜びの声を上げるが、クロスはハイパーゼットトンの方を見つめ続ける。
すると光輪が当たったハイパーゼットトンに変化が訪れる。
『ゼッ……トン……』
今まで使わなかった翼を高速で動かすとハイパーゼットトンから暗黒のオーラが発されると、周囲の建物が焼き尽くされる。
『なっ!?』
『ハイパーゼットトンの能力が開花しちまったか！　早く倒さないと……っ!?』
とクロスが話していると、ハイパーゼットトンが接近し、ゼットに暗黒の火球を放つ。
『ジェェェアァァッ!!?』
ゼットは吹き飛び、グレンとジャティスの戦闘場所に突っ込むと、カラータイマーが赤く点滅し、ウルトラフュージョンが解けてオリジナル態に戻ってしまう。

『身体が……重い……っ!?』
ハイパーゼットンがゼットに接近し、最後の一撃を喰らわせようとする。
『皆…ゴメン…』
クロスが死を覚悟する。が――――
『《光輝く護りの障壁よ》ッ！』
『『ッ!?』』
ハイパーゼットンの腕を【フォース・シールド】が防ぐ。
勿論魔術でハイパーゼットンの剣のような腕による攻撃を完全に防げる訳がなく、すぐに割れてしまうが、ゼットはそのスキに回避をした。
ハイパーゼットンは地面に腕が埋まり、身動きが取りにくくなってしまった。
ゼットが後ろを振り向くと、そこに見慣れた少女がグレンを庇うように立っていた。
その少女は――――
『システィーナッ!?　なんでここにッ!?』
「私はもう逃げない、先生とクロスを連れ戻して、皆の元に帰るんだからッ！」
「……ウザいね、君。容姿だけじゃなくて、性格までセラに似ているんだな……」
「そうですか、どうでもいいし、あなたの正義の方がウザくて馬鹿らしいですけど」
盛大に腕組みして吐き捨てるシスティーナにクロスは笑顔を溢す。

『あいつ、絶対あの野郎に目つけられちまったな……ハハッ』

その後もシスティーナの行動に笑いを浮かべ、１つの想いがクロスに宿る。

『師匠として、ウルトラマンとして情けねぇな、怪獣相手に臆病になっちゃあ。　例えどんな敵でも、ウルトラマンは諦めない！』

ゼットは立ち上がり、拳をハイパーゼットンに振りかざす。

『俺達は……【怪獣退治の専門家】だから！』

すると、ゼットの元に光の槍が降りてくる。

ゼットが光の槍を手に取ると、その槍は青い槍に変化する。

『【天より降りたる光の槍】……？』

『太古のウルトラマンからの贈り物だ……』

すると、槍に共鳴する様に、メダルホルダーから【ウルトラマンギンガ】、【ウルトラマンビクトリー】【ウルトラマンエックス】のウルトラメダルが飛び出す。

『オメガトリニティになれと言うことか……？』

『クロス！　ウルトラフュージョンだッ！』

『押オォ忍ッ！』

クロスが叫ぶと、髪色が赤色に変化し、胸部の中心が青く輝き、両眼から赤黒い稲妻が迸る。

３つのメダルを右手の上に広げる。
すると、３つのメダルが共鳴し、メダルの色が前のメタリックブルーではなく、鮮やかな青色に変化する。
『絆の旋風ッ!!　新時代の勇者ッ!!!』
ウルトラメダルをゼットライザーのブレードのスリットにセットする。
『ギンガ先輩!ビクトリー先輩　！　エックス先輩!』
ブレードを動かし、メダルをスキャンさせる。
《Ｇｉｎｇａ.》《Ｖｉｃｔｏｒｙ.》《Ｘ.》
『押オォォ忍ッ!!!』
ブレードを展開させると、光が集まり、ウルトラマンゼットがクロスの背後に立つと手を広げながらこう叫ぶ。
『ご唱和くださいッ!我の名をッ!　ウルトラマンゼェェェェェットッ!!!』
『ウルトラマァァァンッ!!!　ゼェェェェェットッ!!!!』
クロスは身体を捻らせて力を溜めて、ゼットライザーを天に掲げて、トリガーを押す。
するとクロスの身体が光に包まれて、ゼットオリジナル態に変化し、ゼットライザーの上部に銀河のような魔法陣が上で光輝く。

『ショオウラァッ!!!』
『ツェア!!!』
『イィーッ…サァァァァッ!!!』
《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ｏｍｅｇａ　Ｔｒｉｎｉｔｙ.》
『『ジェァッ！』』
魔法陣から【ウルトラマンギンガ】、【ウルトラマンビクトリー】、【ウルトラマンエックス】が残光を残して飛び、その残光がゼットオリジナル態のクロスに集まる。
クロスがジャンプし、右腕を全力で突き出すと、光が弾け巨大化しながら【ウルトラマンゼット　オメガトリニティ】が飛び出した

ゼット・オメガトリニティが湧き上がるエネルギーの光を纏って地面に着地すると、土煙がゆっくりと周囲を包み込む。
そしてゼットが完全に立ち上がると、身体に纏う黄金の光が渦のような青い衝撃波、Ｖ型の黄色い衝撃波、Ｘ型の緑色の衝撃波と青いスパークを発して土煙を吹き飛ばし、弾ける。
『『ゼェァァァァァァッ!!!!』』
ゼットとクロスの声が混ざったような咆哮を上げると空を飛び、残像を残す速度でハ

イパーゼットンに肉薄する。
腕が抜けたハイパーゼットンはテレポートで避けようとするが、テレポートの速度を上回る速度でゼットは青い槍【ゼットランスアロー】を振りかぶる。
ハイパーゼットンはゼットランスアローでの攻撃を直撃してしまい、上空へ吹き飛ぶ。
が体勢を立て直し、暗黒火球を発射する。だが
『ゼェッ！』
エネルギーを纏ったゼットの片腕によって受け止められ、拮抗したが、握り潰される。
ゼットはゼットランスアローのレバーを1回引くと、Zの形に振る。
するとゼットの目の前に炎で出来たZの文字が浮かぶ。
そしてゼットはゼットランスアローを突き出し、突進する。
『ジェッ！　ジェッ！――――――ジェァァァァッ!!!』
『ゼットランスッ！　ファイヤァァァァッ!!!』
突進したゼットが持つゼットランスアローの先端にZ型の炎が回転しながら纏わりつく。
ゼットランスアローの炎の技【ゼットランスファイヤー】はハイパーゼットンのハイパーゼットンバリアを無理矢理突き破りダメージを与える。

『ゼッ……トン……』

『ゼェッ！』

ゼットはレバーを2回引き、ゼットランスアローをZの形に振り回すと、エッジ部分の周囲に弓矢のエフェクトが現れる。

そして左手で柄部分を添うように氷の矢を引く。

ハイパーゼットンが氷の矢に対抗するべく、巨大な暗黒火球を発射する。

『ゼットアイスアロォォォォォォォォッ!!!!』

ゼットは柄を添うように付けた左手を放す。

放たれた氷の矢が巨大暗黒火球と拮抗する。

だが、ゼットアイスアローが一歩上回ったのか、暗黒火球は崩壊し、氷の矢がハイパーゼットンに突き刺さり、ハイパーゼットンの肉体を凍らせる。

『これで決めるッ！』

ゼットに付いている全ての発光体が光輝き始めると、ゼットは両腕をZ型のカラータイマーの左右に当てて、左腕を上に、右腕を下に下げ、虹色のゼスティウムエネルギーでZの形を作る。

『ジェェェェ……』

更に右腕でV字を描いて形成した虹色のエネルギーを左手に纏わせる。

そして両腕で水平に開き、両腕を左へ振りかぶりながら左脚で踏ん張る。　その際に足の裏から周囲の地面や空中に虹色のエネルギーの余波が放射される。
左手にエネルギーが溜まると、全力でハイパーゼットンに突き出す。
『『ゼスティウムゥゥゥ……光オオオオ流ッッッッッ!!!!』』
虹色の光の奔流がハイパーゼットンを包み込み、ハイパーゼットンが爆散する。
その爆発の中から、1つの光がゼットのカラータイマーに入り込む。
爆発を見届けたゼットは、手から虹色の粒子を出して、街を修復する。
『『シュゥ……ワッチャァッ！』』
そしてゼットは緑の光の跡を残しながら上空へ飛び出すと、少し横に飛ぶと、急加速して、『Z』の軌跡を作り出しながら飛び去った。

「ふっ！」
地面に着地したクロスは、星空に包まれた綺麗な街の中で一際異彩を放つ壊れた礼拝堂を見て、クロスは苦笑いを浮かべる。
「こりゃまた派手にやったなぁ……まぁ、いいか」
そう言うとクロスは1枚のメダルを見る。　それは爆発の中から出てきた光の正体だった。

「ゼットンにハイパーゼットンのメダルを入れるとハイパーゼットンに変化するのか、随分と厄介な物が出来てるじゃねぇか……

てか、ようやく倒したアイツが本当のハイパーゼットンじゃないことが恐怖でしか無いわ……」

『今はそんなこと良いんじゃないか？　ほら、クラスの皆さんが待っておりますぞ？』

「あぁ……そうだな」

クロスはクラスの皆が居る場所へ走る。

第５章―闇を飲み込む　黄金の嵐／最強の魔術師の力、お借りします―

未来へと続く道（過去）

ここは古代遺跡『タウムの天文神殿』の未発見の道。

クロスは遺跡の大気マナによって作られた怪獣を模した生命体を相手にしていた。

炎を纏わせた銃剣を何度も叩きつけ、【インフェルノ・ダイナマイト】を纏わせた蹴りを怪獣モドキに叩き込むが、怪獣モドキは魔力に還ることはなく形を保ったままだった。

「俺のままだとタイガスパークを使わないと倒せないか……これ天の智慧の連中が召喚したやつより強いんじゃね？」

クロスが苦笑いをしながら怪獣モドキに赤黒い巨拳【猿王銃（コングガン）】を叩き込み、怯ませる。

クロスはタイガスパークの下部のレバーを引き、【ウルトラマンタイガ】のメダルを読み込ませる。

《カモン！》

《ウルトラマンタイガ・コネクトオン！》

ウルトラマンタイガの幻影を纏ったクロスは右腕を挙げると、両腕を頭上で重ね合わせ、両腰まで持っていき両拳を握るとエネルギーが溜まっていき、限界まで達した瞬間、左腕を上に、右腕を下にして右腕の甲を向けてＴ字に腕を組む。

「ストリウム！　ブラスタァァァッ!!」

クロスはＴ字に組んだ腕からウルトラマンタイガの必殺光線【ストリウムブラスター】を放つ。

怪獣モドキは光線が直撃し、魔力に還元され、周囲に霧散する。

「ふう……ここに来てからもう3日目か、それでも抜けられないなんて、ここ絶対別次元だよな……」

クロスは走って、奥へと向かっていく。

クロスがこの遺跡の未知の場所を見つけたのは3日前、たまたま【タウムの天文神殿】前に怪獣が出現し、退治したついでに、遺跡内部を見ようと思い内部に入ったカイトは、天象機装置に謎の術式を発見し、それを起動したところ、変な異次元に迷い込んでしまったという訳なのだ。

クロスは走っていると、高さや横幅が１００メトラ、縦幅が1キロスほどある部屋に

辿り着く。
「ここは……？　広すぎるだろ……」
その部屋の奥には何かしらの装置があり、壁にはウルトラ文字やらルーン文字やらが織り交ぜられて、絵と文章が彫られていた。
クロスはウルトラ文字も理解が出来ているので、その文章を読む。
「【超人を模した黒き巨人が現れし時、空より白銀の神現れ、巨人を滅す】……これってもしかしなくても、ダークザギとウルトラマンノアのことじゃ……」
クロスは読み進めていく。
「――――【魔王が世界を滅ぼしかけたその時、銀色ノ神と紫の超人が現れ、魔王を正義の魔法使いと共に滅ぼした。】」
「……紫の超人――――――はっ!?」
紫色の巨人と聞いてクロスはウルトラマントリガーを思い浮かべる。
「やっぱりウルトラマントリガーとは強いウルトラマンなのだろうか…」
壁画を読み終わったクロスは次は、何かしらの装置がある場所へ向かった。
そこにはレバーとモノリスがあるだけの質素な装置が置かれていた。
「で……これは何だ？」
クロスはモノリスを【ファンクション・アナライズ】で解析をし、この異次元から脱

出できる令呪（コマンド）を見つけると即入力し、レバーで起動をする。
ゲートが現れ、クロスが中へ入るとそこには宇宙空間に出てしまう。
「宇宙!?」
クロスは即座に光の膜を張り、身を守る。
するとの全身に持つ銀色の鱗が特徴で、長い尻尾に大きな翼を持つ怪獣――――超鋼銀獣【アイシルバ】が現れる。
「何だこいつ!?」
『俺も見たことの無い怪獣だ、ウルトラ張り切っていくぞ！』
「押忍！」
クロスはゼットライザーのトリガーを押す。
すると【ヒーローズゲート】が目の前に展開され、カイトは直ぐにゲートに飛び込む。

ヒーローズゲートからインナースペースに入ったクロスは【ウルトラアクセスカード】をゼットライザーにセットする。
《Ｃｌｏｓｅ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ.》
腰のメダルホルダーから、左上に置いた【ウルトラマンゼロ】、【ウルトラセブン】、【ウルトラマンレオ】ウルトラメダルを取り出し、右手の上に広げる。

『宇宙拳法！　秘伝の神業ッ！』
ウルトラメダルをゼットライザーのブレードのスリットにセットする。
『ゼロ師匠！　セブン師匠！　レオ師匠！』
ブレードを動かし、メダルをスキャンさせる。
《Ｚｅｒｏ．》《Ｓｅｖｅｎ．》《Ｌｅｏ．》
『押忍ッ！』
ブレードを展開させると、光が集まり、【ウルトラマンゼット】がクロスの背後に立つと手を広げながらこう叫ぶ。
『ご唱和くださいッ！我の名をッ！　ウルトラマンゼェェェェェットッ!!!』
『ウルトラマァァァン!!　ゼェェェェェットッ!!!』
クロスはゼットライザーを天に掲げて、トリガーを押す。
『デヤッ！』
『デュワッ！』
『イヤァッ！』
《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ａｌｐｈａ　Ｅｄｇｅ．》
『デュワッ！』
【ウルトラマンゼロ】、【ウルトラセブン】、【ウルトラマンレオ】が残光を残して飛び、そ

の残光が中心に集まり、その中から【ウルトラマンゼット　アルファエッジ】が飛び出した

アイシルバは電撃を何発も放つ。
ゼットは電撃を躱しつつ、勢いよくアイシルバに向かって飛ぶ。
そしてアイシルバを炎を纏った蹴りで吹き飛ばす。
『『アルファバーンキック!!!!』』
吹き飛んだアイシルバにゼットは追撃を仕掛ける。
『『ゼスティウムメーザー!』』
額のビームランプから放たれる緑色の光線がアイシルバに直撃する。
だが、アイシルバには全くダメージを与えられないどころか、反射して遥か彼方へ飛んでいく。
『何ッ!?……ッ!?』
クロスが驚くと、急に上へ飛ぶ。
その直後にはクロスの電撃がゼットが居た場所を通過した。
『おいおいカイト、油断すんなよな……』
『そうだ、相手は初めての怪獣だ、油断しちゃだめだ……ッ!?』

ゼットが体制を整えるのと同時にアイシルバの突進がゼットにヒットし、吹き飛ぶ。
『この野郎ッ！』
ゼットはアイシルバを右手で掴み、左手に握るゼットライザーで攻撃を仕掛ける。
アイシルバは翼に電撃を纏わせ、ゼットに追撃を仕掛ける。
ゼットライザーでもダメージを与えることが出来ず、電気を纏った翼の一撃で更に吹き飛ぶ。
『グッ……こいつ、めちゃくちゃかてぇな』
『ウルトラフュージョンを変えてみたらどうだ？』
『ガンマフューチャーやシグマブレスターでは火力不足だし、オメガトリニティは光線主体だから通らないかもしれない……ベータスマッシュでも通るかどうか…』
『こうなったら理屈を超えたパワーが必要だ、それこそゼロ師匠にジード先輩、そしてジード先輩のお父上、【ウルトラマンベリアル】のメダルが必要だ』
クロスはメダルホルダーを開いて中身を見せる
『この中には!?』
『無い……そもそもベリアルのメダルなんて存在しな……ん？』
クロスのメダルホルダーの中身を見ていたゼットは1枚だけ黒い怪獣メダルが交じっていることに気付いた。

『クロス、怪獣メダルが交じってないか？』
　クロスはゼットに言われてホルダーを見ると、確かに1枚だけ黒いメダルが交じっていることに気付いた。
『ホントだ、いつ交じったんだろう？』
　クロスはメダルを取り出し、メダルの絵柄を見る。
『なっ!?　ウルトラマンベリアルッ!?』
『何ッ!?』
　それは眼が黄色く、黒い体表をしたウルトラマン、【ウルトラマンベリアル】のメダルだった。
『なんで交じってるんだ？』
『俺も分からな……もしかしたらあれかも』
『あれ？』
『システィーナの【忘レナ草事件】の時にベリアルの力を持った怪獣が出てきただろ？あの時に出てきたんじゃない？　あの時のファイルザードみたいな感じで』
『なるほどな……とりあえず使ってみるか！』
『押忍！』
　クロスがゼロとジードのウルトラメダルを取り出す。

すると、メダルが光り、黄金に輝くメダル【ライズウルトラメダル】へと変化する。
『これは…あの時の?』
『ライバル同士のメダルは共鳴してウルトラパワーアップしたんだ――――クロス！
ウルトラフュージョンだよ！』
『押忍ッ！』

『ゼロ師匠！　ジード先輩！』
クロスはウルトラメダルをスリットにセットしていく。
『ベリアル！　――――うおっ!?』
ベリアルのメダルをセットしようとした瞬間、ベリアルのメダルからスパークが走り、ゼットライザーに入らないように反発する。
『なんだ!?　このパワーは!?』
『なんだこれ!?　メダルが入らない!?』
『これがベリアルの力かっ!?』
『こんな所で無様に負けてたまるか！、うおぉぉぉ――――ッ!!』
クロスは【フィジカル・ブースト】を掛けながら、全力でメダルをセットしようとする。

すると、ゼットがクロスの腕を掴む。
『ゼット！』
『クロス！　力を合わせて闇を飲み込むぞ！』
『押忍ッ！　――――一気に行くぞ！』
『チェストオオオオオオッ!!!!!』
クロスとゼットは馬鹿力でベリアルメダルを押し込み、セットすることに成功する。
そのままブレードをスライドし、メダルを読み込ませる。
《Ｚｅｒｏ　Ｂｅｙｏｎｄ．》
《Ｇｅｅｄ．》
《Ｂｅｌｉａｌ　Ａｔｒｏｃｉｏｕｓ．》
『押オオオ忍ッ!!!』
ブレードを展開させると、光が集まり、ウルトラマンゼットが巨大化してクロスの背後に立つと手を広げながらこう叫ぶ。
『ご唱和くださいッ！我の名をッ！　ウルトラマンゼェェェェェットッ!!!』
『ウルトラマァァァンッ!!!　ゼェェェェェットッ!!!!』
『シュッ！』
『ヴァァッ！』

『ヌアアッ！』
《Ｕｌｔｒａｍａｎ　Ｚ　Ｄｅｌｔａ　Ｒｉｓｅ　Ｃｌａｗ.》
『ジジュゥアッ!!』
【ウルトラマンゼロビヨンド】、【ウルトラマンジード】、【ウルトラマンベリアル・アトロシアス】が残光を残して飛び、その残光が中心に集まり、その中から【ウルトラマンゼット　デルタライズクロー】が飛び出した。

変身した直後、インナースペース内のクロスの右手に何かが握られる。
『ん?』
その手にはベリアルの顔をした剣が握られていた。
『なんじゃこりゃ!?　――――うおっ!?』
その剣は突然動かなくなると、喋りだした。
『俺様を手にしてお前は何をする?』
『喋った!?』
『俺様は斬りたいときに斬りたいモノを斬る』
『何なんだこれは……』
『と、とりあえずこんな時は自己紹介だ！』

『へ？』

そう言うとクロスはベリアル顔の剣に話しかける。

『俺、クロス＝ジェネシスっていいます！　今後とも、よろしくお願いしますッ！』

そう言いきるクロスにベリアル顔の剣は話しかける。

『もう一度言う、俺様を手にしてお前は何をする？』

『……正直、分かんない』

『分かんないって……それは宇宙の平和を――』

『黙れ、お前には聞いてない』

謎の返答に困惑するゼットを黙らせるベリアル顔の剣。

『今の俺達にこの世界にとって、何ができるか分かんない……分かんないけど！　俺達に　力を貸してください……！』

そう言いきると、ベリアル顔の剣は、笑う

『フハハハハハハ!!　未熟！　前から見ていたがお前らは本当に未熟だ！』

『前からって……どういう』

『だからこそ、いつか大きくて面白いモノを切るかもしれない。　それを見てみる気になった』

『さぁ、俺様を手に取るがいい』

『ありがとうございます！』
『行くぞ！』

光の中からゼット・デルタライズクローが飛び出す。
そして右手を上に掲げると、赤黒いスパークと共にベリアル顔の剣――――幻界魔剣【ベリアロク】が出現する。
『ジェェェ――――ジェアァァァッ!!!』
ゼットはベリアロクを使って、前をＺ型に斬ると、ファイティングポーズを取る。
そして、アイシルバに向かって黄金の軌跡を描きながら凄まじい速度で飛ぶ。
『■■■■――――ッ!?』
アイシルバも身構えるが、ゼットの予想外の速度での接近に反応が出来ず、蹴りを喰らう。
吹き飛ぶアイシルバにゼットは更に連続で蹴りを叩き込み、吹き飛ばす。
『おし！　ウルトラ効いてるぞ！』
『ジェア！』
ゼットはアイシルバが吹き飛ぶ場所に回り込み、オレンジ色のエネルギーを纏った左拳で殴り飛ばすと、瞬間移動のような速度で、吹き飛んだアイシルバに追い付き、ベリ

アロクで斬り飛ばす。
更に追撃をするようにベリアロクで連続で斬りつける。
『■■■■――――ッ!!』
勝ち目が無いと悟ったのか、アイシルバはゼットを無視し、先程よりも遥かに速い速度で地球へ向かっていく。
『逃がすか!』
するとベリアロクの眼が輝く。
『これは…?』
『行くぞ!　クロス!』
『押忍ッ!』
クロスはベリアロクのトリガーを3度長押しする。
『ヌゥン!
ヌゥア!!
ハァッ!!!
!!』
『デスシウムスラァァァァァッシュ!!』
カイトはベリアロクを持ち替える。
『宇宙の理を乱す奴は!俺たちが叩き斬る!!』

そしてトリガーを押すと、ゼットは高速移動でアイシルバに接近する。
『『『ウオオオオオオオオオオオオオッ!!!!』』』
そしてZ型に斬り裂き、ゼットはそのまま高速移動で地面へ着地する。
地面に着地した瞬間、上空で大爆発が巻き起こる。
ゼットは立ち上がり、ベリアロクを持ち替える。
そして――――
『シュゥワッチッ!!』
黄金の光の軌跡を残しながら上空へ飛び出すと、少し横に飛ぶと、急加速して、夜空に『Z』の軌跡を作り出しながら飛び去った。

先程の戦闘場所より少し遠くの場所でクロスは黄金の光を纏って着地する。
「ここは……タウムの天文神殿の前か……ようやく脱出できたんだな」
ため息を付くと、クロスは歩き出そうすると――――
「クロス君……？」
「へ？」
クロスが振り向くと、そこにはルミアが居た。
「ティンジェルさんか……どうしてここに？」

「いや……タウムの天文神殿の遺跡調査をしてて、寝てたらさっきウルトラマンが突然現れたから、びっくりして起きちゃったんだよね……」
「へ、へぇ……そうなんだ……」
「それにしても……クロスくんはなんでこんな所に居るの？　それにその道具（ゼットライザー）なんなの？　なんでウルトラマンが去った空から降ってくるの？　もしかして……」
クロスは左手にゼットライザーを持っていたことを思い出し、右手で頭を掻く。
「ハッハッハッ……バレちゃったかぁ」
その後、ルミアと遺跡の入口まで行き、自分の秘密を話すことになった。
その様子を異型の翼が生えた少女に見られていることも知らずに……

名無しと最強

タウムの天文神殿の内部、そこでグレンの生徒達は、現れた狂霊を【マジック・バレット】を使って殲滅していった。
大体を殲滅し終わったグレン達は先へ進もうとするが―
「ッ！」
狂霊の集団が一行に迫ってくる。
生徒達が迎え打とうとするが、クロスに止められる。
「ちょっと待って、ここは俺にやらせてくれ」
「で、でもクロス？　相手はかなりの大群なのよ？」
システィーナが心配するが、この遺跡探索に付いてきていたセリカに止められる。
「心配ないさ、もし打ち漏らしたら私に任せておけ。　さてお手並み拝見と行こうか」
「押忍！」
クロスは右手を後ろに突き出し、呪文を唱える。
それは最強の魔術師であるセリカにも聞き覚えの無い呪文であった。
「《業火の剛腕よ・真なる力を示し・標的を穿て》――――――」

すると左手に魔法陣が現れる。
それがクロスの左腕から右腕に移ると、右腕は巨大な拳へと変化する。
「――――【業火拳銃(レッドロック)】ッ！」
巨大化した右腕が武装色の覇気にて黒く変化すると、炎を纏い始める。
クロスはその拳を狂霊の軍団に叩き込む。
すると狂霊の集団は拳に触れた瞬間、ボウリングのピンのように通路の奥へ吹き飛び、消滅してゆく。
狂霊の集団が全滅したのを確認すると、右腕を元に戻し、クロスが振り返る。
「はい、終わったぞ」
「「「「えええええ――――――ッ!?」」」」

「オルァ！」
ここは、数日前にクロスが遭難していた場所とは違う謎の場所。
クロスはベリアロクとゼットライザーの二刀流で、亡霊達を切り裂く。
『フン、つまらんやつだ』
「逆にベリアロクさんの言う面白いやつが出てきたら困りますって……」
クロスがこんな場所に居るのは理由がある。

大天象儀場（プラネタリウム）を訪れたグレン達が道を引き返していってからクロスは少し残ってまた装置を特殊な魔術を使ってくまなく捜索して行ったときに、通常では発見することが不可能な術式を発見した。

クロスは起動させて、発生した謎の扉に飛び込んだのだ。

「それにしても上層に登って行っているのに何も見つからないな…かなり時間掛けてるし、一旦戻――――」

すると下層から凄まじい闇のオーラを感じた。

『!?　誰かが下層のあの扉を開けたのか!?』

「だとしたら不味いな！」

クロスは呼吸を整えて、来た道を駆け戻り、下層へと向かう。

クロスが急いでいるのには理由がある。

クロスは上層に行く前に下層を探索していたのだが、そのときに大きな扉を見つけた、その扉の奥から凄まじい闇のオーラを感じたクロスは急いで下層へ向かった。

グレン達は、クロスと同じ扉を使って同じ場所に来ていた。

何故ならシスティーナがルミアの異能を使って偶然術式を起動して、扉を出現させた。

するとセリカが何故かあの扉の中へ入ってしまった。
グレン達は準備を整えて、セリカを追い掛けた。
そしてこの扉を見つけて、セリカが攻撃をすると、クロスが感じた闇のオーラの発生源、2本の剣を持つ魔人が現れたのだ。
そして魔人は謎の力で世界最強の魔術師の攻撃を無傷で受け止め、セリカを殺そうとした――その瞬間
『イ゛ェ゛ェ゛ェ゛ェ゛ェ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！゛！゛！゛！゛！゛』
『ッ!?』
凄まじいシャウトと共に赤い光が重機関車のように魔人を弾き飛ばした。
魔人を弾き飛ばした赤い光は、壁にぶつかり反射して上へ飛ぶ。
そして光が晴れると――――
『ベータスァァァマッシュッ!!!!!』
人間大のゼット・ベータスマッシュが吹き飛んだ魔人に向かってドロップキックを放つ。
魔人は更に吹き飛び、壁に衝突する。
ゼットは体制を立て直すと
『1！　2！　3！　ダーッ!!!』

とアピールをし、魔人へ突進する。
『フフッ……面白い、愚者が光の巨人の力を持つとはな――――
よかろう！　愚者が光の巨人という武器で何処まで抗えるか、存分に試すが良い！』
『ダ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛！゛！゛！゛！゛！゛』
魔人は2振りの魔刀で、ゼットがゼットランスアローでぶつかり合う。
魔人と超人のぶつかり合いが今、始まったのだ。

戦い初めてから3分経過したとき、ゼットの体が突然光りだし、クロスの姿に戻る。
「ぐっ!?　時間切れか……」
『見事だ……　光の巨人の力を借りただけ愚者とその仲間に、3つも持って行かれるとは……我も未熟、か……』
ゼットの変身が解けても、ゼットランスアローを持って戦意を失わないクロスに魔人は止めを刺そうとする。
『……行くぞ、愚者の子らよ。我が攻勢捌いてみよ……《■■■――――》……』
魔人が聞き慣れない言語で呪文を唱えると、灼熱の太陽のような炎を生み出す。
「う、嘘だろ……お前、どっからそんな魔力をひねり出した……ッ!?」
唖然とするグレン達の横でクロスはゼットライザーを取り出し、もう一度、変身しよ

うとアクセスカードをセットしようとする。
だが、ゼットに止められセットすることができなかった。
『やめろ！　今ウルトラフュージョンしたらどうなるか分からねぇぞ！』
「でも！……」
『《――――■■■■》……死ね』
ほんの一瞬で、魔人の謎の魔術が完成してしまう。
すると、クロスの目の前にベリアロクが出現する。
『面白そうだな、斬らせろ！』
「――――ッ!?　おうッ!!!」
クロスはベリアロクのトリガーを3度長押しする。
『ヌウン！
ヌウア!!
ハァッ!!!』
『デスシウムスラァァァァァッシュ!!』
クロスはベリアロクを持ち替える。
「宇宙の理を乱す奴は！俺たちが叩き斬る!!」
そしてトリガーを押すとベリアロクの刀身に紫色のエネルギーの刀身が出現し、クロ

スは太陽のような炎を切り裂こうとする。
「『『ウオオオオオオオオオオオオッ!!!!』』」
全てを焼き尽くす炎を宇宙の理を乱す者を叩き斬る魔剣の一閃がぶつかり合おうとした瞬間。
……いつの間にか、世界が音と色を失い、モノクロ調に染まっていた。
魔人も、その頭上にあった炎さえも、停止している。
全てが灰色になった世界で、色と音を失わずにいるのは、グレン達だけだった。
そしてデスシウムスラッシュが、炎に直撃する。
「これは…?」
『ほぉ、時間停止か……この世界にそのような力を持つ者が居るとはな、俺様も予想外だ』
「時間停止!?」
クロスが驚いていると、後ろのグレン達が騒がしくなっていることに気付く。
後ろを振り向くとクロスも驚愕する。
そこにはルミアにそっくりな少女が立っていたのだ。

短編：【過去・女帝の救済】

『『ゼスティウム光線ッ!!』』

ゼット・アルファエッジはゼスティウム光線を周囲の人工精霊（タルパ）に向かって放つ。

光線が直撃した人工精霊（タルパ）はマナへ変換されていく。

『とりあえずこれで人工精霊（タルパ）は最後か？』

『お疲れ様だな、クロス』

『さて、次の場所に――――』

クロスはゼットと会話をして、その場を去ろうとしたが、ウルトラマンと一体化して強化された眼がグレンに人工精霊（タルパ）をけしかけるジャティスが視界に入り、それを庇おうとした銀髪の女性が見えた。

『不味いッ!?』

クロスは3枚のメダルを取り出すと、メダルをスリットにセットして読み込ませる。

そしてゼットはわざと爆音を起こしながら飛び上がる

『シュワッチ！』

「っ!?」

見事ジャティスの注意を引き人工精霊（タルパ）を止めることに成功する。

《Ｊａｃｋ．》

《Ｚｏｆｆｙ.》
《Ｆａｔｈｅｒ　Ｏｆ　Ｕｌｔｒａ.》
そしてゼットライザーを前へ突きだし、トリガーを押して必殺技を放つ。
「チェストォォォォ――――ッ！」
ゼットライザーに黄金の光剣が出現する。
『【Ｍ７８流（ナナハチ）　竜巻閃光斬】――――ッ!!!!!』
次の瞬間ゼットライザーから竜巻が発生する。
そして巨大な光輪を発生させると、光輪を投げ飛ばす。
光輪はグレン達の元を離れていくジャティスに向かっていくが、人工精霊（タルパ）が彼を庇う。
『今だ！』
ゼットはグレンと銀髪の女性にその場を離れるように促す。
グレン達は、すぐにその場を後にする。
『一応助けれたか……』
『あぁ、そうだな』
ゼットは更に上空へ飛ぶ。
その後、助かったグレンは退職し、ニートになり、銀髪の女性はそのまま特務分室に

残ることになった。